

先、一イ本作府

か、原作く、據一本改

立、一本作ま、又似是

ける、據一本補
○な、據一本補

りて申べき事ありといひけれ共。競馬の乗尻は其日は殊に物忌をして。法師などにはあはぬ事にて下人ども聞入ざりけり。此僧あながちにいひければ久清に告てけり。久清やうこそあるらめと思ひて出あひて尋ければ。僧がいふやう。過ぬる夜の夢に此馬場にて賀茂の神人とおぼしくて。馬場末によこさまに繩を引て勝負の鉢などをさばくりつるを。夢の心ちにあやしみ尋ねれば。院の右の先生の勝負のれう也と云と思ひてさめぬ。賀茂大明神の御はからひにて。かたせ給べしと告ければ。久清おさなくより賀茂につかうまつる者なれば。うれしくたのもしく覺へて。勝て後悦は申べしといひて返してけり。其期に成て久清敦文うちつがひて。敦文前に立たりけるが。少しまどけなく見えけるを。久清かたきをあなづりて遠ながら追てけり。敦文が馬よく出あひてはやく勝にける程に。鞭さして勝負の鉢のもとにて安堵して見歸りたりけるに。久清追着て敦文がくびかみに手をかけたりければ。敦文落て久清勝にけり。勝ながらもあまりに不思議にて。久清丈尺にてうちて見ければ。梓例よりも一丈あまり遠く立たりけり。彼僧が夢も思ひあはせられて。大明神の御はからひかたじけなく覺へけり。例の寸法にて立たらましかばはやくまけなまし。不思議なりける事也。此僧にはよろこびいひたりけるとかや。敦文程のものに此程の勝負出したりとて。勝ながら御氣色あしかりけるとなん。まして負なましかば定てよか

明神、一本作神

るまじきに。明神の御はからひかたじけなかりけり。此久清度く競馬仕けれ共一度もまけざりけり。數すくなく乗てまけぬ者はおほかれども。かゝるためしは未だきかざる事也。

承元元年より三ヶ年が間。新日吉小五月會に北面の下臈に隨身をあはせられけり。同二年の五番の乗尻左兵衛尉大江高遠。右大將野々宮左大臣公繼。下臈佐伯國文とさだめ下されけり。高遠は馬にもまた、かに乗うへ。大男にて強力の聞へ有けり。國文は小男無力のものなりければ。疑なくとりてすてられなんずと人々もおもひたりけり。高遠も傍輩にあひて。高遠が小ゆびと國文がかひなといづれかふときなど云けり。去ほどに打ちがひて高遠まへに立たりけるを。國文追てやがて高遠をとりおとしつ。高遠落さまに國文が馬のみづゝきを取てひざまづき立けるを。國文取もあへずをのが馬の手綱おもがいをおしはづして平頸をうちてけり。高遠轡を持たながら尻居にまろびぬ。國文が馬轡もなくして走りけるを。中判官親清馬場末を守護して候けるが。其郎等たかまどの九郎國文が馬のくびにいたきつきて。棧敷にをしあてしといめてけり。高遠むなしき轡を持て馬場末に有けるを。國文下人をめして。其轡よも御用候はじ申給らんと江の兵衛殿に申せといひたりければ。國文が郎等すゝみ寄て其由をいひければ。高遠すはとてなげすてたりけり。國文轡はけてあけて参りたりけり。舍人

の、一本元

一人口に付て祿二領たまはりけり。ことに敵感ありけるとぞ。かやうの時おもがいをしはづす事は江帥の記しおかれたるは。馳出して百の術ありと侍なる其一なりとぞ。

て、一本作られ
二字

坊門大納言忠信。左衛門督にて侍ける時。建曆の御禊行幸に。一六といふ馬に乗て供奉せられたりけるに。二條室町にて院の御棧敷の前の幔風に吹あげられたりけるに驚きて。御棧敷の東よりひきて走けるを。馬副引まろばかされて馬をすてしけり。留めける程に轡も切にけるを。靜に靴を片足づぬぎすて。鞭ばかりにて鎧をふみおほせて後。馬のはなをかきて二條烏丸なる棧敷の前にてとめられにけり。見る者目を驚かしけり。其棧敷ゆかりありける人にて急ぎ轡をはけて奉りけり。すべて御禊にはなどやらん馬より落るためし多く侍り。よくくつしむべきことにや。彼大納言交野の御狩に同じ馬に乗て鹿に付て馳ける程に。鹿淀川に入れば馬もつゝきて入にけり。乘人川にまづみて見えざりければ。上下おどろきあざみあへりける程に。まばし有て物具水干袴みなうき出たりけり。其後はだかにてをよぎ上りけり。水の底にてのどかにぬきとかれけり。水練の程めてたかりけり。かやうの用意にやかねてたうさきをなんかゝれたりける。此馬に乗て二九び高名せられたりける。くせ事になん申あへりける。

御、一本元
先、一本本作府

建保五年新日吉の小五月會に。新院番長秦頼峯府生同武澄つかうまつりけるに。頼峯おふて勝にけるが。馬場末にて落て死たりけるを。郎等はしりて父頼武が御棧敷に候けるに。先生殿の死なせ給ひて候と告たりければ。頼武かいてすて候へといひたりけるに。又下人走りて生いでさせ給て候が。御冠のひしげてえまいらせ給はぬと告たりければ。おのれらが烏帽子ぞかしといひたりければ。則下人が烏帽子を引いれてあけて参たりける。いみじう見えけり。

相撲強力第十五

相撲は振手占手。或は左或は右。皆強力の致所也といへども又取手の相遮事あるにや。昔は禁中にて其節を行はれ。諸國に強力のものを尋めされけり。安元より以來絶て其名のみきく口をしき事也。

の、一本元

延長六年閏七月六日。中の六條院にて童相撲の事有けり。廿番はてし舞を奏す。左は蘇合。右は新鳥蘇。次に新作の胡蝶樂を奏しけり。その曲笛は忠房朝臣。舞は式部卿親王作給ひける。舞終て船吉實散樂を供しけり。次に羅陵王駒形を奏す。式部卿親王に纏頭ありけるとかや。

て、據一本補

相撲宗平。儀同三司の御もとへ参りたりけり。時弘は其御弟隆家の帥の御方へ参りたりけり。帥の仰によりて時弘まきりに宗平をてこひて。もしまくるものならば時

かき、一本元

弘が首を切られん。宗平負ば又宗平が首をきらんなど申けるを。宗平あながちに固
辭せずして則立まゝに。時弘をかきだきて地になげふせたりければ。時弘まばしは
うごかざりけり。帥やすからずや。あほしけん涕泣たまひけるとぞ。あとい宗平に
祿を給はせけるとなん。時弘いづとていかりて門の關の木を折てけり。ある時頼光
朝臣備前守にて有けるとき。時弘が家に行て見ければ。みづから利牛を引もの有け
り。頼光あやしと見ければ時弘にてぞ有ける。

岡、一本作岳、下

いづれの年にか相撲の節に勝岡と重茂とあひたりけるに。重茂が尻を木にすらせけ
るを常世みて。たゞ今に大事出きぬといひけるに。果して重茂木をふみて勝岡にか
かりければ勝岡まるびにけり。小野宮右府はら立て出給にけり。隨身をして人をは
らはせられける程に。秦兼時が冠も打おとされにけり。

今年左の相撲多く負けるを右府あざけらるゝよしを聞て。左の方より夜の間に勝岡
負べきよしを祈をせさせられにけり。此勝岡常正にあひたりけるに。勝岡を火焼屋
になげつけたりけり。後の度は勝負を決せず。公保常時聞て。奇異の事也。かくばか
りの相撲聲を出して勝負せざる事いまだきかざる事也。世の人推することの侍ける
とかや。此事は後一條院の御時の事にや。相撲の節に久光といふ相撲爪をながくお
ふして敵をかきけるに。常世に合られたりけるに。常世一兩度顔の程をかゝれて後。

て、據一本補

な、一本元

久光が頭をつめてせめたりけるに久光悶絶してけり。相はなれて今より後けかゝ
ることせじとぞいひける。其後あへてちかづかざりけり。左大將しきりにちかづき
勝負をすべきよしはれけれどもなをちかづかざりけり。しからずは禁獄すべきよ
しを下知せられければ。久光いはく。禁獄は命うすべからず。常世にちかづきては命
あるべからずとぞ申ける。

承徳二年八月三日。瀧口所の衆等かたをわけて。馬場殿にて相撲有べしと沙汰有け
り。念人左方は頭弁基綱朝臣以下。右方は頭中將顯通朝臣以下を定られけり。當日に
すてに出御ありける程に。院より子細を申されてといまりにけり。さりながら夜更
て御殿の南面にして密々にとらせられけるとかや。

尾張國の住人おこまの權守。わかゝりける時京に宮仕して侍けるが。ある時かの主
人行幸供奉のために内裏へまいりける供に侍けり。すこし遅参したりけるに。陣頭
に馬車ひとと立たるをわけまいるに。或舍人あやまちせさせたまふな。此御馬は人
をふみ候ぞといふを。權守少しも事ともせず。主人よりさきにすゝみて。御馬引のけ
よ馬の足損ずなといひけり。舍人は馬をはなをさす。猶あやまちせさせ給なとたひ
くゝいひけり。あこまはりうらのかりぎぬの殊にさやめきたるをなん着て。馬の尻
にわざとあたらんととをるを。案のごとく馬ふみてけり。腰のほどにはあたりぬら

させ、據一本補

ひらみ、據一本
御、一本无

んと見えつるに。おこまは少しも事なし。馬はやがて足を損じてひらみふしにけり。其時おこま立かへりて。さればこそいひつれ。其御馬は損じぬる物をといひて通りにけり。馬の足のそんなる程につよくあたりたるを事ともせでありける。つよさのほどおそろしきことなり。

佐伯氏長はじめて相撲の節にめされて越前の國よりのほりけるととき。近江國高島郡石橋を過侍けるに。きよげなる女の川の水をくみて。みづからいたゞきて行女有けり。氏長きと見るに。心うごきてたゞに打過べき心地せざりければ馬よりありて。女の桶とらへたるかひなのもどへ手をさしやりたりけるに。女うち笑ひてすこしもめてはなれたるけしきもなかりければ。いとわたりなく覺へて。かひなをひしとにぎりたりける時。桶をばはづして氏長が手を脇にはさみてけり。氏長興ありて思ふ程にやゝ久敷なれどもいかにも此手をはなたざりけり。引ぬかんとすればいとつよくはさみて。少も引はなつべくもなければ。力及ばずしておめくくと女の行にしたがひて行に女家に入ぬ。水打をきて後手をはづして打笑ひて。さるにてもいかなる人にてかくはし給へるぞといふ。けしき事からちかまさりしてたへがたく覺へけり。我は越前國のもの也。相撲の節といふ事ありて。力つよきものを國くよりめさるゝ中に入て參るなりとかたらふを聞て。女うなづきてあぶなき事にこそ待なれ。

いさゞ、一本作
いさゞ

は、一本作も

へ、原作き、據一本
本改

王城はひろければ世にすぐれたらん大力も侍らん。御身もいたくのかひなしにてはなけれども。さほどの大事に逢べき器にはあらず。かく見參しそむるも然るべき事也。彼節の期日はるかならばこゝに三七日逗留し給へ。其程にちとりかひ奉らんといへば。日數もありけりくるしからじと思ひて。心のとゞまるまゝに。いふにしたがひてとゞまりにけり。其夜よりこはき飯を多くしてくはせけり。女みづから其飯をにぎりてくはするに少しもくひわられざりけり。はじめの七日はすべてえくひわらざりけるが。次の七日よりはやうくくひわられけり。第三七日よりぞうるはしうはくひける。かく三七日が間よくいたはりやしなひて。今はとくのほり給へ。この上はさりとともこそ覺ゆれといひてのぼせけり。いとめづらかなる事なりし。件の高島のおほる子は田などおほく持たりけり。田に水まかする比。村人水を論じてとかくあらそひて。おほ井子が田にはあてつけざりける時。おほ井子夜にかくれて。おもての廣さ六七尺ばかりなる石の四方なるをもて來りて彼水口に置きて。人の田へ行水をせきて我田へ行やうによこざまにおきてければ。水おもふさまにせかれて田うるほひにけり。そのあした村人共見ておどろきあざむ事限なし。石を引のけんとなれば百人計しても叶ふべからず。させば田皆ふみせんせられぬべし。いかゞせんとして村人おほ井子に降をこひて。今より後はおほしめさん程水をばまかせ侍べし。

い、據一本補
侍るさなん
本作侍り二字
私云以下分注
一本補

此石のけ給へといひければ。さぞ覺ゆるとて。又夜にかくれて引のけてけり。其後はながく水論する事なくて田やくる事なかりけり。是ぞ大井子が力あらはしそむるはじめ也ける。件の石大井子が水口石とて彼郡にいまだ侍るとなん。私云。此大井子は
何様成者共不見

可尋宇治左府。隨身公春を不便なる物に思召たる事めだしき程の事也。或時いかなる事か有けん。みづから公春うたんとせさせ給けるに。公春おとこの御手をとりにて。もしうたせ給はし御手を折べし。君といふ共いかでかうたせ給べきと申ければ。おとど罪をこはせ給ひてのがれ給ひにけり。公春笑て申けるは。君十人といふとも公春一人にわたり給ふべからず。今より後もかゝる事なせさせ給ひそと申ければ。おとど承諾せさせ給ひけり。それより御勘當なかりけり。公春は大力にてなん侍ける。

中納言伊實卿。相撲競馬などを好みて學問などをばせられざりけるを。父のおとど伊通公つねに勘發し給けれども猶しひられざりけり。其時相撲なにかしとかやいふ上手有けり。敵の腹へかしらを入れて。かならずくじりまろばしければ。是によりて腹くじりとぞいひける。件の相撲をしのびやかにめしよせて。この中納言相撲をしのび好むがにくきに。くじりまろばかせ。さらば纏頭すべし。しからずばなくなさんずるとぞと仰合られにけり。則中納言に汝が相撲このむに此腹くじりとつがひて勝

しひ、一本作
り、似是

れ、原作り、今従
一本

負を決すべし。勝たらばわれ制止する事あるべからず。負たらんにをきては永く此事停止すべしとの給ひければ。中納言恐れをなしてかしまりておはしけり。去程に中納言腹くじり召いだされてやがて決せられける程に。中納言は腹くじりが好ままに身をまかせられければ。悦てくじり入てけり。其後中納言腹くじりが四辻をとりて。前へつよくひかれたりければ。頸もをれぬばかりに覺へて。やがてうつぶしたふれにけり。おとど興さめ給ふ。腹くじりはちくてんにけり。其後中納言相撲制止の沙汰なかりけり。

鎌倉前右大將家に。東八ヶ國うちすぐれたる大方の相撲出來て申て云。當時長居に手向ひすべき人覺へ候はず。畠山庄司次郎ばかりぞ心にくう候。それとても長居をばたやすくはいかてかひきはたらかし侍らんと。詞も憚らずいひけり。大將聞給て此事ねたましう思給ひたる折ふし重忠出來りけり。白水干に葛ばかま黄なる衣をぞ着たりける。侍に大名小名所もなく居なみたる中をわけて座上にひしと居たりける。大將猶ちかくそれへくと有けれ共かしまりて侍けり。扱物語して抑所望の事の候を申出さんと思ふが。定めて不祥にぞ侍らんずらんと思ひ給ひながら。又たゝにやまんも忍ひがたくて思ひわづらひたるとの給はせければ。重忠とかく申事はなくて。かしまりて聞るたりけり。此事たびくになりける時。重忠ちと居なほ

りて。君の御大事にて候共いかでか子細を申候はんといひたりければ。大將入興し給て。其庭に長居めが候ぞ。貴殿と手合をして心見ばやと申也。東八ヶ國打すぐりたるよし自稱仕つるがねたましう覺へ候へば。頼朝なり共出て心みばやと思ひ給へ共。とりわきそこをてごろ申ぞ。心み給へとの給はせければ。重忠存外げに思ひて。いよくふかくかしてまりていふ事なし。大將さればこそ是は身ながらもひあひの事にて候。去ながらも我が所望此事にありと侍ける時。重忠座を立て閑所へ行て。くりすへ烏帽子かけなどしてけり。長居は庭に床子に尻かけて候ける。それもたちてたうさきかきてねり出たり。まことに其體力士のごとくに見えければ。畠山もいかいとぞ覺へける。扱寄合たりけるに手合して。長居畠山がこくびをつよく打て。袴のまへごしをとらんとしけるを。畠山左右のかたをひしとおさへてちかづけず。かくて程へければ。景時今は事がら御覽候ひぬ。さやうにてや候べからんと申けるを。大將いかにさるやうはあらん。勝負有べしとの給はせはてねば。長居をしりるにへしすへてけり。やがて死入て足をふみそらしければ。人々寄りてをしかゝめてかき出しにけり。重忠は座にかへりつゝ。事もなく一言もいふ事なくて頓て出にけり。長居はそれより肩のほねくだけで。かたは者になりてすまひとる事もなかりけり。ほねをとりひしぎにけるにこそ。目おどろきたることなり。

其據一本補

近比近江國かいづに金といふ遊女有けり。其所のさたの者也ける。法師の妻にて年比すみけるに。件の法師又あらぬ君に心をうつしてかよひけるを。金もれ聞てやすからず思ひけり。ある夜合宿したりけるに。法師何心なくてれいのやうに彼事くはだてんとて。またにはさまりたりけるを。其よは腰をつよくはさみてけり。しばしはたはぶれかと思ひてはづせ〜といひければ。猶はさみつめて。和法師めが人あなづりして。人こそあらめおもてをならべたるものに心うつして。ねたきめみするに物ならはかさんと云て。たゞしめにしめまさりければ。既にあはをふきて死なんとしけり。其時はづしぬ。法師はくた〜と絶入て。わづかに息ばかりかよひける。水吹などして一時ばかり有ていきあがりけり。かゝりける程に。其頃東國の武士大番にて京上すとて。此かいづに日だかく宿しけり。馬ども湖に引入てひやしける。其中に竹の棹さしたる馬のすしげなるが。物におどろきて走りまひける。人あまた取付て引とめけれ共。物ともせず引かなぐりてはしりけるに。此遊女行あひぬ。少しもおどろきたる事もなくて。たかきあしたをはきたりけるに。前をはしる馬のさし繩のさきをむずとふまへてけり。ふまへられてかひこづみてやす〜ととまりにけり。人〜目をあどろかす事がざりなし。其あした砂ごに入てふかく入て。足くひまでうづまれにけり。それより此金大力の聞え有て。人おちあへりける。みづから

て、據一本補

入て、據一本補

いひけるは。わらはをばいかなる男といふとも五六人してはえしたかへじとぞ自稱しける。ある時は手をさし出して五のゆびごと弓をはらせけり。五張を一通にはらせらせける。ゆびばかりの力かくのごとし。誠におびたしかりける也。

鳥羽院御代相撲の節の後。帥中納言長實卿のもとへ。小熊權守伊遠ときこゆる相撲。息男伊成を具してまいりたり。さるべき方へめし入て酒などすゝめらるゝに。弘光といふすまう又來りけり。同じく召くはへて盃酌たびくゝに及ぶ間。弘光酒狂のことはを出すあまりに。亭主の卿に向ひて申。近代の相撲はせいなど大きに成ぬれば。左右なくほてをも給はり。そのわきにもまかりたつめり。むかしは雌雄をけつして蕨能あらはるゝに付て。昇進をもつかうまつりしかば。傍輩口をふさぎ世の人これをゆるしき。近代はいさみなき世にも侍かなと申。伊遠少し居なをりて。是はひとへに伊成が事を申也。不肖の身今度すでに寂手の脇をゆるされぬ。誠に申さるゝ所のがれがたし。但ちと心み候へと申しぬ。弘光ほゝゑみてたゞ道理のをす所を申ばかりなり。心「得」みられんは又さひはい也とて。左の手を出してこひけるを。伊成は袖をかきあはせて。かしまりて猶父のけしきをうかひひけるを。又弘光かやうに申うへは。只心み候へとたびくゝいひければ。弘光がいだす所の左の手を。伊成が右の手してひしと取てけり。弘光ひきぬかんと身をうごかしけれ共たぢろかざりけれ

是力、一本作刀、似

よりて、一本元

ら、原作と、今従

ば。たはぶれにもてなして右の手をこしの力にかけて引ぬかんとする氣色にて。すぢなげに見えければ。いまはさばかりにて候らへと。伊遠申ければはなちてけり。弘光かやうの手合はさのみこそ侍れ。勝負これによるべきにあらず。ひとさしつかうまつるべしといひて。かくれにはしりよりてふたつの袖を引ちがへ。はかまのくゝりたかくからみあげて庭へあゆみ出て。是へあり候へくと申。伊成はめかけながらかしまりたりけるを。父伊遠いかに加程に申うへははやくまかりありて一さしつかうまつるべしと申に。伊成もかくれのかたにて腰からみて。庭にをりて立むかひにけり。形體拔羣勇力軼人。鬼王のかたちをあらはして。力士の忽に來るかと思えたり。弘光又敵對にはぢすとみえける。凡亭主をはじめとして。諸人目を驚かし心をさはがしてさゝめきあへる程に。伊成すゝみよりて弘光が手をとりにまへごまへつよく引たるに。うつぶしにまろびぬ。あへなき事限りもなし。弘光程なく立あがりて。是はあやまち也。今一度さかふべしとてあゆみよるに。伊成又父の氣色をうかがひてすゝまぬを。伊遠たゞせめよせて心み候へといひければ。又弘光が手をとりにまろびぬとばかり有てあきあがり。烏帽子の落たるををし入て。帥の前にひざま付て。ほろくゝと涙をこぼして。君の見參に入侍らんも今日はかりに侍とて走り出にけ

り。其後やがてもとよりをし切りて法師に成にけるとぞ。法皇此事をきこしめして。はなはだをんびんならず。塚手の脇などに昇進したるものをば公家猶たやすく雌雄を決せられず。いかにいはんや私の勝負に生涯をうしなはする。らうせきの至也と仰られて。長實卿御けしきころよからざりけり。

古今著聞集卷第十終

古今著聞集卷第十一

畫圖第十六

畫圖者。五色之章相宣。萬物之形無道。容止可觀。進退有度。自想心遊。蓋即閑中之趣也。

南殿の賢聖障子は寛平の御時始てかゝれける也。其名臣といふは馬周。房玄齡。如晦。魏徵。自東二。諸葛亮。遽伯玉。張良。第五倫。同二。管仲。列禹錫。子産。蕭何。同三。伊尹。傅說。太公望。仲山甫。同四。李勣。虞世南。杜預。張華。自四。羊祜。揚雄。陳寔。班固。同三。桓榮。鄭玄。蘇武。倪寬。同二。董仲舒。文翁。賈誼。叔孫通。自四。等也。此人の影をかゝれける。彼麒麟閣の功臣を圖せられたる跡をおはれけるにや。はじ

是、一本作玩、似

二、據一本補
錫、據一本補
四、一本作一

三、一本作三〇三
一本作三〇二
一本作四
な、據一本補

道風、一本作東
風、原作め、據一
本改
て、據一本補

要須、原作宴頃、
據一本改
ちいさく、一本
作少々、似是

王、原作牛、據一
本改

小、一本无
こ、一本无

子、一本作掃

めは色帯形に銘をかゝれたりけり。されば道風朝臣の申文にも。七度けがせるよし載たり。其銘いつ頃よりかゝれずなれるにか。當時はみえず。色紙形ばかりぞ侍りける。承元に閑院の皇居焼て。即造内裏ありけるに。本は尋常の式の屋に松殿作らせ給たりけるを。此度あらためて大内に摸して。紫震。清涼。宜陽。校書殿。弓場陣座など要須の所々たてせられける。土御門の内裏のかゝりける所とぞ聞えし。地形せばくて紫震殿の間敷をしむめられける時。賢臣の影もちいさくといめられにけり。建長の造内裏の時。少々又用捨せられける。くはしく尋て注すべし。大内にては此障子をみなはなちをかれて。公事の時ばかりぞ立られける。御秘藏の儀にて侍けるにや。建曆に閑院にうつされて後は。すべてとりはなたる事なし。又鬼間の壁に白澤王をかゝれたる事は。むかし彼間に鬼のすみけるを鎮られける故にかゝれたる事とは申つたへたれども。たしかなる説をしらず。又清涼殿の弘庇に衝立障子たて、昆明池を圖せられたり。そのうらに野を書て片方に小屋かたあり。又近衛司の鷹つかひたるをかけり。是は雜藝に侍る嵯峨野に狩せし少將の心とぞ。彼少將といふは大井川のほとりにすみける季綱の少將の事にや。かの大井川の家を出て嵯峨野に狩しけるをうつしけるにこそ。又萩の戸のまへなる布障子を荒海の障子と名付て手長足長など書たり。その北うらは宇治の綱代をかけり。清少納言が枕草子に此障

此かた、一本作
以往

子の事も見えたり。一條院此かたにかゝれたるところ。大かた清涼殿の唐繪にもみな書ならはせる事も侍り。渡殿にはね馬よせ馬の障子を立て。又同じ渡殿の北邊朝がれるの前に馬形の障子侍り。陣座の上に李將軍が虎を射たる障子をよせかけ。棧書殿には養由基が猿を射たる障子を寄立たり。これみないづれの御時よりといふを事しらず。由緒がたゞおぼつかなし。閑院に大内を移されて後。よせ馬の障子并に李將軍養由基が障子など沙汰なかりけるを。四條院御時。西園寺相國禪門修理せられける時。頭中將資季朝臣申起てたてられたり。いと興ある事也。此障子の繪本ども鴨居殿の御倉にぞ侍なる。建長造内裏の時。繪所の預前加賀守有房繪本をもたざりければ取出してかゝせられけり。昔し彼馬形の障子を金岡が書たりける。夜はなれて萩の戸の萩をくひければ。勅定有て其馬をつなぎたるていを書なされたりける時。はなれず成にけりと申傳へ侍るは誠なりける事にや。

仁和寺御室といふは寛平法皇の御在所なり。其御所に金岡筆をふるひて繪かける中に。ことにすぐれたる馬形なん侍るなる。その馬夜はなれて近邊の田をくらひけり。なにもものゝすると知れるものなくて過侍りける程に。件の馬の足につち付て。ぬれくとある事たゞに及ける時。人々あやしみて此馬のしわざにやとて。壁にかきたる馬の目玉をほりくじりてけり。それよりまなこなくなりて田をく

て、據一本補
玉、一本元

ら、一本元

陽、據一本補
たまひて、原作
たひひに、據一
本改

信心、原作信心
據一本改○さ、
據一本補

釋、一本作鉾
命、一本元

は、一本元○輕
々、一本作輝々
或是○聞、原作
き據一本改

らふ事といまりにけり。

花山院法皇書寫上人の徳をたうとび給ふあまり。繪師をめしぐして彼山にのぼらせたまひて。御對面の間に繪師といふ事をばかくして。上人のかたちをよく見せて。かくれてうつさせられけり。其とき山ひき地うごきければ。法皇おどろきおぼしめしける御心をしりて。是は性空がかたちをうつし給ふ故に。ないのふり候也と申されければ。いよく信心おこさせ給ひけり。扱ひじりの御顔にいさゝかあざのおはしけるを。繪師見おとしてかゝざりけるを。ないのふりけるさはぎに筆をおとしかけたりけるが。そこにしも筆おちて墨つきたりけるが。あざにたがはずなん侍りければ。みな人ふしぎの事になんおもへりける。件の影今にかの山の寶藏にありとなん。

弘高地獄變の屏風を書けるに。樓の上より棹をさしおろして人をさしたる鬼を書たりけるが。殊に魂入て見えけるを。みづからいひけるは。おそらくは我運命つきぬと。はたしていく程なくてうせにけり。六條宮具平。御堂に申給ひけるは。布障子の役などには今は弘高をばめさるべからず。輕々なるべき事也。弘高聞て自愛しけり。此弘高は金岡が曾孫。公茂が孫。深江が子也。公忠公茂兄よりさきはかきたる繪生たる物のとし。公茂以下今の躰には成たるとなん。弘高少年の時出家したりけるが。後に

還俗したるもの也。其罪をおそれて。みづから千體の不動尊を書て供養しけるとな
ん。

帥のおとゝに屏風を賣人有けり。公茂弘高などに見せられけり。公茂弘高をまねき
ていひけるは。此野筋此松汝及べからず。おそらくは公忠がかく所か。弘高承伏しけ
り。公茂が云。公忠は屏風をかくとは必ずその屏風のひらのすみごとにおのれが
名を書けり。こゝろみにはなちて見るに。あんのごとく公忠が字ありけり。いみじか
りける事。

小野宮のおとゝ。つゝみだち障子に松をかゝせんとて常則をめしければ。他行したり
けり。さらばとて公望をめしてかゝせられにけり。後に常則をめして見せられけれ
ば。かしら毛芋に似たり。他所難なしとぞ申ける。常則をば大上手。公望をば小上手
とぞ世には稱しける。

爲成一日が中に宇治殿の屏の繪をかきたりけるを。宇治殿仰られけるは。弘高は繪
様をかきて一夜なをよく案じてこそかきたりしか。いかにかく卒爾にはかくぞとな
ん仰られける。常則が書たる師子形を見ては。犬ほへにらみておどろきけるとなん。
成光開院の障子に鶏をかきたりけるを。實の鶏みて蹴けるとなん。此成光は三井寺
僧興義が弟子になん侍ける。

毛芋、一本作も
井
の、繪一本補
は、據一本補

卷、一本作局、即
卷字古跡

能通。繪師良親に屏風二百帖に繪をかゝせたりけり。其中坤元録屏風をば良親相傳
の本にてなん書侍ける。大女御まいり給ける時。二條殿にまいらせさせてんけり。色
紙形は四條大納言ぞかゝれける。更に又爲成をしてうつされけり。正本は一の人の
御相傳の物に侍にこそ。又和漢抄は屏風には中卷水をかき。上に唐繪をかき。下にや
まと繪を書たりけり。唐繪の屏風は實範つたへたりけるを。成章に活却しにけると
ぞ。

永承五年四月廿六日。麗景殿女御に繪合ありけり。彌生の十日あまりの比より其沙
汰有けるに。春の日のつれづれにくらすよりは。つねならぬいどみ事を御前に御覽
せさせばや。むかしよりきこゆる花合は。ちりてふるき根にかへりぬればにはひ戀
し。草合は尋て本の所へかへしやれば名残うるさし。哥林とかいふなるよりは万葉
集まではこゝろもあよばず。古今後撰等青柳のいとくりかへしみれどもあかず。紅
葉の錦そめいだす心もふかき色なれども。左右をさだめて哥のこゝろよみ人を繪に
書て合られけり。いにしへの哥のふるきにそへて。今の言葉の淺きがまじりたらん
めづらしくやとて。哥三をつらねけり。題は鶴卯花月になん侍りける。此比は郭公な
どこそあるべきを。大殿の哥合の題に侍ればとて鶴にかへられける也。相摸。伊勢大
輔。左衛門命婦ぞ讀侍ける。女房廿人。十人づゝをわかちて。各繪かく人を傳々に尋

三を、一本作よ
み同一本與此同

る、一本作り
る、原作り、據一
本改

は、一本元

浮線、原作浮線、
據一本改
を、據一本補

哥、據一本補○
文、一本作紋

たり、一本作り
り○御、原作、
據一本改

七、原作共、據一
本改

てかゝせけり。寢殿の東西の母屋庇を上達部の座とす。源大納言。師房。小野宮中納言。
資平。左衛門督。隆國。新中納言。俊家。中宮權大夫。經輔。右大弁。經長。三位侍從。基平。など
ぞ參られける。殿上人はくらべ馬のさだめしける間なりければ。其所より右頭中將
つぎの八九人ばかり引つれて參ける。御簾の内には北面分ちてゐたり。左なで
しこがさね。右藤がさねの衣をなんき侍ける。左かねのすき箱に心ばへして。かれの
むすび袋に色く玉をむらごにつらぬきてくりにして。古今の繪七帖あたらし
き哥繪のかねのさうし一帖入りたり。表紙はさまくにかざりたり。打敷罫麥のふせん
れうに卯の花を縫たりけり。敷さしの金の洲濱にさしてのをかをつくりて。葉山に
松おほくうへたり。敷には松をさしうつすべき也。打敷ふかみどりの浮線綾なり。右
かゝみ海にかねの鶴かけたり。かねの透箱をうけにをきて繪のさうし六帖あたら
しき哥繪のさうし一帖を入。表紙の繪さまくなり。打敷二藍のさうかに白き文を
ぬひたる。敷さしの金の洲濱に金の鶴あまたたり。千とせつもれるといふ心なる
べし。敷にはつるのうらづたひすべき也。打敷ふかみどりのさうかに縫物をしたり。
日漸暮ぬればこなたかなたに居わけたり。大臣殿はつゝみ給御姿なれど。上臈もの
し給ふとて忍びあへ給はず。左四位少將右兵衛佐かたぐの双紙とりてよみ合する
ほどに。左のかたより頭弁人く七八人引つれて參りたり。かたぐうるはしくな

一二、原作三、今
從一本

に、據一本補○
たれ、一本作り
れ、一本此同
珠、一本此下有
な字

に、一本元

りて一二番上達部の中にさだめやられざりけるを。殿上人の中より勝負はいみ有事
など侍りしかば。げに此繪どもおぼろげにてはみさだめがたき事のさまなればとて
勝負なし。なか／＼かちまけあらんよりは。みだれておもしろかりけり。あたらしき
哥をばをの／＼つがはれけり。相摸が卯花の秀哥よみたるは此たびの事也。
みわたせはなみのしがらみかけてけり卯の花さける玉川の里。
かはらけあまた／＼びになりて。ひき出ものなど有けるとかや。
玄象撥面の繪は消て久しくなり。にたればしれる人なし。二條殿教通。仰られけるは。
玄象撥面の繪様は馬上にて打珠の物。要目に珠・さして舞たるすがた也。良道が撥面
はくだんの繪を摸してかゝれたるとなん。此事中納言師時卿記し置侍り。しかある
を。良道が撥面當時其儀なし。もしかきあらためられたるにや。たうじの繪様はあけ
まきの童子龍に乗て水瓶をもちて。瓶より水をながしたるを書たるなり。後高倉院
御時。孝道朝臣勅定によりて琵琶を造進しける時。仰に琵琶には作者の名を付べし
とて孝道をうつされたる。龍にのりたる總角の童子にて侍なり。良道が名も作者
の名を付られたるとかや。又ぬしの名なりともいふ。いづれか實説に侍らん。尋ぬべ
し。
鳥羽僧正は近き世にはならびなき繪書なり。法勝寺金堂の扉の繪かきたる人。い

より、一本作ち
り〇て、據一本
補いれ、一本此
下有たり二字

侍、原作寺、今從
一本

思ひ、一本作ま

つ程の事にか供米の不法の事有ける時繪にかゝれける。辻風の吹たるに米の俵をお
ほく吹上たるが。塵灰の如くに空にあがるを。大童子法師原はしりよりて取といめ
んとしたるを。さまざまにおもしろう筆をふるひてかゝれけるを。誰かしたりけ
ん。其繪を院御覽して御入興ありけり。其心を僧正に御尋有ければ。餘りに供米不法
に候て實の物は入候はて。糟糖のみ入て軽く候ゆへに辻風に吹上られ候を。さりと
てはとて小法師原が取といめんとし候がおかしう候を書て候と申されければ。比興
の事也とて。それより供米の沙汰きびしくなりて不法の事なかりけり。
同僧正の許に繪かく侍法師ありけり。餘りに好ならひければ。後ざまには僧正の筆
をも恥ざりけり。此事を僧正ねたましくや思はれけん。いかにもして失を見出さん
と思ひ給所に。或時件の僧人のいさかひして腰刀にてつきあひたるを書て自愛して
るたりけるを。僧正見給に。其つきたる刀せなかへこぶしながら出たりけり。よき失
と思ひての給ひけるは。わ僧が繪かきなかくとむべし。いかなる者か人を突に拳
ながらせなかへ出る事あるべき。つか口までつきたるなどをこそいかめしき事に
はいふを。これは有べくもなき事也。かく程の心ばせにては繪かくべからずといは
ければ。此僧かいかしこまりて。其事に候。これは繪の故實に候也といふを。僧正い
はせもはてず。わ法師が繪の故實かたはらいたしといはれけるに。少しも事とせず。

おそ、一本此下
有ら字

おほく、一本作
おほえ、亦似是

是、原作、據一
本改〇ほ、據一
一本補
て、據一本補

さも候はず。ふるき上手どものかきて候おそくつの繪などを御覽も候へ。その物の
寸法は分に過て大に書て候事いかでか實にはさは候べき。ありのまゝの寸法にかき
て候は、見所なきものに候ゆへに。繪そら事とは申事にて候。君のおそばされて候
物の中にも。かゝる事はおほくこそ候はめとへりもをかざいひければ。僧正ことは
りにおれていふ事なかりけり。
後白河院御時。年中行事を繪にかゝれて。御賞翫のあまり松殿へ進せられたりけり。
こまかに御覽じて御事ある所へに押紙をして。そのあやまりを御自筆にてまゐりし
付て返進せられたりけるを。法皇御覽じて。繪を書なをさるべきに。勅定に。是ほど
の人の自筆にて押紙したる。いかにはなちすて、繪をなをす事あるべき。此事によ
りて此繪すでに重寶と成たるとて。蓮花王院の寶藏にこめられにけり。其押紙今に
ありと。いといみじき事也。
同御時繪難房といふものありけり。いかによく書たる繪にも。かならず難を見いだ
すもの也けり。或時ふるき上手どもの書たる繪本の中に。人の犬を引たるに。犬すま
ひてゆかじとしたるてい。まことにいきてはたらくやう也。又男のかたぬぎてたつ
きふりかたげて大木を切たるあり。法皇の仰に是をば繪難房も力及はじ物をとて。
すなはちめして見せられければ。よく見えて。目出度はかいて候が難少々候。これ

ら、原作し、據一
本改、據一本補○
頭、一本作不、恐
據音通誤者
に、一本无

にか、一本无

補
すらん、據一本

程すまひたる犬の首繩はしたはらのしたよりよくひきすゞされて候べき也。是は犬
はすまひて頸繩普通なるていに見へ候也。又木切たる男目出度候。但これ程の大木
をなからずぎ切入て候に。只今ちりたるこけらばかりにて。前にちり積りたるなし。
これ大きな難に候と申ければ。法皇仰らるゝ事もなくて繪をおさめられにけり。
伊與入道はおさなくより繪をよく書侍り。父うけぬ事になん思へりけり。無下に幼
少の時。父の家の中門の廊の壁にかはらけのわれにて。不動の立給へるを書たりけ
るを。客人誰とかや體に聞しを忘れにけり。是を見て。たがかきて候にかとおどろき
たるけしきにて問ひければ。あるじ打わらひて是はまとしきものゝかきたるには候
はず。愚息の小童が書て候といはれければ。いよく尋ねて。可然天骨とは是を申
候ぞ。此事制し給事有まじく候となんいひける。げにもよく繪みしりたる人なるべ
し。
東大寺供養の時。鎌倉右大將上洛ありけるに。法皇より寶藏の御繪どもを取出され
て。關東にはありがたくこそ侍らめ。見らるべきよし仰つかはされたりけるを。幕下
申されけるは。君の御秘藏候御物にかたか頼朝が眼をあて候べきとて。恐をなし
て一見もせて返上せられにければ。法皇は定めて輿に入らんすらんと思召たりけ
るに。存外にぞおぼしめされける。

注、原作は、據一
本改、原作の、今従
一本
な、一本作い
かなる、似是
奉り、一本此下
有たり二字
ひへざり、原作
此大鳥、據一本
改、大鳥、據一本
な、一本作
なると

後鳥羽院御幸供奉人ども誠にえらばせ給て。御あらましに此定に御幸あらばやと
て。信實朝臣に仰られて三卷の絹繪にかゝせられけり。八條左大臣光明峯寺殿左右
の大臣にて供奉し給へり。目出たき重寶にてぞ侍し。今は修明門院に侍とかや。此御
幸御あらましばかりにて實にはなかりけり。
順徳院の御位の時。あたらしき御琵琶のありけるを。いかなる名をかつくべきとて。
藏人孝時に風俗催馬樂の名并に其哥の詞の中に。さもありぬべからん注申すべきよ
し勅定ありければ。則注進しけり。其中に大鳥を入たりけるを。これにてこそあらめ
とて其名にさだまりにけり。さて撥面の繪にかゝれんとまける時。そもく、此鳥の
姿はなにもものぞ。誰か知りたると御尋有けるに中人なかりけるに。源大納言通具卿
繪様候とて奉りけり。ひへどりの色したる鳥の目睛などおそろしげなるが。ふとく
みじかなる姿なるを書て。参らせたりけり。御覽じて是はなに、見えたるぞとふるく
書たる本の有か。又此定なにぞ注したる物のあるかと御尋あるに。大納言つまびら
かに申むねなし。只わがもとにふるくよりうつしもちて候とばかり申されけり。さ
ては其事正躰なし。此人はをし事する人にこそと沙汰ありて。もちあられず成にけ
り。さて孝道朝臣に御たづねありければ。風俗にうたひて候やうは。大鳥の羽に霜ふ
れりと候は。もし鶺鴒などにてや候らんとぞ推せられて候。さらでは口傳も候はず。只

哥のことばにて推し申ばかりにて候と申ければ。此事さもありとて鵠をかゝれたる
とぞ。

後堀河院御位すべらせ給て。内大臣の冷泉宮小路亭にわたらせ給ひけるに。天福元
年の春の比。院藻壁門院の「方」方をわかちて繪つくの貝おほひありけり。大殿攝政殿
女院の御方にぞおはしましける。一方にしかるべき女房達四五人ばかりにて日かつ
きには及ざりけり。先女院の御方の御方負させ給て。源氏繪十卷たみたる料紙にか
いて。色々の色紙に詞はかゝれたりけり。能書の聞えある人々ぞかゝれたる。から
の唐櫃になん入られたりける。御妬に院の御方御負ありて小衣の繪八卷。又さまざま
の物語ませて四季に書て。一月を一巻に十二巻にせられたりけり。料番こと葉源氏
の繪のとし。其外雜繪廿餘卷あたらしく書出して。おなじくからの櫃二合に入られ
たりけり。あはせて三合也。又風流の繪など小衣の繪に入てくはへられたりけると
かや。御負わざの日になりて。殿たち女院の御方に參給てせめ申されければ。ふるき
繪のいまくしげにやぶれたるを二三卷。近習の殿上人の小童なりけるして進ぜら
れければ。様々にきらひ申されていと興有けり。其後秘藏の繪どもは出されけり。兩
方の御繪ども姫君方へまいらせられけるが。失させおはしましてのち四條院へ參り
たりけり。其後内侍のかみへぞまいりける。今はいつくにか侍らん。時代いく程もへ

の、一本无、當行
つ、一本作

り、一本作る

君、一本无

だゝり侍らねども。御ぬしはおほくかはらせ給ぬ。はかなき筆のすさみなれども。繪
はこのこりてこそ侍らめ。あはれなる事也。

同御時似繪を御好みありけるに。北面下臈御隨身などの影を左京權大夫信實朝臣を
めしてかゝせられけるに。大夫尉永親その様をもあらず。なべらかなる白襖きて北
面に候けるが。めし出されける時太刀をとりてはきて參たりける。いみじうなんみ
え侍ける。

繪師大輔法眼賢慶が弟子になにかしとかやいふ法師有けり。賢慶逝去ののち後家と
不快になりて相論の事有けり。六波羅に訴へけれども。事ゆかて程へければ。此法師
繪もさかしく書けるものにて。くだんの後家がありさまふるまひをはじめよりかき
あらはしてけり。ま男して會合したる所などさまざまにかきて。えもいはずいんど
りて詞付て。六波羅へ持て行て。奉行の者どもに見せければ。訴訟をことに執申さん
の心はなかりけれども。繪其興あるによりて「も」とかくもてさまよふ程に。兩國司
までも訴訟のむねくはしく心えほどきにけり。つるにかちにけり。件の法師攝津國
宇出庄にいまだあり。

も、一本无、當行
一本改

一條前攝政殿左大臣におはしましける時。居すへたてまつらんとて。一條室町の御
所を光明峯寺入道殿前備中守行範に仰て修理せられにけり。寛元三年十月廿七日御

前、據一本補

わたまし有けり。つくりども、少々あらためられけり。寢殿二棟の障子よりつねの唐繪は無念也とて。平等院寶藏の四季の御屏風を二條前關白殿長者にておはしましけるに申されて。取出してうつされにけり。人々の姿もみな昔繪にてぞ侍るなる。いと見所あり。武徳殿の競馬の所にみも志らぬ人のすがたどもおほかり。嵯峨野の御幸に。御輿の上に虎の皮をおほひたるなどふるき事どもをかゝれたるいと興有り。承保の野行幸には虎の皮をばおほはれざりけるとなん。近衛大殿の御相傳の屏風どもは皆寶物にて侍うへ。そんなればとて。四季の大和繪を一月を一帖に書てあたらしく調せられたるとなん。可然事の時客の座に立ちらるゝ也。元日の節會は豊樂院の儀をぞ書て侍なる。延喜の御時の月の宴。御溝水のながれやうなど。ふるきたがへずかゝれたる。いと興ある事になん侍なる。

蹴鞠第十七

沙、原作妙、據一本改

蹴鞠の逸遊者。前庭之壯觀也。文武天皇大寶元年に此興始まりけるとかや。白沙之上。綠樹之景。二六對陳。殿翼相當。感興難盡者也。後二條殿三月の比。白河齋院へ參給て御鞠の會有けるに。まばし有てかざみ「の」きたる童扇を「か」ざして。片手に詩繪の手箱の蓋に薄様敷て。雪をおほく盛て日隱の間の御縁に置て歸入にけり。御あせなどたりげにて。日隱の間に沓はきながら。御尻か

たまひ、原作なり、據一本改

候、一本作ふ

加、原作候、今從一本〇せ、據一本補

背、一本作香

侍從大納言云々、宜參考成通卿口傳(群書類從)の、據一本補〇下、原作に下、據一本改、一本元當衍、二まうけ、一本作二方かけ、一本補〇は、據一本本作〇は、據一本本作さま

けて御手などにてはとらせ給はて。檜扇のさきにてすこしすくひたまひけるが。まみたる雪にて御直衣にかゝりたりけるがとけて。二重裏にうつりていで、むらゝに見えける。さて御鞠ありける。いとうつくしうやさしくなん侍ける。

知足院殿わかくおはしましける時。白川の邊にてまりの會して遊ばやと思候に。誰をか召加べきと京極殿へ申させ給ければ。まばらく御案ありて。源兵衛佐を召具せよと仰られければ。召につかはしてけり。即參たりけるを。大とのなにか着たると内々御たづねありければ。濃青の布狩衣。とりどころすこしあかみたる薄紫の指貫。濃色の二衣單衣きて候よし申ければ。大殿さればこそと仰られけり。よく装束きたりとおぼしめしたりけるとこそ。

侍從大納言成通卿の鞠は。凡夫のまわざにはあらざりけり。彼口傳に侍るは。鞠を好みてのち。かゝり「の」下に立事七千日。その中日をかゝすとす事二千日。もし病ある時は臥ながら鞠を足にあて。大雨の時には大極殿にゆきてこれをける。千日のはて「い」の日。引つくるひて數三百あまりあげて。落ぬさきにみづから鞠をとりて。柵を二まうけて。一の柵に「は」鞠を置。一の柵にはやうくの供祭を色く「に」すへて。幣一本をはさみたつ。その幣をとりて鞠を拜す。みな座につき饗をすへて勸盃あり。三献の後。身の能を各奉る。五献に事終て祿を賜。よろしき人には檀紙薄様。侍の輩

身、一本元〇小、
一本元〇行、
とへば、原作、
へば、今從一本

りた、一本作れ

出、原作玉、據一
本改

代は、一本作代
々々々々、
據一本補

には装束を給。事はて、人々出ての後。夜に入て其事を記せんとて。灯臺をちかくよせ墨をする時。棚に置所のまり前にまろびて落きぬ。あやしうやうありと思ふ程に。顔は人にて手足身は猿にて三四歳なる「小」兒ちこほどなる物三人。手づからかひて鞠のくくりめをいだきたる。あさましと思ひつゝ何者ぞとあらくとへは。御鞠の性也とたふ。むかしより是ほどに御まりこのませ給ふ人いまだおはしませず。千日のはて、さまざまの物給はりて悦申さんと思ひ。又身のありさま御まりの事をもよく申さんれうに参たり。をのくが名をも知食べし。是を御覽せよとて肩にかかりたる髪を押あげたれば。一人が額には春楊花といふ字あり。一人がひたるには夏安林といふ字あり。一人が額には秋園といふ字あり。文字金の色也。かゝる銘文を見ていよく淺ましと思ひて。又鞠の出生に問様。鞠は常になし。其時住する所ありや。答云。御まりの時はかやうに御まりに付て候。御まりの候はぬ時は。柳志げき林きよき所の木に栖候也。御鞠このませ給ふ代は國さかへ好人司なり。福あり命ながく病なく後世までよく候也といふ。又問様。國さかへ官まさり。命長く病せず福あらんことはさもやあらん。後世までこそあまりなれといへば。鞠性まことにさもおぼしぬべき事なれど。人の身には一日の中にいくらともなき思ひみな罪なり。鞠を好せ給へば。庭にたゝせ給ぬれば。鞠の事より外に思召事なければ。自然に後世の縁と

術、一本作せん

銘、一本此下有
名字
或時、原爲別行、
今從一本

は、據一本補〇
ぞ、據一本補

ぞ、據一本補
時、原作彼、今從

なり。功德すゝみ候へば。かならず好ませ給べき也。御まりの時はをのくが名をめせば。木づたひにまいりて宮仕へつかうまり候也。但庭鞠は御好候まじ。木はなれたる宮づかへは術なき事に候。今より後はさる物ありと御心にかけておはしませば。御守りとなりまいらせ。御鞠をもいよくよくなし参らせんずる也といふ程に其形見へず成にけり。是を思つゝくるに。鞠をうくるにはヤクワといひ。アリといひ。ノウと云。鞠の性が額の銘也。尤故ある事也とぞ待なる。すべて此大納言の鞠に不思議おほかり。或時侍の大盤の上に沓をはきながら。のぼりて小鞠をけられたるに。大盤のうへに沓のあたるとを人にきかせざりけり。鞠の音ばかり聞えける。大盤のうへに只沓ををかんとすらすはすべし。ましてまりを蹴てその音をきかせぬ事ふしぎの事也。さて又侍七八人をならべ居させて。端に居たるより次第に肩を踏て沓をはきながら小まりをけられけり。其中に法師一人ありけるをば。肩よりやがて頭をふみてとをられけり。かくする事一兩反をはりてまりをとりて。いかゞ覺ゆるぞととはれければ。肩に御沓のあたり候とは覺え候はず。應を手にすへたる程にぞ覺え候つると各申けり。法師は又平笠をきたる程の心ちにて候つるとぞ申ける。又父卿に具して清水寺に籠られたりける時。舞臺の高欄を沓はきながら渡りつゝ。鞠をけむと思ふ心つきて。則西より東へ蹴てわたりけり。又立歸り西へかへられければ。

枚、一本作枝

す、原作る、據一本改

りぬ、據一本補

けり、一本元

見るもの目をあどろかし色を失ひけり。民部卿聞給て。さる事するものやはあるとて。籠もはてさせて。追出して一月ばかりはよせられざりけるとぞ。又熊野へ詣てうしろ舞の後うしろ鞠をけられけるに。西より百度。東より百度。二反に二百度をあげておとさしりけり。鞠をふしおがみて。其夜西御前に候はれける。夢に別常住みな見知たる者共。此まりを興じてほめあひたるが。別當いかてかくばかりの事に纏頭まいらせざらんとて。なぎの葉を一枚奉りけり。夢さめて見るにまさしくなぎの葉手にありけり。守りにこめてぞもたれたりける。又父卿の坊門のかゝりの下にすだれかけぬ車のありけるを。片懸にして鞠の多くありけるに。車のもとにてたびく敷ある鞠をおとしけるに。大納言我にをきてはちとすべからずとて。たちかへてまたれけるに。とびのをのかたへ鞠おちけり。まはらは一定落ぬべかりければ。轆のかたよりくいりこへさまに。まりをたびく出されけり。猶ながえのかたへもや落らんと覺えしかば。とびの尾のかたよりはしりくいりて。越て庭へ出されけり。人々おどろきのしじりあふ事限りなかりけり。民部卿見證せられて。是程の事なりぬればともかくも云べき事あらずとぞいはれける。鞠はてその後。車がしりならべてありなんやとすしめられければ。車宿のくるま三兩引出して。をくすみにながえのかたを一方になしてたてたるを。三兩を次第にくいり越られたりけり。大に感じて纏頭

蹴、據一本補

と、一本元

たり、一本元

ありけり。すべてさまくふしぎにありがたき事のみありける中に。鞠をたかく蹴あぐる事なべての人には三かさまざりたりけり。或日鞠をたかく蹴あげられたりけるに。辻風の物を吹あぐるやうに鳶鳥つきたりともしる程に。空にあがりて雲の中に入て見えすしてとままりにけり。不思議なりける事也。此事虚言なきよし誓状に書れたるとぞ。これも彼口傳に載たり。父大納言そのかみ佛師をめして佛を造らせてゐられたりける時。はしの御簾をあげて格子のもとをよせかけられたりけるに。成通卿いまだ若かりけるに。庭にて鞠をあげられけるが。まり格子と簾との中に入けるに。ついきて飛いられけるが。父の前無骨なりければ。まりを足にのせて。その板敷をふまずして。山がらのもどりうつやうに飛かへられたりける。凡夫のしわざにあらざりけり。我一期に此とんぼうがへり一度なりとぞ自稱せられける。大かた此大納言はかくわかくよりはやわざを好給て。築地のはらもしは檜垣のはらなどをもはしられけり。又屋の上にあつて棟よりころびて。軒にては安座せらるゝ折もありけり。父卿制止せられけれどもかなはず。此事を鳥羽院聞しめして。御制止ありけれども猶やまさりければ。御前にめして汝が早態をこのむは何の詮かあると仰下されければ。さしたる詮は候はず。但拜趨の間わづかにめし具し候僮僕一兩人には過ず候。雨のふり候日一人は笠をさして。車のすだれをもちあぐるものゝ候はぬ時。

車の轅を土にをきながら。片手に左右の袴をとり。片手にはすだれを持あげてとびのり候へば。更に装束もそんせす。奉公の第一の用也と申されければ。其後は院御制止なかりけり。

宇治左府法成寺に參籠せさせ給たりける時。片岡禰宜成房に仰せて切立せられて。鞠のために家平めされけり。執行某。鞠二まいらせたりけるを。左府家平をめして此まり二が善悪をえられけり。家平申けるは。一つはよく候。一つは二重鞠にて候と申けるを。左府中を見ずして二重まりと申事ふしん也。其鞠をあぐべきなりと仰られければ。則件のまりを上るに。兩三度あがりて枝にあたりてさけぬ。これを見るにふるきまりの上に溝き皮をおほひたりけり。左府徳大寺のおとゝ兩人の御前に是をめしよせて御らんずるに實に二重也けり。おとゝ頻に感し給けるとなん。

安元御賀の時。三位頼輔。賀茂神主家平が家に行向て。御賀の上まり仕べきよし勅定あり。其間の子細訓説をかうぶるべしといはれければ。家平いはく。まりは仕り候へども。御賀の鞠つかうまつる事家に候はねば故實申がたく候。但常の老もうのわけ鞠のていにこそ候はめと申けり。又々参りて云。かはのくつをはきて三足けんと思ふなり。家平云。装束には鞆候。七十の後三ぞくの上鞠見苦候なんと申。又彼示て云。人をばしらず。我はさせんと思ふ也。家平云。さて誰にか鞠をばゆづり給べき。三

に、據一本補

其、一本作某
三、一本元

かたまらせ、
本作候し

品の云。少將泰通朝臣にゆづらんずる也。家平が云。其儀ならば内々申させ給たるや。三品云。其儀なくとも何かくるしからん。淡路入道の弟子にて神主あり。神主の弟子に侍従大納言あり。大納言の弟子にて我あり。されば其相違あるべからずといはれける。家平されども御文をつかはして返事を取てもたせ給ひたらん。可然候なんとぞいひける。

治承三年三月五日。御方たがへのために院御所七條殿に行幸ありて。次日御壺にて御鞠有けり。主上儀中にわたらせおはしましけり。内大臣以下ひろびさしにぞかたまらせ給ける。法皇御付衣にて蹴させおはしましけるに。公卿おりさせけるは御氣色にてありけるにや。刑部卿頼輔朝臣赤かたびらをぞ着たりける。備後駿河などいふ法師鞠足もめされたりけるとかや。めづらしかりける事なりけり。

後鳥羽院は御鞠無雙の御事也けり。承元二年四月七日この道の長者と號し奉るべきよし。按察使泰通卿。前陸奥守宗長朝臣。右中將雅經朝臣署して表を奉りけり。順徳院御位の時。高陽院殿に行幸成て御逗留の日御鞠有けり。主上。院。關白殿。前太政大臣殿。中納言忠信卿。有雅卿。刑部卿宗長卿。右兵衛督雅經朝臣等也。刑部卿衣冠にて上鞠仕けり。其外みな直衣なり。雅經朝臣赤帷をきたりけり。ねこがきをしかれたり。此人數ありがたきためしなるべし。

四條院御位の時。仁治の比。仁壽殿の東西の御壺に賀茂神主久繼に仰せて。切立をせられて常に御鞠ありけるに。誠に引つくるはれたる日侍りけるに。左大臣右大臣参り給ひたりけり。左大臣かゝりの下へすゝみよりて跪て。指貫のそばをはさませたまひけり。右大臣は番長頼種を便宜の所へめして。下袴を御指貫にわはせて。切れて括をあげさせ給けり。いづれも興ある事に時の人申けり。

古今著聞集卷第十一終

古今著聞集卷第十二

博奕第十八

王原作公、據一本及日本紀改、有、同上作令、似是

天武天皇十四年。天皇御大安殿。喚王卿等有博奕。まかれども其のり物をいましむるが故に。憲章その咎をまうく。専ら禁ずべき事にこそ。小野宮はむかし惟高のみこの雙六のまちに取給へる所也。かのみこはたのしき人にてなんおはしましける。昔もかゝる輕々の事はありけるにこそ。延喜四年九月廿四日。右少弁清貫寛蓮法師をめて園碁をうたせられけり。唐綾四段懸物にはいだされけり。寛蓮勝て給けり。聖代にもかやうの勝負いましめなかり

けるにこそ。

同御時基勢法師御前にて園碁をつかうまつりて。銀の筥をうち給りてけり。生涯の面目に思ひて死けるときは。棺に入べきよしをなんいひける。

承平七年正月十一日。右大臣家の饗に中務卿宮おはしましたりけるに。中務卿と右大臣と園碁の事ありけり。碁手は錢にてぞ有ける。むかしはかやうのはれの儀にも懸物にいでけるにこそ。近代にはたがひてこそ侍りけれ。

久安元年列見式日にをこなはれけるに。宇治左府内大臣におはしましける。參給て事々おこし行はれけり。朝所にて盃酌の後園碁ありけり。權右中弁朝隆朝臣。左少弁師能。又少納言成隆。能忠等。二雙つかうまつりけり。むかしは公卿ぞうちける。弁少納言つかうまつる事は例たしかならねども。時代によりて定られけるとぞ。公卿は念人にてぞありける。此事絶て久しく成てけるにめづらしかりける事なり。

花山院右のおと忠頼公いとのとき侍共七半といふ事をこのみてあり。としあるものどもよるひるおびたしく打けり。おと制し給へども用ず。其中にいとまづしき格勤者一人あり。もちたる物なければ其人數にもれてうたざりけり。大納言定能卿の家の雜仕を妻にて。よなくは仁和寺へ通ひけり。或夜このぬし妻と合宿したりけるが。大息打つきてねもいらすして。夜もすがら物を思ひたるけしき也。妻あやしみて其

に、據一本補

おこし、一本作おほせ、似是、けり、原作ける、今從一本

く、據一本補

はなご、一本作
いと二字、似是

だにも、一本元

打、一本作突

錢、一本此下有
な字○文、一本
元、一本作に○
此錢以下十字、

心をとひけれども何事もなきぞ。只身の程の今更思ひしられて。ねもいらぬはなど
計いひけれど。いかにもたゞごとにあらずと思ひてしるて問ければ。其時男の云や
う。實は何事もなし。今更身の程のうきといふは。此ほど花山院殿の殿原わかきも老
たるも七半を打て。毎日にこととしてこゝろをゆかしあそびあひたるに。我其中にあ
りながら。一文半錢だにも持ねば。其人數につらなる事なし。大かたそのゆくゑしら
ぬ身なれば。此事のこのもしう打たきにては更になし。たゞ是程にもてなし興じあ
へるに。身の力なくてそこばく多かる殿原の中に我ひとりよそなるが。思ひつゞく
れば是ならぬまして大事にもさぞかしと思ふに。今更身の程うたてくて。かくては
なにしに人に交るらんとおもふ也と打くときいへば。妻打なきて。の給はすること
尤そのいはれあり。誠にさる事なり。人に交るならひはよき事にもあしき事にも。其
事にもるゝは口をしきなり。わけん夜を待給へ。わらはかまへて奔走せんといへば。
同じ心に思ひけるこそ。女のならひは何事をいはず博打する事をば腹だつ事なる
に。ありがたくものたまふ物かな。さりながらもこゝろにくき事なし。何としてはげ
まんとて。かくはの給ぞといへば。妻なにしに其事をばいふぞ。今わけんをまてとい
ふ。さる程に夜明けければ。おのれが一つ着たりける衣をぬきて。人の錢・五百文か
かりてけり。男のものとへもて来ていふやう。此錢にて心ゆかし給へ。人の十廿貫にて

據一本補

の、一本元

敷、一本元

ける、一本作つ
る

く、一本元

ち、一本作し

も、原作と、據一
本改

うたんも。又此少分の物にてうたんも。心をやる事はおなじ事也。我心に又おもし
しとも思はぬ事なれば。あながちにおほくうち入てもせんなしといへば。男ありが
たくうれしく覚えて。其あしたやがて此錢ふところにひき入て殿へもちて参りぬ。
例の事なればあつまりてのゝじる中にまじりぬ。心中に思ふやう。すべてこの事い
まだせぬ事也。朝夕見きけ共我と手をあろしてきたる事なれば。さいの目の勝ま
けもはかく敷きらず。たゞ人にまかせんと思ひて。かたへの者に其よしをいへば。
さしもはやりたる事に只獨まじり給はざりつれば。賢人だてかとももひて侍りける
に。いかにしてかくはなごいへば。其事に候。今日よりくはり候べしとこたへて。
此錢わづかに五百なれば。あまたたびに出さんも見苦し。たゞ一度にをし出して打
とられなばさてこそあらめと思ひて。よき程つゞきてまはる所におし出してかきた
りければ。はやくかきおほせて一貫に成ぬ。我はいまだ一度もしり候はねば。とうを
ば人にゆづり申候はんとて。まはらん所をかきおとさんと思ひて。又よき程に一貫
ををし出してかくに。又かきおほせて二貫に成ぬ。其時思ふやう。五百をばとりはな
ちて本をうしなはて妻に返しとらせんと思ひて。ふところにおさめてけり。今一貫
五百をもて。これは思ひの外の物也。おもふさまにせんと思ひて。又おし出したる
に。かきおほせて三貫に成てけり。其後は或は一貫二貫よき程くにおし出すに。お

旦、一本作日二
日三字

事、一本此下有
な字

なり、據一本
補

たり、一本作た

ほやうはかきおほせて卅餘貫に成にけり。此上は今手あらに振まはじと思ひてよ
き程にして。しばしやすみ候はんとて。卅餘貫の錢とりてしりぞきにけり。傍輩ども
女半に腹つかれたる心地してありけれど。今かくかひつけて後をこそなど思ひるた
り。去程に此ぬし其夜やがて仁和寺の妻がもとへ此錢をもたせて行にけり。次の旦。
家にて妻にいひおほせて。ゆゝしくこととして長櫃のあたらしき兩三合たづねて。誠
にきら／＼敷したて。第二日の朝とくか／＼せて参りたり。先起請文一紙を書いて侍
の柱におしてけり。其起請文にかくやう。今日以後ながく博打仕るべからず。過にし
かたもつかうまつらぬ事なれど。諸衆の御供して此度はじめて此事・仕りぬ。自今以
後もし又かやうの事仕らば現當むなしき身となるべしとかきておしたりけり。傍輩
どもかたへはやすからぬことにいひ。かたへは感ずるもありけり。事はて、妻がも
とへ行て云やう。今卅貫あり。十貫をば汝にとらせん。かくまうけたるしかしながら
汝か恩なれば。すべて皆とらすべけれども。我すてによはひたけて残りの年いくば
くならず。年比出家の志あれども一日の齋料のたくはへなし。是に思ひ煩ひつる也。
此廿貫の錢をもて。齋料にして念佛申て。後生たすからんと思ふ也。とし此の志わす
るべからず。いとま給はんまでは時／＼は参りて見奉るべし。又やれ衣きよむるこ
となどはとぶらひ給へかしといへば。妻返／＼目出たく思ひとり給ひたる。誠に此

世、原作我、據一
本改
の、原作ひ、據一
本改
て、一本元
ま、一本作は○
て、據一本補

大、一本此上有
御字○も、一本
无

世は常ならねば。左様に思ひとりたまへる事。わがためもうれしき事なりとてゆる
してければ。悦びて則出家をとげて。廿貫の錢を先十貫もちて四條町にいたりぬ。あ
る小家に至りて云やう。是十貫の錢あり奉らん。我を一月に十五日此家に晝ばかり
宿して。その程一日に二たびの齋料をこの錢にてしてたまへ。さて用途つきなんの
ぢはとめたまへといへば。家のあるじよき事と思ひて事うけしてけり。かくてあ
きなひし給ふ所なれば家せまくて所なし。屋のうへにゐたらんはいかにといへば。
それは心にまかせ給へといへば。悦で家の上ののぼりて。しも見さげて世の人のさ
はぎはしるさまを見て。世間の無常を悟りて。念佛して上十五日をすぐしけり。今十
貫をもちて又七條町に行て。此定にして下十五日をすぐしけり。去程に念佛の功つ
もりて運心としをあくりければ。在地の者どもたうとみて。かつは夢なども見たり
けるにや。面／＼に歸依してけふの齋料をばわれさせんととあらそひ結縁しけ
れば。預けたりつる兩所の十貫錢もこと／＼くもいらす。家のあるじの所得に成に
けり。かくて往生の期ちかく成にければ。兼て其期を知りて。仁和寺の妻が家に行向
ひて。いとなやむ事もなくして。正念に住して高聲念佛おこたらず。端坐合掌して終
りにけり。善知識・大なる因縁なれば。此妻はゆゝしき善知識かな。これも阿彌陀如來
の御方便にや。

山の、據一本補

屋、原作者、今從一本、據一本補の面、

後鳥羽院御時。伊豫國おふてらの島といふ所に天竺の冠者といふものありけり。件の島に山あり。其山のうへに家を作りて住けり。かしこに又ほこらを構へて。其内に母が死たるを腹の中の物を取捨てほしかためて。上をうるしにて塗ていはひておきたりけり。山のすそに八間の屋を作りて拜殿と名付て。八乙女以下かぐらおとこなどをすへたりけり。此天竺冠者は空をかけり水の面をはしるよし聞えければ。當國隣國より人のあつまりきはふ事おびたしかりけり。かの冠者あかとりそめの水干に。なつ毛のむかばきをはきて。しげとうの弓にのやおひて竹笠をきたりけり。月毛の馬のちいさきにのりて。毎日に山の上の家よりくだりければ。八間のかり屋の者共鼓をたゝき哥をとなへてはやしければ。馬やうくおりくだりて。かりやの板敷の上のほりて。さまざまにめぐりおどりて。げにも目をおどろかしけり。まいりの人のそこらあつまれる中に。或は目しるたるもあり。或はこしるたるもあり。此ともがら天竺冠者に財をあたへて其いたむ所をいのれば。冠者馬よりありてさまざまの詫宣して。腰をれたるものをば足にてふみなどしければたちまちになをりけり。目しるたる者をばなでなどしければみゆるよしいひけり。さるにつけてますますくきほひ集る事計なし。衣裳をぬき太刀をさしげ。さならぬ資財いくらと云事なくなげゝる事おびたしかりけり。冠者みづから我は親王なりと稱して。鳥居を立て額

ぬ、原作い、據一本改

て、據一本補

せら、據一本補を、據一本補

を親王宮と書て打たりけり。此事を院聞しめされからめとらせられけり。神泉苑に御幸なりて。件の冠者をめしすへて。汝神通の者にて空をとび水の面をはしるなるに。此池の面走るべしとて池につけられたりけるにあへて其儀なし。馬によく乗りて山の峯よりはしりくだすなるにとて。あがり馬に乗せられたるに一たまりもせざりけり。大方の聞へありとて。賀茂の神主能久と相撲をとらせられけるに。能久取て池の面へ七八尺ばかりなげすてたりければ。水におぼれてうきあがりけるを。大引目にていさせられけり。かくせめられてのち獄定せられけるとぞ。此男もと伊與國の者なりけり。高名のふるばくちにて打ほうけてすべてまけ。博奕打八十餘人同意して諸國に分るて。天竺冠者がかく嚴重なるよしを人にかたり。或は人にもいはせてわくくりたりけるが。あまりに事過て。京まで聞えてかゝる目にあひにけり。鎌倉の修理大夫時房朝臣の前にて双六の勝負ありけり。九郎三。參河房。信濃七郎などありけるに。懸物を出してひき目うちたらんものとするべしと定てけり。一番に信濃七郎すゝみて筒をしばしふりてぬきたりければ三を打たりけり。次に參河房すゝみて調一を打たりけり。人々目をおどろかして此うへは何をかうたん。參河房懸物とりつとのゝじりあへるに。九郎三すゝみててよく久しく筒をふりて調一をおり重たかりけり。凡夫のしわざにあらずとて九郎三とりてけり。

三、據一本補、下同

たり、據一本補
〇三、一本作一

て、據一本補

は、一本元

建長五年十二月廿九日。法深房のもとに刑部房といふ僧あり。かれとふたり圍碁を打ける程に。法深房の方の石目一つくりて其うへこうをたてたりければ。たゞにはとらるまじといはれけり。刑部房云。目はたゞ一なり。こうありとても又目つくるべき所なし。そばにせめあふ石もなし。にげて行べきかたもなし。いかでかとらざらんと。法深房が云。それはさる事なれども外に兩こうの所あり。是をこうにしるたらんずれば。まさる敵をとりて勝べし。兩こうの石をましまれば目一のうへのこうつかさずまじければなり。刑部房云。兩こうはさる事にて候へども。それをたのみて目一の石いくまじきを。せめて候へと候。いはれなき事なりと。たがひにあらそひてことゆきがたきによりて。懸物を定めてあらがひに成にけり。常世圍碁の上手どもにこととはらせける。先備中法眼俊快にとひたりければ。兩こうにかせう一つとはこれが事なり。法深房の理りなりと定めつ。次に珍覺僧都にとふに。又法深房のことほりなりとさだむ。次に如佛にことほらするに。判に云。目一ありといへども兩こうのあらんには死石にあらざといへり。自筆に勘て判形くはへておくりたりけり。此うへは又判者なければ法深房の勝になりてけり。刑部房懸物わきまへ風呂たきなどしてきらめきたりけり。抑しはずの廿九日さしものまぎれの中に。圍碁をうつだに打まかせては心つきなかりぬべきに。所々へつかひをはしらかして判せさせけるこそ。罪

候、據一本補

へ、原作人、據一本改

ゆるさるゝ程の敷奇にて侍れ。俊快法眼は感歎入興しけるとぞ。

偷盜第十九

盜賊者刑獄之法。改辛行除之心。無絶。暗求。浮雲之宮。常成。深夜之希之。都鄙不可。禁。

辛、或當作辛
除、一本作除
無、一本作無
可、一本作可
字、據一本補
を、一本元

に、原作がリニ
字、據一本改

元興寺といふ琵琶は左右なき名物也。紫檀のこうふと絃はそ絃あひかなひて。音勢もありてめてたき琵琶にてぞ侍ける。件の琵琶はむかし彼寺修理の時用途のため其寺の別當よりけるを。後朱雀院春宮の御時買めされにけり。修理をくはへらるべき事ありて。保仲がもとへつかはしける時。何とありける事にか。其使念珠引が妻なりけり。其間に彼使の男これを見て。甲の志りのかた三寸ばかりをぬすみてきりてけり。あさましなどもいふばかりなし。さてあらぬ木にてつがれにけり。いく程の所得せんとしてかくばかりの重寶をかたはになしけん。盗人の心いつれとはいひながら。うたてく口をしかりけるものかな。

博雅三位の家に盗人入たりけり。三品板敷の下ににげかくれにけり。盗人歸りさて後はひ出て家中を見るに。残たる物なくみなとりてけり。筆架一を置物厨子に残したりけるを。三位とりてふかれたりけるを。出てさりぬる盗人はるかに是を聞て。感情あさへがたくして歸り來りて云やう。只今の御尊儀のねをうけたまはるに。あは

御、據一本補

れにたうとく候て悪心みなあらたまりぬ。とる所の物どもことごとくに返し奉るべしといひて皆置きて出にけり。昔の盗人は又かくゆうなる心もありけり。

又筆篋師用光。南海道に發向の時海賊にあひけり。用光を既にころさんとする時。海賊に向ていはく。我久敷筆篋をもて朝につかへ世にゆるされたり。今いふがひなく賊徒のために害されんとす。是宿業のまからしむるなり。まばらくの命得させよ。一曲の雅聲をふかんといへば。海賊ぬける太刀をおさへてふかせけり。用光最後のつとめと思ひて。なくなく臨調子吹にけり。其時なさけなき羣賊も感涙をたれて用光をゆるしてけり。あまさへ淡路の南浦までおくりておろしおきけり。諸道に長ぬるはかくのごとくの徳を必あらはする事也。當代なをまかある事ども多かり。

南都に或人五部大乘經を書て。春日寶前にて供養せんと思ひて。澄憲法印を導師に請じ下さんとしけるを衆徒聞て。南都の碩學共をさし置て山法師を請ずる事若しき事なりと憤りて其事とまりにけり。かゝる程に大明神の御詫宣に。我國第一の能説をきかん事を悦び思ふに。いかにかくさまたげをばなすぞとまめしたまひければ。恐をなして本議にまかせて請じ下してけり。誠に富樓那の弁説をはきて。衆人感涙をたれぬはなかりけり。隨喜のあまり南都こそりてわれもくと臨時の佛事をはじめて請じける程に。布施はしたなく多くとりてのぼるとて日たけて出たりけるに。奈

浦、原作流、據一本改

を、據一本補

て、據一本補〇
けり、據一本補〇

待りけり、據一本補

良坂にて山だち待まうけて。布施物みなうばひとりてけり。力者以下みなうちすてて散々ににげさりにければ。只ひとり輿に乗りて忙然としてゐたり。おそろしき事せんかたなけれどもいづかたへにげのがるべくもなし。さりながら山だちの主領とおぼしきものをきて候ありけるを。法印まねきければ。何しにめされ候ぞといひながら四五人つれて來りけり。法印しばし物申候はんとて。十二因縁のころろを目出たくとき、かせて教化せられたりけるに。山だちども忽に悪心をあらためて歸伏せるけしきに成て。うばひとりとする所の物どもことごとく返しあたへてけり。さて法性寺まで守護して送りたりけり。法印不思議に思ひて事ゆへなく坊に歸りぬ。次の日小童一人小袋に物を入れてもて來りて案内する待りけり。何者ぞととはすれば。昨日なら坂にて見參に入て候し者のもとよりといひければ。山だちよと心得ておぼつかなさにいそぎ袋をひらきて見れば。もとよりを三きりて入たりけり。消息有けり。あけてみれば。昨日の御教化を承りて。忽に發心のもの三人。かれがもとよりに候と書たりけり。あはれにふしぎなる事なり。今此けうげによりて悪心をあらためけん事ありがたき事なり。澄憲が高名不思議此事に侍り。

いづれの此の事にか。西の京なるもの夜ふかく朱雀門の前を過けるに。門のうへに火をともして侍りけり。此門にはむかし鬼すみけると聞に。今もすみ侍るにやとお

そろしき限りなくて過ぬ。其後又ある夜とをるに。さきのごとく火をともしたり。此事あやしくて在地に披露しければ。死生不知の村人ども評定して。いざ行て見んとてそこばく來りて門にのぼりて見ければ。いとなまやか成女房一人臥たりけり。思ひよらぬ事なればばけ物なめりとあそろしながら。事の子細をとふに。はや盗人なりけり。とし比此門にすみて。夜はがうだうをしてすぎけるが。此程手をおひてやみふして待りける也。

こ、一本作く

て、一本元〇來ける、一本元

い、原作り、據一本改

領、據一本補
従、據一本補

隆房大納言檢非違使別當のとき白川に強盗入にけり。其家にすこやかなるものありて強盗とたかひけるが。なにとなくて強盗の中にまじはり來ける。うちあはんにはしおほせん事かたく覺えければ。かくまじはりて物わけん所に行て強盗の顔をも見。又ちりくにならん時に家をも見入んと思ひてかくはかまへけり。さてともなひて朱雀門の邊にいたりぬ。おのく物わけて此男にもあたへてけり。強盗の中にいとなまやかにてこゑけはひよりはじめて。よに尋常なる男のとし廿四五にもやあるらんと覺ゆるあり。どう腹巻に左右こてさして長刀を持たりけり。ひをくぐりの直垂はかまにくりたかくあげたり。諸の強盗の主頭とおぼしくてとおきければ。みな其下知にきたがひて。主従の如くになん待りけり。扱ちりくになりける時。このむねとの者のゆかかたを見んと思ひて。尻にさしさがりて見がく

す、一本作つ〇
へ、一本作に

さ、まり、一本
作さ、まつたり

れく行に。朱雀を南へ四條まで行けり。四條を東へくしげまではまさしく目にかけたりけるを。四條大宮の大理の亭の西の門の程にて。いづちかうせにけん。かきけすがごとく見えず成にけり。さきにもそばにもすべて見えず。此築地をこえて内へ入にけりと思ひてそこより歸りぬ。朝にとく行て跡を見れば。件の盗人手を負て侍りけるにや道々血こぼれけり。門のもとにてといまりければ。うたがひもなく此内の人也けりと思ひて。立歸りて此やうを主に語りければ。大理の邊に參り通ふ者なりければ。則參りてひそかに此様を語り申ければ。大理聞おどろかされて。家の中をせんぎせられけれども。更にあやしき事なかりけり。件の血北の對の車やどりまでこぼれたりければ。つぼね女房の中に盗人をこめおきたるがまわざにこそとて。みな局どもをさがされんずる儀になりて。女房共をよばれけり。其中に大納言殿とかやとて上臈女房のありけるが。此程風のおこりてえなん參らぬよしをいひけり。重ねてたいいかにもまて人になりともかゝりて參り給へとせめられければ。のがるゝかたなくてなまじるに參りぬ。其跡をさがしければ血つきたる小袖あり。あやしくていよくあなぐりて坂板をあげて見るに。さまぐの物どもをかくしおきたりけり。彼男がいひつるにたがはず。ひをくぐりの直垂袴などもありけり。おもてがた一ツありけるは其「ふるき」面をして顔をかくして。夜なく強盜をしけるなりけり。

ふるき、一本元、
恐衍

さり、據一本補
見てあさまし
思へり、一本作
見あさますとい
ふとなし

大理大にあざみて。則官人に仰せて白晝に禁獄せられけり。見物のともがら市をなして。所もさりあへざりけるとぞ。きぬかつぎをぬかせて。おもてをあらはにして出されけり。諸人見てあさましと思へり。廿七八ばかりなる女のほそやかにて。たけたち髪のかゝりすべてわろき所もなく。ゆうなる女房にてぞ侍ける。むかしこそすいか山の女盗人とていひつたへたるに。ちかき世にもかゝるふしぞ侍りけることにこそ。

け、原作云、據一本改
も、據一本補
ば、據一本補

中納言兼光卿建久二年十二月廿八日に。檢非違使別當になりて應務ことにおこし沙汰ありけるに。賤きもの、小屋にちいさき釜のうせたりけるを。隣なりける腰居がぬすみたりけるけづきありて。贓物をさがし出したりけるに。腰居中けるは。手をもちてこそるざりありき候へ。手をはなれてはいかてか取侍べき。他人ぞ盜てをきて侍らんと陳むければ。まことに申所理なりと沙汰有けれども。ぬすまれたる者の訴訟つよくて。大理の門前に召出して内問ありけり。相論事ゆかざりけるに。別當謀をめぐらして。此腰居申所不便也。たゞ此釜をば腰居にとらすべしと仰下したりければ。腰居悦びてかしらにうちかつぎていざり出けるをみて。實犯なりけり。かたわの身なれどもかくしてぬすみてけるとさとりて。科にをこなはれけり。ゆゑしかりけるはかりごと也。

ん、一本作げ
を、一本元

正上座といふ弓の上手。わかゝりける時參河の國より熊野へわたりけるに。伊勢國いらこのわたりにて海賊にあひにけり。悪徒等が船すでに近付て。御米まいらせよといひけるを。正上座人を出していはせけるは。是は熊野へ參る御米なり。賊徒等のぞみあるべからず。悪徒等かくいふを聞て。熊野の御米と見ればこそ左右なくはとどめぬ。しからずばかくまで詞にていひてんやといふ。上座その時腹巻きてひきめ一じんどう一をとりとぐして。たてつかせて船のへにすゝみ出て。悪徒等が望み申事いかにも叶ふべからず。とゞめぬべくば御米なりともとゞめよかしといふを。海賊一人もの、具して出向て言葉たゝかひをしけり。海賊が船に幕引まはしてたてをつきて。其中に悪徒等其數多く有。しばし詞たゝかひして上座まづひきめもて海賊を射たるに。海賊くゝまりて箭を上へとをしけり。ひきめ耳をひゝかして通りぬれば則立あがる所を。いつのまにか矢つぎしつらん。じんどうをもて立あがる目のあひを射てうつぶしに射ふせてけり。此矢つぎのはやさな海賊等おどろきて。是は誰にておはしまし候ぞと問ひたりければ。汝らしらざるや正上座行快ぞかしと名乗て。此邊の海ぞくは定めて熊野だちの奴原にてこそ有らめと思へば。優如してこれをもて手なみをば見するぞといひたりけるに。海賊等さらばはじめよりさは仰られて希有にあやまちすらんにとてこぎかへりにけり。

定めて、一本在
此邊上

ん、一本作げ
等、一本元

後鳥羽院の御時交野八郎といふ強盜の張本ありけり。今津に宿したるよし聞しめし
て。西面の輩をつかはしてからめ召れける。やがて御幸なりて御船にめして御覽せ
られけり。彼やつは究竟のものにてからめて四方をまきせむるに。とかくちがひて
いかにもからめられず。御船より上皇みづからかいをとらせ給ひて御をきてありけ
り。そのとき則からめられにけり。水無瀬殿へ参りたりけるにめしすへて。いかに汝
程のやつがこれほどやすくは搦められたるぞと御たづね有ければ。八郎申けるは。
年來からめ手向ひ候事其數を志らず候。山にこもり水に入てすべて人をちかづけず
候。此度も西面の人々向ひて候つる程は物の數とも覺えず候つるが。御幸ならせ
おはしまし候て。御みづから御をきての候つる事悉くも申上べきには候はねども。
船のかひははしたなく重き物にて候を扇子などをもちたせ。おはしまして候やうに。御
片手にとらせおはしまして。やすくとかく御をきて候つるを少みまいらせ候つ
るより。運つきはて候て力よはくと覺え候て。いかにものがるべくも覺え候はて
からめられ候ぬるに候と申たりければ。御けしきあしくもなく。をのれめしつか
ふべき事也とて。ゆるされて御中間になされにけり。御幸の時は烏帽子がけして
くよりたかくあげてはしりければ。興ある事になんおぼしめされたりけり。
承久の比内裏へ盜人を追入たりけるを。所の衆行實記録所邊にてからめとりけり。

も、一本元

おはしまして、
據一本補
と、一本元

に候、據一本補

事、一本元、當行
たり、一本元

せ、據一本補

人、一本此下有
を字

の、一本作に

行實件の盜人にしろき水干袴に紅のきぬ著せてさうもつ首にかけさせ。北陣を
渡して檢非違使にうけとらせられけり。行實は衣冠に卷纏して深沓をぞはきたりけ
る。佐々木判官廣綱白襖に毛沓はきて郎等廿人に一色の鎧きせうけとりけり。ゆゑ
しき見物にてぞ侍りける。北陣の門前に犯人引すへたりけるを。廣綱が下部すゝみ
てうけとりて引たつる所に。犯人がいはく。しばらくまたせ給へ。申上べき事候とて
一首の哥を詠じ侍ける。
あふみなる鏡の山のかげ見えてさゝきのへとてわたりぬるかな。
かゝる中にいづくに肝魂ありてあんじつつけけるにか。あはれなりといふ事はなく
て。盜人だましの程あらはれていとちそろしといふ沙汰にてぞありける。主上
は殊に御口びるの色もかはらせ給けり。おぢさせ給けるとぞ。
木幡にて四月の比ぬす人をとらへてとひいましておきたりけるに。そのぬす人の
よみ侍ける。
はさまれて足はうづきの時鳥鳴はちれどもとふ人もなし。
或所に強盜入りけるに。弓とりて法師をたてたりけるが。秋の末つかたの事にて
侍けるに。門のもとに柿の木の有ける下に。法師片手矢はげて立たる上よりうみ柿
の落けるが。此弓とりの法師がいたゞきにおちてつぶれてさんぐにちりぬ。此柿

法、原作此、今從
一本

に、一本元〇頭、
原作頭、據一本
改、一本元
たり、一本元

首、一本作し
ら

のひやくとしてあたるをかいたるに。何となくぬれくと有けるを。はや射ら
れにたりと思ひて臆してけり。かたへの輩にいふやう。はやくいた手を負ていかにも
のぶべくも覺ぬに此頸うてといふ。いつくぞととへば頭を射られたるぞといふ。さ
ぐれは何とはしらすぬれわたりたり。手にあかく物つきたれば血なりけりと思
ひて。さらんからにけしうはあらじ。ひき立てゆかんとて肩にかけて行に。いやはや
いかにものぶべくも覺えぬぞ。たゞはやくびをきれとしきりにいひければ。いふに
したがひて打おとしつ。さて其首をつゝみて大和國へ持て行て。此法師が家になげ
入て。しかくいひつる事とてとらせたりければ。妻子泣かなしみて見るに更に矢
の跡なし。むくろに手ばし負たりけるかとふに。しかにはあらず此かしらの事ば
かりをぞいひつるといへば。いよくかなしみ悔れ共かひなし。おくびやうはうた
てきもの也。さやうのころぎはにてかく程のふるまひしけんあろかさこそ。
或所に偷盜入たりけり。あるじあきあひて歸らん所を打とめんとて。其道を待ま
うけて障子のやぶれよりのぞきをりけるに。盗人物ども少くとりて袋に入て。こ
とくもとらず。少くとりて歸らんとするが。さげ柵の上に鉢に灰を入れてお
きたりけるを。此盗人何とか思ひたりけんつかみ食て後。袋に取入たる物をばも
の如くにおきて歸りけり。待まうけたる事なればふせてからめてけり。此盗人のふ

に、一本作な

も、一本元

に、一本元〇い
ふ、一本此下有
に字〇し、原作
せ、今意改

は、一本元、恐行

るまひ心得がたくて其子細を尋ければ。ぬす人いふやう。我もとより盜の心なし。此
一兩日食物絶て術なくひだるく候まゝに。はじめてかゝる心つきて参り侍りつる也。
然るに御柵に麥の粉やらんとおぼしき物の手にさはり候つるを。物のほしく候まゝ
につかみくひて候つるが。はじめはあまりうへたる口にて何の物とも思ひわかれ
ず。あまたゝびになりてはじめて灰にて候けるとしられて其後はたえずなりぬ。食
物ならぬものをたべては候へども。これを腹にくひ入て候へば。物のほしさがやみ
て候也。是を思ふにこのうへにたへずしてこそかゝるあらぬさまの心もつきて候
へば。灰をたべてもやすくなをり候けりと思ひ候へば。とる所の物をももとのとく
におきて候なりといふ。哀れにもふしぎにも覺えてかたの如くのさうもちななど
らせてかへしやりにけり。後々にもさほどにせんつきん時は憚らず來りていへとて
つねにとぶらひけり。ぬす人も此心あはれ也。家のあるじのあはれみまた優なり。
大殿小殿とてきこえある強盜の棟梁ありけり。大殿は後鳥羽院の御ときからめられ
けり。小殿「は」高倉判官章久がもとへ行ていひけるは。日比年來からめかねてあな
かりもとめられ候小殿と申強盜こそ思ふやうありて参りて候へ。はやくうけとらせ
給へといふ。章久まとしからず覺えながらあろく子細をとへば。小殿いはく。御不
審候事尤其いはれ候へども先思召候へ。たゞのしら人が強盜とみづから名乗て命を

候、一本无

安く、一本此下有も字

は、據一本補

候、一本此下有ん二字

作り、一本作りづり○なを、一本作なき

候へ、一本作候て

まかせ參らせて何のせんか候べきといへば。實もことわりとて委しく問答するに。小殿がいふやう。年ごろ西國のかたにて海賊をし。東國にては山だちをし。京都にては強盜をし。邊土にてはひきはぎをして過候つる。かゝる重罪の身を受候ぬれば此世にても安き心候はず。夜も安く。ねず晝も心打くつろぐ事なし。世のおそろしく人のつゝましき事かなしき苦患にて候なり。さても一期事なくてあるべき身にても候はず。つるに**は**定めてからめ出されてはぢをさらしかなしき目をこそ見候はんずれ。年來の罪をも報はんが爲に頸をのべて參て候。といへば。章久あはれに覺えて。左右なくも請取べけれど。其儀なくして答へけるは。今は使廳の廳務停止したる。左かつは聞も及らん。年來作りおける樓も皆打やぶりて佛殿につくりなをしてひたすら廳務をとめて後世の事をいとむ。徳大寺殿に祇候の源判官康仲こそ當時とに高名をたてんとする人なれば。かしこに行て此子細をいはい。定めて悦思はんずらんとといへば。左候は御文を給はり候へ。源判官殿へ參り候はんといへば。それはやすき事也とて文かきとらせければ。則ちて康仲がもとへ行て。章久がもとにていひつるがごとくにいひて。若方が一命をいけて召もつかはれ候は。別の奉公には餘黨其數多く候を一々にからめさせ參らせんといへば。康仲興ある事に思ひて請取てつかひけり。給物三十石をとらせて朝夕召仕ふに。事にをきてかひく敷大功の

内々、一本在此機上

の、據一本補

成人、一本作ならんもの○ばいり、據一本補

ひとり、一本作一つ

事共多かりければ。大納言家に此様を内々申入たりけるに。いと興有事にこそ。左様の者は中くさるかたもある。我にえさせよ召仕はんと仰られければ參らせてけり。侍ゆるされてめし仕けり。康仲が恩のうへに五十石の給物をたまはせたりければ。小殿悦びて。今はかくて一期身やすくやみなんずれば思ふ事候はず。祇候の間にはいかに御所中并御近邊には狼藉の事あらすまじく候とて。一向に御とのりして奉公をいたしければ。誠にかひく敷其あたりには夜の恐なかりけり。かゝる程に真木の島の十郎といふ強盜の張本あり。年比使廳武家うかへども。いかにもからめえざりけるを。康仲この小殿に云やう。汝がはじめよりの**約束**いつはる所なくば彼十郎からめさせよといふ。小殿すなはち承伏しにけり。小殿がいはい。十郎はゆしきつは物也。たやすくからめらるべからず。すくやか成人を三十餘人**ばかり**給りて向ひ侍るべし。又何にても贓物を一給らんといへば。いふがとくにさたして鞆一かけをとらせてけり。件の鞆を懷に入れて。卅餘人の輩あひ具してまきの島へむかひぬ。のがれ逃んずる道くを致へてみなそこくに分ちて。たてつゝきていらんものなど其器量をはからひて定つ。近邊にかくし置つ。扱おのが身ひとり入ていできてえい聲を出さん時つゝきて早く入べしといひをしへて日暮て行ぬ。則十郎が家の門をほとくとたしく。十郎内よりたぞと問ければ。平六が參りたるぞ。あけ給

打一本元〇直
垂にてなへ
一本補
一本作い
でし

へといへば。十郎何心もなく小袖に打かけ直垂にてなへ烏帽子引入て。其用意もな
くて出たり。小殿ふところより鞆を取出し。是あづけ参らせん。只今外へ罷通るにと
いふ。十郎鞆をとりていつこなりける鞆ぞと問へば。夜べあそびをしまうけたる
也と答へて通りなんとしけるを。十郎さるにても入給へ酒すゝめんといへば。よき
事と思ひて内へ入ぬ。見れば又男もなし。女の獨りありつるをば酒たづねにやりて
たいはしりむかひ居たり。案じすましたる事なれば向ひざまにおどりかゝりていだ
きてけり。則えたりやくと大聲を出す時。まうけたる者共つゝきて入てやすくから
めてけり。十郎あはれやすからぬもの哉。腹ぐるきむしにくらはれぬとぞいひける。
則康仲が家へ具して行たれば。康仲悦び思ふ事かぎりなし。康仲が第一の高名にて
ゆゝしくのゝじられけるは併しなから小殿が忠節也。此小殿平六はすべてさる悪賊
とも覺えず。事にきてなだらかにみめことからも清げにて。かひく敷つかひよ
かりければ。大納言家にも大切の者におぼして。一向とのるにたのみ給へるのみに
あらず。何事にもめしつかひけり。或時とみの事ありて宇治布十端いるべかりける
に。只今は戌ノ刻はがり也。此用は明日巳刻以前の事。またしいだしがたかりける
を。さるにても宇治へ尋てこそきかめとて。用途をもたせてつかはしけり。小殿を兵
士のためにそへてつかはしけるに。小殿たかしこかきおひて。真弓打かたげてひら

に、一本此下有
て字
一本元當行

刻、一本元〇此、
一本作事の二字
かたへの輩、一
本作いかにさ
たへ

あしだはきて行けり。用途もたるものは高名のはや足の力者をえらび定められける
が。此小殿があゆむにいかにあくれじとあせかきけれどかなはずあそかりければ。
七條河原にて小殿云やう。其あゆみやうにては急ぎの御大事かけぬべし。其用途た
べ。我ひとりもて行て布をばとりてもてまいらんといふを。力者うたがひをなして。
御身は兵士のためにせられたるばかり也。われこそ承りて侍る事なれば。手はな
ち侍らん事かなはじととらせざりければ。小殿打笑ひてうたがひをなしてかくは
の給ふか。我その用途をとらんと思はば汝一人あんをんに。あらせてんや。汝我にた
てあはん心あさなき事なれいひそ。只その用途をこせよ。とにもかくにも御事を
かゝじとてかくはいふぞといへば。力者理におれて用途をあたへてけり。汝はこれ
よりとく徳大寺殿へ参りて。此よしを申べしとてやりぬ。力者七條河原より歸り参
るに。子刻の始ばかりに参りつきて此やう申せば。かたへの輩はうたがひ思ひて。あ
ざみさはぎなどしける折に。小殿布もちて参りたり。上下あどろきあざむ事かぎり
なし。鳥の飛ぶもいかでかこれほどはやく事は侍るべき。七條河原より歸りたる使
とたゝ同じ程に走り歸りたる事おそろしき事也。人の振舞とも覺えず。山をはしり
水に入てふるまへるさま。凡夫の所爲にはあざりけり。昔は八幡の兒にして侍け
り。筆策など優にふきて世おぼえも侍りけるが。所領相論の事ありて叔父を殺して

けり。それより八幡にも安堵せずなりてかゝる身と成にけるとぞ。徳大寺殿に祇候の時も。筆筈つかうまつりて内々の講演などにはふかせられけるとぞ。此小殿が語りけるは。わかくより武勇を試みるにまさりたる者もすくなく候けり。たゞ一人ぞ候し。大殿と申し強盜と同宿し山崎に候し時。夜のしら／＼と明わたる程に。あやしく犬のほへ候を。我は何とも思ひもとがめず候しを。大殿が聞とがめて。やだまれ平六。此犬のほへやうは聞とがめ給はぬか。あやしきさま也。出て見給へかしと申し時に。弓矢かきつけて出て見侍しに。まろき直衣にひきいれ烏帽子たる男下人兩三具してとほるあり。そのさきにたけたちすがたかにいとすくやかげなる法師物の具はせて。只大きなるさいほうばかりもちたる通り侍りぬ。此やうを歸りて大殿にかたれば。あはれさやうの者こそあやしけれ。行かたをば見入れ給へるかといへば。しらざるよしをこたふれば。和殿を頼み申て同宿したるはかやうのときの料也。などか見入れ給はぬといへば。その言葉につきて又立出でみるに。大殿がいふにたがはず早くとほりぬとおもふ法師。此家の門に向てたちたり。はや事ありと思ひて矢をうちくはせてよくひきて。中にあてはなちたるに。少もはづるべしともおもはぬを。ちどりあがりて矢をしたに六寸ばかりさげて通しつ。射られてやがてはねてかゝるに。いかにも又矢つぎすべしともおもほえて。竹折戸の内へはしり入侍し

だまれ、一本作
か、一本補

を。大殿さる心はやき者にて事ありとさととりて。中戸に太刀をぬきて入らんものを切らんと待て立たり。平六がいるをとく入れと手をあがきしかば。はやくいりしに。この法師つゞきて入候を大殿ぬきまふけたる太刀にてよく切侍りぬと見えし程に。法師取もあへずさいほうにてあはせて。則大殿が額をうつぶしに打ふせ候ぬ。それを見しに立歸りてむかひあはんと思ひしかども。いかにもたてあひぬべき心地もせず候しかば。うしろより逃出て。河に入て水の底をくわりて八幡へ罷りてそのたびはたすかりて候き。やがて大勢つゞき入て大殿はからめられて候し也。一期にそれ程手ばやく心がうなる者見候はずとなんかたりけり。鞍馬まうでの者の夕暮に市原野を過けるに。盗人に行あひて着たる物はぎとられて剩きずを負て侍と人のかたるをきして。慶算がよみ侍りける。

夕暮に市原野にてあふきすはくらまざれとやいふべかるらん。澄恵僧都いまだ童にて侍ける時。かいしやくしける僧かみけづらんとて手箱をこひけるに。其手箱うせにけり。いかに求むれども見えず。はやぬす人のとりてけるなり。其時このちごとりもあへずよみ侍ける。

しらなみのたちくるまゝに玉くしげふたみの浦のみえずなりぬる。此僧都の坊のとなり也ける家の畠にそばをうへて侍けるを。夜るぬす人みなひきて

とりたりけるを聞てよめる。

盗人はながばかまをやきたるらんそばをとりてぞはしりさりぬる。

花山院の粟田口殿の山のわらびをあまりに人のぬすみければ。山より縁浄法師よみ侍ける。

山守のひましなければかきわらびぬす人にこそいまはまかすれ。

横川の恵心僧都の妹安養の尼のもとに強盗入にけり。物どもみなとりて出にければ。尼うへは紙ふすまといふ物ばかりをひきゝて居られたりけるに。姉なる尼のもとに小尼君とてありけるが。はしりまいりて見ければ。小袖をひとつとりをとりたけりけるをとりて。これをぬす人とりおとして侍けり。めしたてまつれとてもちてきたりければ。尼うへのいはれけるは。これもとりて後はわが物とこそおもひつらめ。ぬしの心ゆるさざらんものをばいかゞきるべき。盗人はいまだ遠くはよもゆかじ。とくくもちておはしましてとらさせ給へとありければ。門のかたへはしり出て。や。とよびかへしてこれをおとされにけり。たしかにたてまつらんといひければ。盗人ども立とまりて。しばしあんじたるけしきにて。あしくまいりにけりとて。とりたりける物どもをさながら返しをきてかへりにけりとなん。

古今著聞集卷第十二終

山、原作二、今從校本

めし、據一本補〇れ、原作、今從一本

きるべき、原作きける、據一本改、原作、據一本改

古今著聞集卷第十三

祝言第二十

流俗之習。觸境隨事。皆成佳祝。雖爲浮詞。依其機限。多符合者歟。

延長二年十二月廿二日。内裏御賀を中宮奉らせ給けるに。清凉殿にて遊宴ありけり。彈正親王笛を吹。左大臣(德)和琴を弾じ給ひけり。中宮の御かたより樂器を奉られける中に。北邊左大臣(德)の清和御時手自かゝれたる春鶯囀の箏の譜を。木の枝に付て奉られける。めづらしくやさしき御をくりものなりかし。

承平四年三月廿六日。天子常寧殿にて皇太后の五十算の賀せさせ給けり。廿七日後宴に。式部卿親王以下参り給。舞曲を御覽せられけるに。左大臣(德)。右大臣(平仲)。右大將保忠卿。大納言恒佐卿。庭にありて崑崙(コロン)を舞給ひけり。これ故實たるよし。吏部王の記し給ひて侍とかや。其後なを管絃の興ありけり。

康和四年二月九日御賀の試樂ありけり。左右内大臣以下参給けり。参入音聲に賀王恩を奏。先万歳樂。右大臣(德)御前にして箏を弾じ給。次地久。次春鶯囀。此間に管絃物の具を樂屋へ下されける。左大弁(德)琵琶を彈ず。宰相中將笛を吹。右大弁(德)笙を吹けり。次古鳥蘇。次胡飲酒。中院右府(德)童にておはしけるが仕うまつり給けり。内大臣(德)一家の人々を卒して樂屋へ向ひ給て扶持し給けり。内府歸つき給て後を舞

の、一本元

和、一本作袍
は、據一本補

をば奏し侍ける。年わづかに九歳の時也けるに。一曲もあやまちなかりければ。万人感歎する事限なかりけり。去年資忠父子共に害せられて後此曲絶えけるを。父あとど治暦三年に九歳にてまひ給ひけるを。けふ世につたへられぬるめてたかりける事也。胡飲酒の童をめして御柏を給はせ給ひけるを。右大臣(三)傳へ給ひければ。童頗舞てかつかりけり。父のおとこ座を立て御衣を取てあふぎにかけて。左の手に笏を取て。弘庇にて此舞の破を舞給ける。見る者目をおどろかしけり。童は父の持給ひたる御衣つたへとりて又舞て入給けり。内大臣拜賀申されけり。次右大弁子息の童陵王を奏す。納蘇利。次に輪臺。兩貫首以下垣代に立けり。右衛門督宗通卿たちくははりて笛を吹。右大弁笙を吹。左京權大夫俊頼朝臣筆筈。備後介有賢朝臣唱哥。左近將監拍光季。立くはりて詠をとなへけり。次青海波。右兵衛佐通季。左兵衛佐宗能ぞまはれける。次に散手。次太平樂。次に皇仁。次に賀殿。次林歌。退宿。音聲。長慶子也けり。次御遊。右大臣箏。右衛門督笛。右大弁拍子。左大弁琵琶。刑部卿顯仲朝臣笙。有賢朝臣和琴。左中將宗輔朝臣笛。俊頼朝臣筆筈。越前守家保笙。呂安名尊。席田。鳥破。律伊勢海。三臺急なりけり。十八日鳥羽南殿に行幸なりて御賀事有けり。廿日後宴を行はれける。舟樂などはて、舞を御覽せられけり。春鶯囀。古鳥蘇。輪臺。青海波の曲の間に。主上時々御笛をふかせ給けり。垣代には殿上人ども立けるに。右衛門督

立以下廿三字、
據一本補
次に以下十七
字、一本无

く、據一本補○
次散手、一本无

宿、一本无
りける、一本作け

家持、原作宗持、
今從一本○少、
原中、據一本
及補任改
隆長、一本此上
有左少將三字○
左、據補任當作
右、
少、原作大、今意
改

卿、今意補

笛。右大弁唱歌して立くはりられける。顯仲朝臣笙。俊頼朝臣筆筈。光季詠をとなふ。青海波七切にて拍子をくはふ。次散手。次胡飲酒。内大臣童舞れける。次納蘇利。童季輔。日暮ければ次第をまもらず童舞をまづめされけり。次賀殿。次林哥。次三臺。次皇仁。退宿音聲。蘇合の急を奏し侍ける。
仁平二年正月七日。法皇五十にみたせ給御賀有ける。前日鳥羽殿に行幸なりて。ふるき跡を尋ね法會をこなはれけり。大炊御門左大臣(三)。妙音院太政大臣(三)ともみ宰相中將にて樂行事はせさせ給けり。舞人左少將家持朝臣。右少將實長朝臣。定房朝臣。隆長朝臣。實定。藏人左衛門佐忠親。右少將公親朝臣。左少將俊通朝臣。左少將公保朝臣。樂人。左皇后宮亮師國朝臣鞆鼓。治部大輔雅頼摺鼓。左馬頭隆季朝臣。攝津守重家朝臣笙。備後守季兼朝臣筆筈。上總介資賢朝臣。侍從成親笛。右中將師仲朝臣大鼓。少納言教宗鉦鼓。右少納言成隆朝臣三鼓。中務權大輔季家朝臣。侍從信能笛。土佐守季行朝臣箏。頭中將伊方朝臣笛。右中將行通朝臣太鼓。少納言實經鉦鼓。かくぞ侍ける。右兵衛佐實國笛にて侍けるが遅參せられたりけり。八日後宴に御拜獻物御膳などはて、舞を奏す。右大臣(三)。侍從大納言成通卿。新大納言公教(三)卿仰を承つて。春鶯囀のとき御階のまへへて樂屋へ向ひて。右大臣は笙を吹。兩納言は笛をふかれけり。中宮權大夫爲通卿も同く樂屋に向ひて鞆鼓をうたれけり。隆長朝臣。實定。

卒し、一本作ひ

きい、一本此上有

童、一本此上有

小字

あこめ、一本此

下有な字

年、一本元

青海波をまはれければ。左大臣(璣)一家の人々を卒して樂屋へむかひ給。垣代には左大臣笙。民部卿宗輔卿笛。季兼朝臣篋篋。舞人光時東の輪ほとりにて詠をとなふ。師仲朝臣の童胡飲酒を舞けるに。曲おはりて退きけるを。御座のかたはらにめされて。關白殿(馳)御あこめとりて給はせけり。扇にかけて舞て退きけるを。右大臣童を扶持し給て。右の肩に御衣をかけ左手に笏を持って。西對代の南のはなちいてにて一曲を舞給けり。童は階のもとにありたちて後。右大臣坤の庭にて舞踏し給けり。其後御馬ひかれて御遊あり。左大臣(璣)右大臣(璣)笙。内大臣(璣)拍子。民部卿(璣)篋。藤大納言琵琶。侍從大納言(璣)笛。資賢朝臣和琴。伊實朝臣付哥。季兼朝臣篋篋。呂律の曲畢。勸賞をこなはれけり。

建長元年十二月十八日。日吉禰宜成茂宿禰七十賀をしけり。家に例あるとかや。院の御製を下さる。

七十年のけふのためとや神もさはやしるの敷を定めをきけん。

藤大納言爲家卿鳩の杖をつくりてをくるとて。

神山の千世にさかゆる神もてつくれる杖もきみがためとぞ。

哀傷第二十一

御視。御書三卷。黒漆篋一合琴。秋風。吏部王記には。和琴。中宮弘徽殿御賀。眼。筆。風聲。注られたり。に獻せられける。御笛など入れけり。内藏介良峯義方和琴をまらぶ。樂所預丹治良名琴をしらぶ。みな平調にしらべけり。和琴をば律調にぞしらべたりける。今は土にこそなり侍ぬらめ。あはれ成事ぞ。

空也上人路を過給けるに。ある家の門に年七歳ばかりなる小見なきて立たり。上人などなくぞと問給ひければ。小見答へけるは。二歳と申けるに父にをくれぬ。只ひとりたのみて侍つる母に此曉又をくれ侍ぬ。今はたれをたのみて身をたて。いづれの世にかふたゝび見る事を得んといひければ。上人聞て。ななきそとこしらへて彈指しての給ける。

朝夕歎心忘。後前立常習。

と唱へて過給にけり。小見此文を聞てすなはちななきやみにけり。村人さしもかなしみつるに。などなきやみたるぞと問ければ。上人のさづけ給つる文あり。其心はとていひける。

朝夕になげく心をわすれなんをくれさきだつつねのならひぞ。

七歳の人のかく心得ときけるもたゞ人にはあらず。これも權者なりけるにこそ。法興院入道殿(璣)かくれさせ給て御葬送の夜。山作所にて万人騒動の事有けり。町尻

筆、原作筆、據一本改○
本補○
一本改○
據一本改○
一本改○
據一本改○
一本改○

村、一本此下有の字

者、原作宿、據一本改

二、據一本補

殿ちどろかせ給て御往反ありけり。御堂殿は少しもさはがせ給はで。人々になづねきかせ給て。馬のはなれたるにこそと仰られけり。頼光きよてかくの如くの主將軍たるべしとぞ感じ奉りける。哀なる中にうちさましたるとなるべし。この中に又たけき心にはかく思ひ參らせて。かんじ申けるこそいみじく覺えけれ。

後中書王、即具平親王也

る、一本元は、據一本補

後中書王雜仕を宸愛せさせ給ひて。土御門右大臣（卿）をばまうけ給ける也。朝夕是を中にすへて愛し給事限なかりけり。月のあかりける夜。伴の雜仕を具し給て。遍昭寺へおはしましたりけるに。かの雜仕物にとられてうせにけり。中書王なげきかなしみ給ことほりにも過たり。思ひあまりて日比ありつるまゝにたがへず。わが御身とうせにし人との中はこの見ををきて見給へる形を。車の物見の裏に繪にかきて御覽じける。さる程に寛弘の中殿の御作文にまゐり給て。其車を陣にたてられたりける程に。物見落たりけるを牛飼たつるとて。あやまりて裏を面にたてしけり。其後あらためらるゝことなくて。今におほがほの車とて。かの家にのり給へるは此故に侍とぞ申傳たる。しかあるを土御門のおとゝの母は式部卿爲平の御子の御むすめのよし。系圖に注せるおぼつかなき事。尋ね侍べし。敦光朝臣江帥の舊宅をすぐるるとて。

往事渺茫共誰語。

閑庭唯有不言花。

後、原作抄、今從一本〇閑、原作閑據一本改

後、原作期、據一本改

と作りたりける。いとあはれにこそ侍れ。後京極殿（聖）詩の十體をえらばせ給ひけるに。此詩をば幽玄の部に入させ給たりけり。二條右衛門佐重隆。没後に冥官に成にけり。白河院善と御罪ひとしくおはします間。御生所定まらせ給はぬよし冥官申とある人の夢に見たりける。重隆舊臣のよしみにてかく申けるにこそ。あはれ成事也。鳥羽院此事を聞しめして。さまぐの御事どもありて。とぶらひまいらせられけり。

後、一本此下有な字

仁平元年九月七日夜。昔登宣が夢に。故式部の權少輔成佐法師がかたちにてやせいまゝしげにて。青き衣に袴・着て。三途をのがれざるよしをかたる。登宣平生にたつる所の義いかにと尋ねければ。閻魔王の疑難をえては。其儀のぶる事あたはずといひけり。成佐漢才に長じてよく仁義禮智信をしりたりけれども。後生の事をさくらずしてかゝるくるしみをえけるにや。かなしむべきとなり。同十一月廿九日。宇治のおとゝ（卿）成佐が弟子どもに支配して。一日に三尺の地藏苜の像を圖繪し。法華經一部を書寫して。成佐が妻がもとにて供養せられけり。おとゝは成佐が弟子にておはしけり。久壽元年の春の比。おとゝの勾當有忠が夢に。成佐鬼道にありといへども人を害する心なしと見たりけり。いかなりけることにか。

鳥羽院かくれさせ給て御葬送の夜。西行法師思はざるほどに高野よりいでし。この

る、一本作り

事にまいりあひてよみ侍ける。

今宵こそおもひしらるれあさからず君がちぎりのある身なりける。

おなじ夜よみ侍ける。

みちかはるみゆきかなしき今宵哉かぎりのたびと見るにつけても。

御をくりの人く歸りけれども。ひとり残るてあくるまで御墓にてとぶらひまいらせて。

とはばやと思ひよらでぞなげかまし昔ながらの我身なりせば。

二條院かくれさせ給て。中納言實國卿白川宮に参りて見まいらせけるに。故院にあさましく似まいらせ給ひたりければ。あはれに覺えて。次の日前左衛門督公光卿のもとへ申をくりける。

みしまえのたづのけしきぞなづかしきなれし雲井も思ひなされて。

高倉院の女房世をいとひてさまかへたる人侍けり。幾程なくて院かくれさせ給にかば。大納言實國卿かの女房のもとへ申つかはしける。

月影をみすて、入しことよりは雲がくれぬるいまこそはしれ。

冷泉内大臣(顯)文治四年二月廿日年廿二にてうせ給て後。三七日の夜。後京極殿(顯)の二位中將にておはしましけるに。御夢に。故をとく六韻の詩をあらはして和させ

故をとく、據一本補

ぞ、據一本補

ける、一本元

給べきよし申されけり。御夢さめて後詩一句ばかりを[ぞ]覺えさせ給ひける。

春月羽林悲_二自秋_一

とぞ侍ける。平生の御風情にかはらざりければ。悲涙をのどひて六韻の詩をつくらせ給ける中に。

再會夢中談_二往事_一

遺文詩上讀_二春愁_一

誠にさこそおぼしめされけめ。あはれなる事。

中宮権大夫家房卿建久七年七月廿七日にうせ給ひて。後の春。後京極殿かの家を過させ給とて。平生の作文の席につらなり侍し事思召いて。獨吟せさせ給ひける。

花尙春花留有_二露_一

宅斯舊宅廢無_二人_一

西行法師當時より釋迦如來御入滅の日終をとらんことをねがひてよみ侍ける。

ねがはくばはなのもとにて春しなんその二月のもち月のころ。かくよみてつるに建久九年二月十五日に往生をとげてけり。此事を聞て左近中將定家朝臣。菩提院三位中將のもとへ申つかはし侍ける。もち月の比はたがはぬ空なれどきえけん雲の行ふかなしき。

返し。

紫の雲ときくにぞなぐさむるきえけんそらはかなしけれども。

ど、原作は、今從一本〇き、原作な、據一本改

ト、一本无

ける、一本作け
り〇溪、原作溪、
據一本改

は、據一本補〇
と、據一本補〇
られ、一本此下
有たり二字

後京極殿(題)は詩哥の道に長じさせ給ひて。寛弘寛治のむかしの跡を尋て。建永元年三月に。京極殿にて曲水宴を行はんとおぼしたちける。巴字の潺溪をながし。住吉の松を引そへなどして。さまくくに御いとなみ有けるに。熊野山炎上のきこえありければ三日は延びて。中の巳を用られたる例もありとて。十二日とさだめられける程に。七日の夜俄に失させ給にけり。人々の秀句むなく家へのこりてこそ侍らめ。御年卅八也。おしくかなしき事也。定家卿此事をなげきて。家隆卿のもとへ申つかはしける。

昨日までかけとたのみし櫻花一夜の夢の春のやまかせ。返し。

う、原作た、據一本改
る、一本无、當衍

かなしきのきの夢にくらぶればうつろふはなもけふの山風。其御子の前内大臣(題)大納言の時。三十首哥を人々によませて撰定してつかはす「る」時。慈鎮和尚往事を思出給て。寄水懷舊によみ給ける。

思出てねをのみぞなく行水にかきし巴の字の春のよのゆめ。定家卿おなじ心を。

せく水もかへらぬ浪のはなのかげうきをかたみの春ぞかなしき。承久のみだれによりて。中御門中納言宗行卿關東へよびくだされけるに。菊河とい

の、一本作が、似

に、原作の、今從一本

柱、一本此下有
を字〇と、原作
に、今從一本

鳥羽、一本作高
余恐非〇座、一
本此下又有座字
外、原作下、據一
本改

遠、原作遠、據一
本改〇咽、原作
明、據一本改
を、一本无
を、據一本補

ふ所にてうしなはるべきよしきして。遊女の家の柱に書付給ひける。

昔南陽縣菊水汲而下流而延齡。今東海道菊川於西岸而失命。

けふする身をうきしきが原にきてつるに命をまたさだめつる。

さしもの事にとりあへず案じつらわれける。あはれにいみじき事也。その書付たりける柱は。たひくの焼亡是を大事と取出しけるが。ちかくありける火にやけにける。

後鳥羽院かくれさせ給て。四十九日の御導師に聖覺法印参りたりけるに。御佛事座をかさねて。事をはりてまかり出けるを。奉行人進みよりて。七條院の御さたにて臨時の御佛事あるべし。しばらく候はせ給へといひて。則佛經とりぐしたりければ。聖覺禮盤にのぼりて恒例の佛經讚嘆はてし。結句に。生ての別を天外に尋ねれば。蜀山の雲遙にへだたり。死しての悲を地下にもとむれば。霸陵の水轉咽。分段の習こりはてぬ。親ともならじ子ともならじ。上界の望は獨ふかし。我ためにも人の爲にも。只此句ばかりをいひて。かねを打たりける。取あへぬ程にめてたくぞつらねたりける。生ての別を天外に尋ねれば。蜀山の雲はるかに隔れるといへるは。隱岐の御所の事也。かれも是も誠にかなしき事也。前後相違の御追善あはれつきがたき事也。從二位家隆卿は。わかくより後世のつとめなかりけるが。嘉禎二年十二月廿三日病

におかされて出家。七十九にぞなられける。やがて天王寺へ下りて。次年或人の教によりて。俄に彌陀の本願に歸して。他事なく念佛を申されける。四月八日宿執や催されけん。七首の和哥を詠せられける。

ちざりわれば難波のさとにやどりきて浪の入日をおがみつるかな。

なはの海を雲井になしてながむればとをくもあらず彌陀の御國は。

二なくたのむちかひはこゝのしなのはちすの上のうへもたがはず。

八十にてあるかなきかの玉の緒はみださてすくへ救世のちかひに。

うきものとながふる郷をいでぬとも難波の宮のなからましかば。

あみだ佛と十たび申てをはりなばたれもきく人みちひかれなん。

かくばかり契りましますあみだぶをしらずかなしき年をへにける。

かくて九日。かねて其期を知りて酉刻に端座合掌して終られにけり。本尊をも安置

せざりけり。只今生身の佛來迎し給はんずれば本尊よしなしとぞいはれける。さて

いたゞきあらひてよきむしろなどしかせられけり。

親父身まかりてつぎの年服ぬき侍てのち伊勢に下りて侍しに。いく程なくて母又身

まかりしかば。いそぎのぼりて侍しに。隆祐のもとより。

たちかへりふぢの衣やしぼるらんつくしはてにし涙とおもへば。

ぶ、一本作佛

座、原作居、據一

本改、原作り、據一

本改、原作り、據一

親父以下、原册

千前章、今従一

母又、一本作又

ならひ、一本此
下有は字

の、據一本補

た、據一本補

ともし、一本作
とほし、
上の、據一本校
本補

いかばかりありしくなみにたちけん人もかれにしいせの濱あぎ。

生者必滅のとはり會者定離のならひ。たかきもくだれるものがる、事なければ。わ

きてあどろくべきにあらねども。ちかくまのあたりかなしかりしは四條院の御事

之。玉體ことにつゝがなくて。御みめもたぐひなくわたらせおはしましに。仁治三

年正月六日俄に御不豫の事有て。七日の節會に御出もなし。前大僧正良尊。法印房能

清嚴など心肝をくだきて祈り奉りしかども其しるしもなし。廿二社の奉幣非常赦を

こなはれしかども更に益なし。九日寅刻に御歳わづかに十二にてかくれさせ給にし

事。たとへをとるにためしなき事。十九日御入棺。廿五日御葬送。中十六日をき

まいらせたりしかば。玉體みなかはりはて。なづかしうつくしかりし御にほひ

も。あらぬ御事にならせ給し事。心なき草木までもみなうちしほれたる。世のしぎい

まださめやらぬゆめの心地。かざりのだひの行幸には。左大臣(題)。右大臣(題)。前

内大臣。按察使大宮大納言(題)。高倉大納言。万里小路大納言。帥大宮中納言(題)。中

御門二位。侍從宰相(題)。右宰相中將(題)。右兵衛督(題)。六條三位以下侍臣數輩。衣冠

に纏をまきてわら沓をはきて供奉有し。目もあてられざりし事。當御時藏人をへ

たる諸大夫六人。同じく衣冠に纏をまきて。火をともして御車の左右に仕うまつり

き。前後の武士その數をしらず。其夜泉涌寺の上の山におさめ奉りて立歸る人々

を、一本元〇た
めし、一本此下
有なる二字
至らん、一本作
いらん、一本作
侍る、一本作
侍り、一本作
しに、一本作に
しを、似是

の心の中をはかるべし。大臣三人かく供奉し給事。むかしも有がたきためしにや。西山の澄月上人申されけるは。此御事などを見て。厭離穢土の心もなからん程の人は。いかにも道心おこりて佛道に至らん事はあるまじき也。是程にあはれにかなしき事は。いかでかあらんとその給ひける。此事げにもとおぼえ侍るえ。明義門院。寛元元年三月廿九日にかくれさせ給ひしに。侍從隆祐備後國にて聞參らせよみて送侍る。

袖の上に彌生の雨のはれやらでかげとたのみし花や戀しき。

此哥をはるかに程へて持て來られしに。其年の九月に又陰明門院うせさせおはしまししかば。醍醐殿の御葬家にこもり侍しに。かの使下るとて返事こひ侍しかば。人にかゝせてつかはし侍し。

思ひやれ彌生の雨もはれやらで又しぐれそふ秋の山里。

花山院御時。中納言義懷は外戚。權右中弁惟成は近臣にて。おのゝ天下の權をとれり。然るに御門ひそかに内裏を出させ給て御出家有けり。惟成すなはちもとよりを切て義懷卿にいひけるは。貴殿忝く外戚としておもくおはしつるに。外人と成て今更なる世にまじはらん事はいかゝ案じ給ふと。義懷我も其よしを存じまうけたりといひて同じく出家してけり。教訓にてし給たればいかいと世の人思ひけるに。始終

御門、一本此下有の字

たうとくて過給けり。飯室にすみてよまれける。

見し人もわすれのみゆく山里に心ながくもきたる春かな。

扱も彼御門・世をそむかせ給ふ事のおこりいと哀にかなし。法住寺相國(經)の御むすめ弘徽殿の女御とてさぶらはせ給けるが。かぎりなく御心ざしふかゝりけるに。をくれさせ給て御なげき淺からず。世の中心ぼそくおぼしみだれたりける比。粟田關白いまだ殿上人にて藏人弁と申けるが扇に。

妻子珍寶及王位。臨命終時不隨者。

といふ文をかきてもたれたりけるを御覽せられけるよりこそ。いと御心おこりにけれ。此世のたのしみは夢まぼろしの程なり。國王の位よしなしなど思しめしとりて。たちまちに十善の王位をすて。一乘菩提の道に入らせ給にけり。すでに内裏を出させ給ひける夜。寛和二年六月廿三日なりけり。有明の月くまなかりければ。いかにぞや御心地のおぼえ給てたちやすらはせ給ひけるに。ありしも村雲の月にかゝりければ。我願すてに満すとてぞ。貞觀殿の高妻戸よりおどりをりさせ給ける。それよりぞかの妻戸はうち付られにけるとぞ。粟田殿は御修行あらば同じさまにていかならん所までもと契申されて。其夜も御供せさせ給たりけれどもさもなかりけり。あまさへ法皇の御事ありて後五ヶ月のうち正三位中納言までになられにけり。二心

めし、一本元
に、一本元

修、一本作執

おはしましたばかり奉られにけるとぞ世の人は申ける。天徳元年に關白になり給ふといへども程なくうせ給ひにけり。世には七日の關白とぞ申ける。

古今著聞集卷第十三終

古今著聞集卷第十四

遊覽第二十二

周覽之遊。其興太多。春有_二万樹之花。夏有_二百尺之泉。秋有_二千里之月。冬有_二數重之雪。各就_二勝地。彌添_二氣色_一者也。

寛治六年十月廿九日殿上逍遙ありけり。其時の皇居は堀河院之ければ。その北なる所にて人々あつまりたりける次第に。馬をひかせて北陣の上をわたして敵覽有けり。人々三條猪熊にてぞ馬に乗ける。頭弁季仲朝臣。頭中將宗通朝臣烏帽子直衣。其外の人々は狩衣をぞ着たりける。所の衆瀧口小舍人相志たがひけり。大井河にいたりて紅葉の船に乗て盃酌ありけるには。太夫季房。侍從宗輔。實隆などは年をさなかりければ貫首の上にてぞ着たりける。夜に入て集會の所にかへりて各冠などしかへて。内裏へまいりて宮の御かたにて和哥を講じけり。先盃酌ありけるとかや。むか

かり、據一本補

の、原作に、據一本改

しはこの事つねの事なりけるに中ごろよりたえにけり。くちをしき世なり。

白川院深雪の朝。雪見の御幸あるべしとて。御供の人少々めさるゝ事ほのきこえし程に。やがて出御ありて。あもしろき雪かな。いづかたへかむかふべき。小野皇太后宮のもとへむかはしやと仰られけるを。御隨身承はりて。従者を馬にのせて彼宮へはせまいらせて。かゝる事にすてに御車奉りて候へ。御用意候べしと申たりければ。紅の衣五具有けるをせばりにふつときりて。寢殿十間になんいだされたりけり。みづから入て御らんずる事もあらばいかいと申人有ければ。皇太后宮雪見る人は内へ入事なしとてさはぎたる御けしきなくてなんおはしましける程に。やがて御幸なりて御車やり入て。階隱の間にさしよせておはしましければ。みきをなんすゝめ奉られける。朽葉のかざみきたる童二人。ひとり沈の折敷に玉のさかづき。銀のさらに金の桶一ふさをもちられたるをもちたりけり。一人は片口の銚子にさけをいれて持たり。二人の童寢殿のまへをへて階の子をなゝめにありくだりて御車へまいりけるさま。いみじく優になん見え侍る。酒はうるはしうならせ給ける。橘は季通御供に候けるに給はせけり。上皇かへらせおはしましけるまゝに。ゆかしくなづかしき世にてこそおはしましけれとて。庄一所まいらせられたりければ。只今御幸なるよしつげまいらせたりける御隨身になんあづけ給ける。

まゝ、一本无

たり、據一本補
りけ、一本元

て、據一本補○
候、據一本補○
ぬ、一本此下有
た字

さ、一本此下有
の字

に、原作が、據一
本改、或當作乘○
致、原作致、據一
本改

同院鳥羽殿におはしましける時。きのふより雪ふりてけふ一日ふりくらしたりけ
る。夜半ばかりまでなをふりければ。院おきさせ給て。備後守季通が御前に臥たりけ
るに。雪はいくらほどたまりたるぞ。猶ふるかとみて参れと仰られければ。吹ためた
る所は一尺にあまり候。庭は八九寸ばかり候と申ければ。ゆゑしき大雪にこそ。
只今尺にみちなんずと仰られて。近衛舍人のちかくる。るやある。しかるべき近衛司
のちかきは誰かあるなど御けしきづかせ給ておはしけるほどにかねの音しければ。
後夜かなと仰られてしばし有ける程に。さいめきたる人のさやくとして参るを
としければ。たぞとみてまいれと仰られければ。いそぎ出て見れば淡路守盛長殿下
の御使として参て候。以外の大雪にてこそ候めれ。定て御覽じ候らん。只今参り候
こと申させ給たりければ。御手をはたとうたせ給ひて。さ思ひつる事とていかいせ
んずるとさはがせ給て。殿上人御隨身のしかるべきものども只今いそぎ参れとめし
につかはせと仰られて。やがて御装束四五具取出させ給ひて。いづれをかめすべき
とて。御髪かゝせおはしまして。引つくりひておはしますに。夜の去らんとあくる
程に。殿下くろき馬にうつしをきたるに奉りて致時に口をさせてまいられ給ひたり
ければ。やがて出御ありて馬場殿へ御幸ならせ給て。秋の山のかたへいらせ給ける
に。くぼみたる所に雪のふりつみたるをまらせ給はて。殿下の御馬をうち入させ給

う、原作こ、據一
本改

たりければ。かいうづむ所にて御隨身致時有長穴ありと申たりけるを。院還御の後。
關白の馬のつまづきたるを。隨身がつゝがにやりたりつること。おもしろかりつれ
と仰事ありけり。

保安五年閏二月十二日。法皇新院御同車にて白川の花を御覽せられけり。殿下。太政
大臣以下騎馬にて供奉せさせ給けり。中宮の女房車一兩やりたて、見物せられけ
り。法勝寺の西門より御車を引入て花のもとにたてられけり。其後白川の御所へ入
御ありて人々に饌を給はせける。頭中將忠宗朝臣ぞ勸盃せられける。太政大臣盃を
取給ひて殿下にさしまいらせられけり。其後新院出御ありて和哥を講せられける。
頭弁雅兼朝臣講師なりけり。内大臣序をかき給けるに。海内苗安日。洛外花開之。時
とかみおろしにかき給たりける。いと興ありけり。御製をば中納言實行卿ぞ講じ給
ける。

たづねつる我をや花のまちつらんけふぞさかりにほひましける。

太政大臣

殿下

白川のながれ久しきやどなれば花のにほひものどけかりけり。
つねよりもめづらしきかな白川の花もてはやすけふのみゆきは。

内大臣

かげきよき花のかいみとみゆるかなのどかにすめるしら河の水。

此外の哥ども事ながければしるさず。

承元五年閏正月二日のあした。目も驚くばかり雪ふりつもりけるに。九條大納言(註)參内せられて。此雪は御覽すやとて人ぐいざなひて車寄に車さしよせて。別當の三位かうのすけ以下内侍たち引ぐしてやり出されけり。中宮は后町よりいまだ入せおはしませねば。中御門殿へやりよせて。宮の女房一車やりついで。大内右近馬場賀茂の方さまへあくがれゆかれける。大納言直衣にて騎馬せられたりけり。さらぬ人ぐも或は直衣或は束帯にて六位までともなひたりけり。賀茂神主幸平狩装束して車のともに参れり。むかしはかゝる雪には馬に鞍置まうけてこそ侍しに。今はかやうの事たえて侍つるに。めづらしくやさしく候ものかなとて。わかき氏人どもおなじく狩装束して。みなく鷹手にすへてかんだちめのかたへ御ともつかうまつりて。雪の中のたかどりして御覽せさす。道すがらいと興ある事どもありけり。宮の女房内の女房いひかはしつゝやさしき事どもおほく侍けり。後朝に大納言宮の御かたの按察殿のもとへ。
この春はげにふることぞ思ひいつるかはらぬやどの雪をながめて。

る、一本作り

みなく、一本作をのく、一本

の、一本作は

し、一本元

むかし見し庭の雪とはおもはねどたがためならぬやどの戀しき。
白雪のふればかひある世なれどもむかしよいかにわすれわびぬる。
堀川殿いそのかみふりにし事を返事に。

万代もゆきつもるべき雲のうへにたいおもひやれ秋のみや人。

紅のうすやうに書ておなじ色のうすやうにてたてぶみして。所の衆をつかひにて中宮の按察殿のつぼねにさしおかせける。

此贈答のやうおぼつかなし。くはしう尋てなをすべし。

亭子院の御時。昌泰元年九月十一日大井川に行幸ありて。紀貫之和哥の假名序かけり。

あはれわが君の御代。なが月のこぬかと。昨日いひてのこれるきくみ給はん。またくれぬべき秋をさしみ給はん。とて。月のかづらのこなた。春の梅津より御ふねよそひて。わたしもりをめて。夕月夜小倉の山のほとり。ゆく水の大井の川邊にみゆきし給へば。久かたの空にはたなびける雲もなく。みゆきをさぶらひ。ながゝる水はそこににぞれるちりなくて。おほん心にぞかなへる。今みことのりして仰給ふ事は。秋の水にうかびては流るゝ木葉とあやまたれ。秋の山を見ればをりひまなき錦とおもほえ。紅葉の葉のあらしにちりてもらぬ雨と聞

こゝのぬかと、原作
一作本補い字、
本作こゝるかとよ

今、原作さ、據一本改

な、校本此下有
ぞ字

うれしき、據校
本補○この一
本此上有もし二
字、似是

え。きくの花のきしにのこれるを空なるほしとあどろき。霜の鶴川邊にたちて
雲のちるかとうたがはれ。夕の猿山のかひになきて人のなみだをおとし。たび
のかり雲ちにまどひて玉札とみえ。あそぶかめ水にすみて人になれたる。入
江の松いく世へぬらんといふとをよませ給ふ。われらみじかきころのこの
もかのもにまどひ。つたなきとのほく風の空にみだれつ。草の葉の露とと
もにうれしき涙ち。岩浪ともによろこほしき心ぞたちかへる。このとの
は世の未までのこり。今を昔にくらべてのちのけふをきかん人。あまのたくな
はくりかへし。しのぶのくさのしのばざらめや。

太政大臣貞信公

小倉山もみぢのいろもころあらばいま一たびのみゆきまたなん。

躬恒

わびしらにましらなくきそ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ。

此行幸の年紀并哥仙等の事かた／＼おぼつかなし。こまかに尋てしるべし。

古今著聞集卷第十四終

古今著聞集卷第十五

宿執第二十三

宿執者天性之所染着也。文武以下諸雜藝其道。思其名之者。雖臨老難
損。人皆有癖。不能欲罷。是又前業之令然歟。

いづれのとしの事にかありけん。高陽院にて競馬有けるに。狛助信のりじりに入に
けり。ゆゑしき上手にてたび／＼つかうまつりけれどもいまだまけぬものなりけ
り。鞭の加持を其時の御室に申たりければ。このたびはまけよとおぼしめすよしを
仰られければ。助信そのゆゑを尋申せば。此たび勝なば命有べからずと仰られけり。
助信たゞ勝て死ぬべきよしをしるて申入れれば。かちして給はせてけり。其日にな
りて尾張の種武にあひて勝にけるが。馬場末に門のありけるが。あきたりけるに。關
の木のさし出たりけるに頸をかけて落て死にけり。祿をば移にぞかけられける。種
武はわきじろといふ馬に乗たりけり。究竟の馬にてありければ乗けるものいまだ負
ざりけるに。此度種武のりて始て負にけり。わきじろ馬場のすへにて種武をはねお
としてくひころしてけり。彼つがひ一人ながら同時に死にけり。ふしぎの事也。此事
いづれの日記に見えたりといふ事たしかならぬどかく申つたへたり。江帥のしるさ
れたるは宇治殿の御記に。昔有駿馬。負競馬。喰殺其乘尻。到坂東成神馬云

けり、原作ける、
據一本改

馬、一本元、當行

云。かゝるためしも侍りけるにこそ。

承保二年八月廿八日。同院に行幸なりて競馬ありけり。秦近重と下野助友とつがひけり。近重は御室に参じて鞭加持の事を申入。助友は御室にひとしき有験の僧たればかはあらんと思ひめぐらして。義範僧都のもとへむかひて申けり。義範のいはれけるは。今度加持難治なり。汝かちて死なんとや思ふ。まけていきんとやおもふ。兩やうを思ひさだむべしといはれければ。助友たゞかちてしぬべきよしをいふ。さらばとて加持せられけり。其日左右打出て鞭をあてたりけるに。助友すでにぬけて勝れるとき。御室見物しておはしけるが。五銖をなげ出されし時。助友落馬してやがて死にけり。命にかへておぼえけん執心のふかさよしなき事なり。此事助信がつがひにたゞおなじさまに聞え侍るは。同じ事の二度侍りけるにや。くはしく尋しるべし。但承保の江記に侍は。近重かち。すへにて助友が馬近重をふむ。いくばくの日をへず死ぬ。承保以後の競馬の記ども助友つかうまつりたるよし見えて侍り。されば助友が死にたるよし見えたるは近重を書わやまて「ら」るにや。かたゞおぼつかなし。平等院には此比も宇治殿すませ給とかや。とりわきおはします問の侍るなる。一人御参のときは。とにその間をばおそれさせ給ふとぞ。京極殿にも大殿御束帯にて時々承仕などに見えさせ給とかや。御執心のとゞまる故にや。

難治なり、據一本補○汝、一本无或是

し、一本作たる

助信、一本此下有助友二字或當作種武歟は一本无

り、一本无、當行

とに、原作こゝより、據一本改

にこそ、一本作とぞ

修、一本作執、下同

なほり、一本此下有に字

心、據一本補

叡山千手院に廣清といふ僧ありけり。つねに法花經をよみ奉りて。極樂に詣てたるよし人の夢に見へたり。没後にかの墓所に夜とに經一部よむ聲おこたらざりけり。改葬して其墓所を他所にわたしたりける時も。なを經の聲おこたらざりけり。在生の時より執し奉れる故に。没後も其おこなひおこたらぬなり。善惡につけて執心ある事は。生をへだてつれどもかゝるにこそ。同西塔の僧圓久も此定へけり。但し是は七々日とによみけるとぞ。哀成事之。又壹睿といふ僧ありけり。是も多年法花經に歸して修行しける間。紀伊國穴背山にいたり宿したりける夜。其人は見えずして法華經をよむ聲聞えけり。一部讀終りて經の聲やみぬ。あやしく思ひてあしたに其程を見るに年序へたる白骨あり。更に分散せずして正體みなつゝきたり。その髑髏の中に赤き舌あり。壹睿髑髏に向て其因縁をといひければ。舌答へて云。我はこれ叡山の僧。名をば圓善といひき。修行の間此山に至りて夭亡す。前生に法華經六万部を讀奉らんと願をおこして。生分はすでにをはりたり。はからざるに生をへだつといへども其願を誦滿せんがために猶誦する。今年すてによみをはりてまさに兜卒内院に生ずべしといひけり。壹睿此事を聞て禮拜をなしてさりにけり。かくのごとくのためしおほし。靈異記にもくまの山およびきんぶせんに誦經の髑髏あるよし見へたり。これらみな執心のふかき人の至之。善事

齊、一本作齊○
喚、原作喚、據一
本改

秘事、一本此下
有な字
わらは、一本此
下有は字

は執にひかれて善所にまうづ。悪事にふかき執こそよしなき事なれ。
堂僧齊範はふかく音楽にふけるものなりけり。さいごの時。万秋樂を聞て三帖喚頭
にいたる程に遷化しにけり。これも宿執のふかき至り也。

白河院の御時。時資をめて御寵童二郎丸に貴徳納蘇利等の秘事・さづくべきよし
勅定有けるに。時資再三辭し申て教へず。かやうのわらは。當時こそ候へ。成人の後は
わが業にあらねば是を秘すべからず。世のため道のため陵運のものとひに候とてつる
にさづけず。これによりて天氣心よからず成にけり。其後則季をめて青海波等の左
のまひの秘事共を傳ふべきよし仰られければ。勅に應じてことごとくさづけたり。
是によりて則季ほくめんゆるされて左兵衛に任せられにけり。其後二郎丸が寵さが
りてやう／＼きりぞけられにければ。伯耆國におちくだりて有ける間に。青海波の秘
事せう／＼ちらしけるとかや。院そのよしを聞しめて。時資が先年の言葉むなし
からず相かなひて侍りとぞ仰事ありける。其後八幡別當頼清が寵童小院基政石壽。
清方をの／＼に舞を習はせけり。小院をば光季につけて陵王をならはせければ。一
事のことさずことごとく傳へたるよし起請をかきて渡しけり。石壽をば助忠につけて
納蘇利を傳へけり。手におきてはこれをせず。口傳はひかへたるよし申て起請文に
及ばず。頼清ふかくうらみて院に申ければ。勅定に此事力及ばざる事。はやく二郎

に、據一本補
せ、校本作殘、或
是

なるべし、
本作なかりのべ
し

たり、一本元

も、一本作は

に、據一本補

ける、一本作け
り、原作に、據一
本改

丸が青海波に事切にき。如此に秘すればこそ道はみちにてあれとぞ仰られける。誠
になにのいみじき事とてもあさ／＼敷ちりぬれば念なかるべし。又かたく秘するも
つみふかし。とにもかくにも諸道の宿執よしなき事にや。

六波羅の別當長慶は院禪が琵琶の弟子なり。最後の時時元とぶらひに來りたりける
に。かきをこされて倍臘の唱哥今一度去給へ承らんといひければ。時元いふが如く
にまければ。ほろ／＼となきて聞けり。入滅の時も秋風樂を聞て三帖喚頭にいたる
程に遷化しにけり。

保延年中より中院右大臣（定）は左大將。徳大寺左大臣（經）は右大將にてあひならび給
ひける程に。仁平四年五月廿八日に右大臣出家し給ひぬ。かくて年月を過しけるに。
保元のみだれいできて程なくまづまりにければ。左大臣の世おぼえいと目出た
くおはしけるが。いく程もつかへ給はて。病つきてあやうくおはしければ。保元二年
七月十五日出家去給ひて。菩提院にわたり給ひけるに。墨染の衣はかまをぞ着給ひ
たりける。藏人五位一人僧一人御車のしりへにうちたりける。さて右府入道のとぶ
らひにおはしたりけるに。御子の大炊御門右府（經）の大將にておはしましけるして。
中院右府入道殿に申給ひけるは。見參し奉るべけれども。左右の大將にてひとしく
相ならび奉りたりしに。我身は病にしづみてのち出家しては侍れども。けふあすと

それよりは、一本作それには

砌、原作右、據一
本改○節、原作
答、據一本改
左府以下十八
字、據一本補

もしらず侍り。それよりはおぼしめすさまに出家とげ給て。かくつよくおはしますに。狼藉にて見え奉らん事猶ほるなかるべければ。方が一此度命いきて侍らばそれへ参るべしと申されければ。猶執おはします物かなと右府入道思ひ給ひてかへり給ければ。大將砌におりたちてふかく禮節ありて。公保大納言中將にておはしましける門のもとまで送り申されけり。左府入道は九月二日終に失せ給ひにけり。六十二にぞなり給ひける。此左府入道は花蘭の左大臣の御ゆづりにて。右府入道をこえて大將になり給ひたりしに。其うらみをもわすれてかやうにとぶらひ申されける。あはれに有がたき事也。

仁平三年の比より孝博入道重病を受たりけるに。次の年の二月十一日に妙音院入道殿(顯)宰相中將にておはしけるが。とぶらひの爲に彼家にわたらせ給ひたりけるに。孝博病をたすけておきあがりて。樂をうけ給はらば苦病しばらくやすみぬべしと申たりければ。伶人をめして管絃ありけり。妙音院殿は琵琶を弾じ給けり。孝博心神安樂なりとぞ申ける。やゝ久しく有て妙音院殿はかへらせ給ひにけり。哀れにやさしかりける御わたり也。孝博老後に重病を受けては念佛などをこそ申べきに。宿執にひかれて樂を聞たがりけるこそあはれに侍れ。京極大相國(顯)つねにの給ひけるは。死去は人の終也。つるとしてのがれざる理り

死、一本此下有
一度二字

り、一本无

このみ、據一本
おぼし、一本此
下有めし二字

寵、一本作愛○
ぞ、據一本補

に、一本此下有
は字

る、一本无

也。死にちるてはくゆべからず。但し一哀忍びがたき事あり。死して後ながく笛をとるべからざる事をとぞ侍りける。應保二年正月に出家。同月卅日とし八十六にてうせ給ひにけり。其後二條院御時。かのおとこの作り給たる笛譜の詠を妙音院殿に勅問ありけるに。いかにぞやある所を少々奏せさせ給へりけるを。おとこの御夢に彼大相國の御消息あり。宗輔と書れたりけり。うせにし人はいかにとあやしくてひらきて御覽すれば。そのかみこのみ習ひし道をかたぶけ奏し給事こそ口おしふ侍れとかゝれたりけり。おどろきおぼし。て御参内ありて。彼譜に申候ひし事はみなもろくひが覺えに候けりと奏しなをさせ給けり。世をへだて生をかへて猶さほどの執心ふかゝりけんこそいとつみふかうおぼえ侍れ。知足院殿に小物御前と申御寵ものありけり。後には播磨どのとぞ申ける。知足院に御殿をたて給はせけり。入道どのうせさせ給て後。わかくおはしましける時の御影をかけて御かたみにはせられけり。其御かたはらに。御筆一張を立られたりけり。播磨殿より普賢寺殿の御むすめに此殿をばつたへまいらせられけり。夜ふくる程には時くその御筆のなり侍とかや。入道殿の御宿執にてひかせ給にや。物をねぎ申さるなれば。そのことのかなふべきしるしには。必又御筆の音の聞ゆる也。あはれにふしぎなる事なり。

たり、一本元

の、一本作なる

神樂、原作社參、
據一本改

大監物藤原守光は侍學生の中には名譽の者にてなん侍ける。嘉應年中にむこ薩摩守重綱にあひ具して彼國へくだりたりけり。承安三年重病をうけて日比なやみけるが。少よく成たりけれども猶例のさまにはなかりけり。去ながら八月以前に上洛して。釋奠にまいらんと思ひたぢけり。したしき者ども制しけれども猶しるてのほりぬ。八月七日疲極しながら。小袖のうへにきたがさねうへのきぬばかりをきて。廟門に参りたりけるに。宴座とまりければ罷り出にけり。さしもはるかの道を。しかも病につかれたる身にて。からくしてのほりたるにむなしくて出にける。いかにほりなかりけん。志のいたり是も宿執にひかれてあはれぬ。

藤大納言實國。壽永元年に例ならずあはしましけるが。清暑堂の御神樂に本拍子にもよほされければ。子息二人の肩にかゝりあさへて参り給ひけり。其後いとをよむくなられにければ。八條相國(實)の御むすめ大教院一品宮の御猶子にておはしける人とぶらひにおはしたりけるに。大納言狩衣ひきかけて申されけるは。故内府へは清暑堂の御神樂の末拍子一度をこそとられたりしに。實國は四度その座をけがすうち。二度は本拍子をとり侍り。父にはまさりてこそ侍れと申給ひけり。父あといは大臣の大將まで上り給けるに。官途のおよばざる事をばなを次にして。音曲笛などのこと執しおぼしけるにこそ。されば最後にも左様にはの給ひけれ。終に同二年正

二日、一本此下有に字

は、據一本補〇
と、原作ら、據一本改
守、原作方、據一本改

月二日。うせ給ひにけり。みちの執心つみふかき事にや。

西行法師出家よりさきは。徳大寺左大臣(實)の家人にて侍りけり。多年修行の後都へ歸りて。年比の主君にておはしますむつまじさに。後徳大寺左大臣(實)の御もとにたどり参りて。まづ門外よりうちを見いれければ。寢殿の棟に繩をはりけり。あやしう思て人に尋ければ。あれはとびすへじとてはられたるところたへけるを聞て。とびのゐる何かはくるしきとてうとみて歸りぬ。つぎに實家の大納言はいづくにぞと尋聞けるに。北のかたのちもふやうにもおはせざりければ。あながちに利をもとめたる御ふるまひうたてしとて尋ゆかず。實守の中納言ははやうせ給にけり。公衛の中將のあり所を尋聞て菩提院へ行ぬ。うかひ見れば花だのしろうらの狩衣に。ちり物のさしぬきふみくみみて。庭の櫻をながめてかうらんによりるたるけしきいと優にて。徳大寺の御跡は此人におはしけりと思ひて。左右なく櫻のもとに立寄りたりければ。中將いかなる人にかと尋られけるに。西行と申者の参りて候と申ければ。とし比見参したかりけるに。殊に悦び給て縁の上によびのぼせて。むかし今の事語られけり。日やうく暮にければ西行も歸りぬ。其後つねに参りて物語しけり。かゝる程に任大臣あるべしと聞へけり。藏人頭にかの中將なるべき仁にあたり給ひたりけるに。院は中將成経朝臣をなさんとおぼしめしけり。殿下は又大藏卿宗頼朝臣を推舉

たる、原作たど、
今従一本
なまり、原作を
こり、據一本改
等、原作藤、據一
本改

たて、一本作た
え、或是

問ひ、一本此下
有たり二字
も一本元

ありければ。兩關共に叶ふまじげに聞えけるを西行聞て。いそぎ中將のもとに詣てその由をかたりて。人にこえられ給ひなば定めて世をのがれ給はんずらんなど申けるを。中將聞て誠にさこそ有べけれども母尼堂をたつべき願ありて。其間の事を申つけたる。出家の身にて口入せん事すゝめ法師に似たらんずれば。其願とげて後相はからふべしとこたへられければ。西行こゝろをとりして歸りぬ。任大臣のつゐてに聞えしが如く。宗頼成經朝臣等藏人頭に補せられにけり。其朝西行弟子を中將のもとへやりて。もしやとて事がらを見せけるに。あへて日來に替る事なかりければ。又ふみをもちて申候し事はいかにと尋たりけるに。見參の時委しうは申べきと返事せられたりければ。むげの人にておはしけりとして其後はむかはずなりにけり。世をのがれ身をすてたれども。心は猶むかしにかはらず。だて／＼しかりける。山にうへすぎの僧都といふ人ありけり。法に執ふかくて。たやすく弟子などにもさづけざりけり。死てのち住房の天井のうへにおもき音なひしておちかゝる物聞へけり。あらくるしやとぞいひける。聞人怖畏をなしながら。誰人にてかくはと問ひければ。われはそれがし也。法慳貪の罪によりて手もなき鬼となれることぞいひける。秘すべき事もいたく過ぬるは罪となるにこそ。よく心得べき事。孝道朝臣わかゝりける時。さして其病といふ事なきに。なやみて日數をおくりける。

ぬが、原作す
字、據一本改補

なりて、據一本
補
深、原作續險、
今従一本、校本
假作價或是
陵遅、原作陵遅、
據一本改

次第に大事に成りて飲食も不通して。存命あぶなく見えければ。妙音院殿大きにおどろかせ給て。かの病席におはしまして。所勞のやうくはしく御尋有ければ。孝道たすけおこされて申けるは。さしていたむ所も候はず。又くるしき事も候はぬが。いかにと候やらん物のたべられ候はて。日數積り候ぬる間。無力にて氣よはく覺へ候こと申ければ。おと／＼よく御覽じて。汝はまとの病にてはなかりけり。さだすけが啄木をやむ。其儀ならば體に物くへ。さだすけにはやくそくしたれども。經信の流の啄木を教へんずる。それは汝うれへ思ふべからず。我見ん前にて物くへ。見て心安く思はんとせめさせ給て。飯を水つけにしてすゝめさせ給に。かひ／＼敷くひてけり。さればこそとて御心安くなりてかへらせ給けり。誠に道を重くせんには。あまたに^{なりて}あさくならん事は口惜かるべし。されば南宮譜序にも。物以^秘爲^貴。故待^價深藏。音以^希見^重。故待^人傳^と侍^ぞかし。かなしきかな。世末になりてこの道やうやく陵遅せり。委しくしるすに憚りあり。そも／＼恐ある事なれども此次に申侍べし。後鳥羽院はかの卿に御琵琶ならはせ給ひて。既に瀉瓶せさせ給べきに成にける時。孝道朝臣北面に候て申侍けるは。おそれはあれども君の御琵琶は東帶たしくしたる人の折るぼしちやくしたるに似させ給たるとつぶやきけるが。御所さまにもれ聞へにけり。則かの朝臣を弓場殿のかたへめして。坊門の内府をもて

説、原作院、據一
本改、或當作流

な、一本元、當行

へりもおす、
據一本補

申所のゆへを御尋ありければ。孝道申けるは。其事に候。定輔卿の琵琶は樂説其外手
撥合までみな當流にて候を。入眼の啄木に至りて桂の流をつたへたる人なり。妙音
院殿兩説をきはめさせ給て。むかし今をかながみてその淵底をあなぐらせ給に。當
流を正として桂流をば次にせさせ給ひて。あながちに御秘藏の儀なく候き。然るに
彼卿の啄木は桂流ん。御尋あらんに更にかくれ候まじ。されば餘曲は當流にて目出
たく候。入眼にゐたりてかく候へば。東帯に折るばし「な」とはたとへ申て候ぞかし
と。へりもおかす申たりければ。内府このやうを奏し申されにけり。是によりて定
輔卿をあらためて。孝道朝臣に御傳授あるべきにさだまりにけるを。彼卿つたへ聞
て。さはぎ参りて申されけるは。始めより教へ奉らせて御寫瓶の時にいたりて。孝道
にあらためられん事。いきながら命をめさるゝにことならず。年ごろ孝道をば小師
につけ参らせたる事にて候。生涯のうらみ此事に候。是程の勅勘何事にか候。猶此義
に定まり候はすみやかに定輔を配流せられ候へとなくく申されければ。此事其
いはれなきにあらねばふびんなりとて。猶定輔卿にならばせ給にけり。みちの執心
めんぼくをほどこそすにつけても罪ふかき事と。
法深坊生年二十の年より熊野へ詣て。我みち若父の藝におよばずばすみやかに命
をめすべしとこそ申されけれ。祈請のむね神慮にかなひてみちの棟梁たり。口きた

女、一、本作子

なくていふべからず。嫡女孝孫七歳のとしあまりにふようにてはしりあそびけるを
こらさんとて。所持の小琵琶を取かくして。はやくふようを道にたて、琵琶などを
は心になかけそとて。まばし取かくしたりけるを。おさなき心にあさましくなげき
て。うばにともしればうれへたいじやうまけれどもなをゆるさず。かゝる程に母賀
茂へまうでけるに。此少人を具したりけり。下向の後さても賀茂にては何事を申つ
るぞと問はれて。たゞ琵琶をよくひかせ給へとこそ申つれとぞ答へける。此言葉を
おはれみてかんだうゆるして。小琵琶返しあたへければ。悦びて是より心に入て道
をたしなみ功をいれたる事第一也とぞ。重代の人はおはれふしぎ成事也。七歳の心
にみちの執心おはれなる事也。

行願寺に全舜法橋といふ者ありけり。鞠足箒ひきなりけり。ゆゝしきすすきものにて
侍けるが。不食の所勞おもりて。すでに命終の期に成て。木工権頭孝道朝臣のもとへ
使者をやりていひけるは。所勞大事に罷りなりて命旦暮にあり。今一度見参に入て
よみぢやすくまからばやと御わたり有なんやといへりければ。孝道朝臣則來られに
けり。對面して心にかゝりたる事候て申傳へつる也。万秋樂の序聞たく侍る也。此邊
にも管絃は候へども同じくば御琵琶にて聽聞つかうまつりたき也といひければ。則
琵琶尋出して彈ぜられけり。病者みづから善知識の前なる聲をとりて。大鼓のつぼ

後の、原作は一字、據一本改補

に打あてし。涙をながしつゝ、聞居たりけり。さて則終りける。哀なりける事也。
陵王荒序は笛にとりて尤秘曲也。大神基政この曲を習傳へて後かの子孫の弟子ならぬものは是を吹となし。基賢。宗賢。景賢。次第に相傳し侍りける程に。景賢が弟成賢つたへたるよしを申ければ。景賢いきどほり申て。後鳥羽院の御とき此曲におきては嫡々相傳して吹べきよし院宣を給てけり。かゝる程に景賢が子景基に傳へて後。父景賢うせにければ。景基重服にて侍りけるに。其年の放生會に荒序あるべしとて。成賢つかうまつるべきよし聞へければ。景基重服の身ながら嚴重の神事の庭に参りて此事をうたへ申けり。上卿源大納言通具卿。別當幸清。成賢をひきてふかせんとせられけり。既に一笛也。景基下臈たるうへ當時重服也。うたへ申むね其いひなきよしを上卿下知せられけるを。景基申けるは。上卿は神事のやうを行ひ給ふべし。此道の事をきては子細をしらしめさず。一笛によるべからざる事は先々事され候ぞ。重服の身にて侍る時。樓門のしたにてあまだりの外へ出ずしてつかうまつりたる事先例候と悪口にをよびければ。京へ人をはしらかして此よしを奏せられければ。攝政殿此條にきてはたやすく仰下されがたし。かつは神事をあさへらるゝ事其恐あり。しかし今度荒序なからんにはと仰られければといまりけるとなん。景基ゆゑ敷侍ける。申むねことほり也。神慮重服の御いましめもなし。昇進今はといこほ

子細以下廿一字據一本補

といまり、一本此下有に字

る、一本作り

りなくして。いまだ家になき五位將監までのぼりにける。めでたき事也。
前中納言定嗣卿。和漢の才先祖にもはぢざりければ。寛元四年の脱履のはじめより。仙洞の執權をうけ給て。殊に清廉のきこへありける程に。菩提の道心の底にや催しけん。建長元年の比葉室大納言のむかしの栖の邊に山庄をかまへられける。二年八月十三日に殊にひきつくりひて。院攝政前攝政殿などへ参られたりけるに。上皇御すいや有けん。女房してとゞめ仰られければ。一切にその儀なきよしを申て。同十四日のあかづきまうでの體にて。夜に入てかしらをおろしけるに。宿執にもよほされて詩歌につくりける。

建長第二年。予齡四十三。仲秋八月三五前夜。出俗塵入佛道。感懷内催。獨吟外形而已。

新發意定然

遙尋祖跡思依然。葉室草庵雲石前。
願以勤王多日志。轉爲見佛一乘緣。
曉辭東洛紅塵暗。秋過西山白月圓。
發露淚零除鬢芥。開花勢盛觀心蓮。
長寬亞相遁名夜。清節先生掛官年。

陶令亮之歸休。春秋四十三。曾祖父之遁「昨仕朝廷何所耻」俗。八月十四日。景氣逢境。自然銘肝。

葉室山あとはむかしにおよばねどいりぬる道は月ぞかけらぬ。

極樂の道のたうちをふみそめて都のにしはこころこそすめ。

やがて世に聞えて此道をたしなむ人くかんじあはれみけり。長寛の月日をたがへず。陶令が齡を思はれたりけるは。かねてより思ひ定められけるにこそ。世の人おしむ事かぎりなし。三品經範卿詩を和したりける。いと興有事之。

鬪争第廿四

以、一本元
大、據校本補

けり、據一本補

を、一本元

父之、原作令一
字、據一本改補
○昨仕朝廷何所耻、一本
原作端據一、一本
改何所耻、一本
无惑行、或前後
文據入歟

鬪争之起。自少及大。匪啻鬪雄。多以決死。凡有血氣。皆有爭心。能忍小忿。勿致大害。未然可慎云々。然而先賢間有之。後愚誠何。保延六年夏の比。瀧口源備。宮道惟則。いさかひをして備ころされにけり。帶刀先生源義賢惟則をからめてけり。後に義賢犯人と心をあはせたるよしきた出來て。義賢帶刀の長をとられにけり。又犯人にとはれけれども。承伏せざりけるはいかなりける事にか。別切にもよくはからふべき事之。仁平元年九月七日賀茂行幸に。樋口東洞院にて左大臣のうつし馬の居飼雜人をはらひける程に。太刀をぬきたる者二人おとこの馬の前にはしり來りけるを。わづかに

取たりける、一本
本作いだける、
又此上有も字

爲、原作將、今從
一本

彼、一本元

日、據一本補

され、一本此下
有字、
け、一本作か
な、原作あ、據校
本改

一丈あまりにやと見えけるに。隨身左近府生秦公春馬を打いれてへだてけり。公春下人三郎冠者一人をばからめとりつ。今一人は走りかゝりて三郎冠者が頭を切てけり。去ながら取たりけるものをはなたざりけり。公春が童力玉丸。刀をぬきて三郎冠者きりたるものをばつきてけり。つかれて逃はしりけるを。公春が下人定方からめとりつ。犯人をのく從者一人具したりける。一人をばとねりからめてけり。一人をば左近の番長秦の兼清が下人からめてけり。其主人二人太夫尉爲義が郎從のよし名乗けれども。まことは皇后宮の侍長源有治が郎從なりけり。則隨身をもて檢非違使をめしけれどもをそかりければ。犯人四人馬副の瀧口に預けられにけり。かゝりける程に馬副具し給はざりければ。左大將のをぞ四人かりわたされにける。件の犯人四人檢非違使資持にたびてけり。有治はおとこの前驅志たりけるが。閑道より下社へまゐりまうけたりけるが。此事を聞て恐をなして罷歸りにけり。彼犯人等は大和國と紀伊國との境に住たりけるが。けふ始めて都をば見たりける者也。さてかゝる狼藉をも引出したりけるにこそ。おとこは内覽の後はじめに供奉志給ひけり。つぎの日馬一疋太刀一腰公春をめしてたびてけり。有治をば宮のさぶらひをのぞかれて弓場にくだされけり。静賢法印のもとに。馬允なにがしとかや。ゆゑ敷力つよくけなげなる男ありけり。或

者、一本元

は、一本元、當衍
しぞ、一本元

おし、一本作へ
し、原住住し、
據校本改○や
く、一本作やう
は、一本元
侍る、一本作侍
り

けみ、原作さめ、
據一本校本改

時こともあらぬ小冠と雙六をうちけるほどに。口論をしわがりて此小冠をひきよせてへその下をつきてけり。つか口までつきたりければいきごとすべくもなかりけるに。小冠者少もどろきたるけしきもなく。やがてかたきにしがみつきて刀をうばひ取て。さしも大力の大男を押ふせて。うへに乗りて刀をさしあて。既にころしてんとしけるが。いかも思ひけん。先わが腹をかき出してきずを見ていふやう。汝これほどに成たれば害せん事とこほりあるべからず。但我きず痛手にて必死すべき身也。功德に汝が命たすけん。最後に罪つくりてよしなしといひて事なくお「は」りぬ。さて法印の前に行てかゝる事こそ候つれとて。事の次第始めより申て。やがてたふれ臥て死にけり。ゆゑしかりけるがうの者也しぞかし。かたきの男日來大力の者として人におぢられつれども。さばかりの小冠をかたきにえてつきころしたるだにおもはずなるに。はてにはおしふせられて刀うばひとられて。既に害せられぬべかりけるが。慈悲に任せてゆるされにける。日比のがうの者の覺え何のやくか侍るや。彼男此事をくひて死たる小冠が父のもとに行ていひけるは。我はかゝるあやまりを仕て侍る。既にころされぬべかりつるを。しかくの給ひて命をばゆるし給へる也。くひてもあまりあり。かの怨敵なればやくいかにもし給べしと云けるを。父聞て。思ふやうありてこそ左様にもゆるし申けり。汝をころしたりとて我子い

る、一本元

前、原作先、據一本改

和、原作輪、今從一本
ける、原作けり、今從一本

て、一本元

きがへりて来るまじとてともかくもせざりけり。其時此男やがてそこにてもと切り切て。彼父にとらせて高野へとてぞ行ける。人を害す程にては此やうも又しかるべからず。事にをきてふかく也ける男也。去ながら一旦も發心してかしらそりて。高野にこもりにけるこそ前世の善知識なれ。
鎌倉の右府將軍家に。正月朔日大名ども参りたるけるに。三浦の介義村もとよりさぶらひておほさぶらひの座上に候けり。其後千葉の介胤綱参りたりける。いまだ若者にて侍りけるに。多くの人をわけ過て。座上せめたる義村が猶上に居てけり。義村しかるべくも思はていきどほりたる氣色にて。下總犬はふしどをしらぬぞよといひたりけるに。胤綱すこしも氣色かはらてとりあへず。三浦犬は友をくらふ也といひたりけり。和田左衛門が合戦の時の事を思ひていへるなり。ゆゑ敷とりあへずはいへりける。
天福元年。祇園十列に。院の左將曹秦久清。母の服にて出仕せざりけるが。忍びて車に乗りて路次をうかひ見けるに。大殿の雜色長府生秦兼友あなじく車にのりて見ける程に。はからざるに久清にさんぐにかけられたりけるよしうれへ申ければ。久清をめして御尋ありければ。久清申けるは。思ひがけぬ物にのりて候て。かゝるふしぎを引出して候。いかやうにも御かんだう候べしと申たりければ。おもひがけぬ物

にのりての中やう興ありてさたなくなりけり。まことに隨身ののり物に車はあもひがけぬ物也。

古今著聞集卷第十五終

古今著聞集卷第十六

興言利口第廿五

興言利口者。放遊得境之時。談話成虚言。當座殊有取笑驚耳者也。下野の敦末競馬をつかうまつりけるが。十度むなはせをしたりけるを。經信大納言見られて。不幸のものゝ十列歎といはれたりける。此興の事也けり。

知足院殿。大とのとておはしましける侍を御かんだう有けるには。千秋万歳をもちてはやさせて其侍をまはせられけり。さる御かんだうやはあるべき。

久安の比宇治左府(翫)うちへおはしましけるに。有盛朝臣装束を車にぬき置てありきけるが。おとゝにあひ奉りにけり。主君の御車と見て物きるにをよばずまどひおりたりける。いかにおかしとおぼしけん。

仁平二年三月廿五日八幡行幸ありけるに。藏人判官藤原範貞舞人をつとめたりける

治、一本作宇

覺し、一本此下有めし二字

永範、原作永貞、據一本改

に、原作へ、據一本改

くろ、據一本校

は、原作も據一本改

に。宮寺にて左大臣(翫)わたくしに奉幣せさせ給ひて南階をおり給けるに。範貞立向ひてうやまふけしきなかりけり。おとゝふしぎと覺して。ひそかにわれをばしらぬかと問給ひたりければ。いまだ見しり奉らぬよしをこたへ申ける。いふばかりなくておとゝすぎ給にけり。内覽の大臣を見しり奉らぬ藏人ふしぎ成ける事。彼範貞は式部大輔永範が息也。

藤原中納言家成卿くろき馬を持たりけるを。下野武正しきりにこひけるを。汝がほしう思ふ程に我はおしう思ふぞととらせざりければ。武正力及ばで過しけるに。雪のふりたりけるあした。中納言のもとに盃酌有けるが。武正御應飼にて侍ければ。鳥をえだにつけてもて來りけり。中納言侍をもて。武正は何色の狩衣にいかていなる馬に乗たると見せければ。かちかへしの狩衣に。とにひきつくろひて侍るあしけなる馬のふかしぎなるにこそ乗て候へといひければ。此うへはちからなし。かなしうせられたりとして。秘藏のくろ馬を給はせてけり。

おなじ卿の大和國なる所領より物を上げる沙汰のもの。夫よりはるかにさきだちてのぼりける程に。はや馬ねぶりをしてたづなうちすて、馬にまかせて行程に。此馬大和國の家のかたへ行けり。つやつやとしらずしてはるかに歸りにけり。さる程にさがりてのぼる夫に行あひてければ。夫これは何方へおはするぞといふ時はじめて

參、一本作い

おどろきにけり。ねぼけて。かくいふ夫を逃てくだるぞと心えて。せひなくしかりてやがて件の夫をからめたりける。夫の不祥こそおかしく候つれ。

法性寺殿(馳)天王寺へ參らせ給ひけるに。武正御供したりけるが。山崎にて馬より落にけり。其後又山崎を過させ給とて。先日の落馬の事を覺し出て。爰が武正が所なと仰られければ。武正さん候と申て。それよりやがて領知してけり。殿下の武正が所なと仰られんうへは。なんの子細有まじとぞいひける。本主力及ばず不祥きはまりなし。其所今に武正が子孫相傳したりとぞ。此武正は容儀などもよかりければ。ゆゑしき名譽の者にてぞ侍ける。競馬をたびく仕けれども一度も勝ざりけり。負ながらかたやへ歸り寄て酒肴などおこなひければ。したしき者どもいかにかくは有ぞといひければ。競馬にまけたるものは死にうするか。といひてあへて用ひざりけり。武正ならざらんものかやうの事してんや。

修理大夫行通卿大藏卿に成たりける時。或人のもとより。今は徳つき給なんずるにまひなへかといひたりける返事に。

たてそめてまだ物つまぬ大藏はもとの修理にもまさらざりけり。

中比六のあしげといふあがり馬ありけり。いづれの御室にか大法をおこなはせ給ひけるに引せられにけるを。ある坊官に給はせてけり。あがり馬ともしらて乗ありき

か、一本此下有な字

まひなへ、原作
まひなづ、
一本改、一本
まひなひ、校
作まひなひなづ
六字

てん、校本作ま

りける、一本作け

な、一本元〇彼
以下十六字、
一本補 據

ける程に。ある時京へ出けるに。知たる人道にあひて此馬を見て。いかにさしものあがり馬の名物六のあしげにはかく乗給へるぞといひたりけるに。おくしてたづなをつよくひかへたりけるに。やがてあがりてなげゝるに。てんさかさまに落て。かしら

をさんくにつきわりにけり。おかしかりける事也。

雨ふり風おどろくしかりける夜。二條中納言實綱卿家に侍どもあつまりてすいろ物語しけるに。たゞいまいづくへ行なん。東三條の池の邊へむかひなんやなどいひけるを。ある侍かしよう罷るよと云たりければ。あらがひかためてける。其しるしに

は池の中島にくるを打べし。其後をのく行て見るべしといへば。さらなりとて此ぬし立ぬ。傍輩ども思ふやう。此者しぶときおこの者にてせらるゝ事もぞある。いざさきだちておくするやうなるはかり事めぐらさんとて。兩三人いひあはせてさいぼ

う一つ讃岐わらさ一枚を持って。いそぎさきだちて彼の池の中島なる木の上のほりて待所に。此男案の如く池をわたりて中島に来てくるをうたんとす。其時木のうへよりさぬきわらさをなげをとしたりければ。此男すこし立しりぞきて。三歸を唱へてゐたる所に。重てさいぼうをなげおしたりければ。池になげ入られて水音たか

かりけるに。おどろきまどひてたをれふためきてにげにけり。傍輩どもしおほせて木よりおりてさりげなしにて侍に歸りゐたる所に。此男あをさめて出來たりけり。

一番、校本此下有字〇ばか
有に、一本此下有字
有ぞ字

目、原作白、據一本改

後、原作彼、據一本改〇もの、據一本補〇下、據

にき、一本校本作けるに
か、據一本補

いかにと問ければ。一番・からかさ**ばかり**成物ちちきつれば命にまざるものあらじと思へばにげて参りたる・といひけり。さてまけわざの事し侍りけるとぞ。
松殿（攝）攝籙の御時。春日詣とかやに秦兼國をかりにめされたりけり。其比までは府の役ちからなしとてきはざりけれども。いと面目なき事なればびんをもかきあげず。いまくしげなるかちきにて参りたりけり。殿下其由を聞しめして引つくるひて参るべきよし仰出されければ。なまじるにびんかきあげて供奉しけり。其後兼國なをさるやうなりとて官人の闕にめされけるを。番長下野敦景かみにくはるとていきどほり申とて。瑕瑾あるよしを申入けり。殿下其故を御たづねありければ。兼國あまりにわびしき者にて後齒にみづから井を掘たる**もの**也と申ければ。殿下の仰に身につかはれたる瑕瑾なし。よくいひとのなければこそ是をば申らめとてつるにめされにけり。此事たしかに申つたへ侍れども。兼國松殿の官人となりたる事たしかならず。猶尋べし。
秦兼任まづしかりける比。たゞ獨從者を持ちたりけり。後白河院の御時召次の長になされたりけるに。一門の者ども悦びにつどひにき。兼任年比のひとり從者を召いだしければ。いか程の目に**か**あはんずらんと人々いみじく見けるに。兼任は大力成けるが。はしりたちて此ひとり從者をふみふせてもといりを切てけり。したしき者ど

き、據一本補

もいかにとあざみければ。年比たゞ獨めしつかひつるにふて**き**こといもしてやすからず覺えしかども。勘當してはいかにせんぞとおもひねんじて過侍りぬ。只今こそは日比の腹をばすへ侍らめとて。かくし侍ぞかしとぞいひける。さは去ながら又年におはするべきやうなしとて。召次一番の所をとらせてけり。

て、一本元

妙音院入道殿（師）仰らるべき事ありて。孝道朝臣のわかよりける時。けふたがはて祇候すべき由仰ふくめられたりけるに。孝道仰を承ながらうせにけり。ひめもす遊びありきて夕べに歸り参じたりければ。入道殿大きにいからせ給ひて御勘發のあまりに。贊殿の別當なりける侍をめして。麥飯に鯛あはせてにて只今調進すべきよし仰られければ。則参らせたりけるに孝道にくはせられけり。日暮し遊びこうじて物のほしかりける時にて。かひく敷昔くひてけり。其時いよく**き**かり給ひて。三千三百三十三度の拜をせよと仰られければ。孝道もとよりすぐよかなる者にて侍うへに。只今物よくくひて力もありておぼえけるまゝに。いとやすくと志はてにけり。其時入道殿かしらがきをせさせ給ひて。やすからぬものかな。法師はまなばやと仰られたりける。上臈しかりける御かん當なりかし。此飯菜をうとましき事に思召とりたる事は。御遠行の時よろしめしたりけるとかや。さなくては誠にいかでかざる物ありともよろしめすべき。

おぼ、原作かほ、
據一本改

給、一本此下有
て字

れ、一本无、當衍

近江法眼寛快いまだ凡僧にてありける時。六條殿の御懺法にめされたりけるに。供米のいましく不法なりけるを。僧どもまたの物を不當に思ひあへりたりければ。ども。うたへ申べきにもあらですぎ侍けるに。此寛快が宿したる所の軒に箕をかけておきたり。其比は法皇毎日に御覽じめぐらせ給ければ。見ぐるしき物などは引かくし掃除すべきに。寛快がもとにかゝる見ぐるしき物をかけたるを。奉行の者見つけて。とはいかに。只今御幸なりて御覽じまいらせ給はんずるに。是とりかくし給へといへば。寛快少もあどろかず。何かはくるしう侍るべき。大方奉行の人の御とが候まじ。見ぐるしき事仕たるとあしざまなる御氣色にならば。寛快こそはともかくもなり侍らんずらめ。あまりに供米の不法にてたぬかのみあほく候へば。それをひさせんとて置たる物をばいかでか取捨候べき。なじかはさらば不法の供米を下行せらるゝと言葉もはからずいひければ。奉行人尤さいはれて候。是は奉行の越度に候。雜掌が不當不日にさたしなをすべく候。これより後不法の時いかなる御訴訟も候へ。今度ばかりはとりのけ給へと念比にいひければ。左様に候はんにはとてとりのけてけり。其後はげにもていねいにぞ下行しける。餘僧どもかしこう近江阿闍梨の参りてとよるこびけるとぞ。同人たゞ力者二人にかゝれて御室へ参りけるに。たえがたげなりけるを見て。かはれや「れ」〜と興の内よりいひけるを力者きゝ

の、一本无

く、據一本補

て。只二人が外又もなし。いかにとかはり候はんぞとにく〜と返事しければ。さもあらず。うしろはまへ前はうしろにかはらぬかといひける。さる事やは侍るべき。比興の事。或日又とし車にひかれて参りけるに。圓宗寺の前にてたけたかく大きな法師のかきのかたびらばかりに袈裟かけたるが。同行と覺しき僧四五人ぐしたるが行をみて。こしぐるまより飛おりて。何といふ事もなくしやくくびをかきて相撲をとりけり。たがひにひしく〜と取組て。此法師をうちまろはかしてけり。其後をのれは聞ゆる文學かなといへば。そ〜にといらへて。おれは聞ゆる壇光かなといふ。又そ〜にとこたふ。いざ〜らば今一度とらんとて又寄あひてとるに。此度は壇光うてにけり。其後いざれたかをへかおもちめくれうといへば。さらなりとてそこよりやがてぐして高尾へ行にけり。それよりとくいになりけるとぞ。此壇光房を蓮花王院の供僧になされたりけるに。大かた勤をせざりければ。奉行の弁着到しておきたりけれどもふつと参らざりければ。弁着到をとりよせて。寛快がつとめ日々不参と云々と書付てけり。寛快見てそばに如供米〜と書てけり。比興の事にて上聞にもあよばてやみにけり。

粟田口大納言忠良。ふるき大納言にておはしながら。いとも出仕などもせて籠りておはしける比。公家に大納言の御用ありげに聞へければ。さだめてはがれ給ひなんと。

世にいひけるに其儀なかりければ。あがためし除目のあした。普賢寺入道殿かの卿がもとへつかはされける。

人よりも皮いちもちにみゆるかなこのいけはぎにせられざりつる。

御返し。

いけはぎにせられざらんもことほりや骨と皮とのひつきさまには。

此大納言はやせほそりたる人にておはしければ。かく返しまいらせられけるとぞ。皇太后宮大夫俊成。宸勝光院の花見侍ける次でに。御堂あけさせておがまんとして預りを尋けるが。をそく來ればいかにと重ねていはするに。鑑をもとめうしなひてと答へけるを聞て。何となく口ずさみに。かぎあつかるもじやうの大事やといはれたりけるを。こともなき女房の有けるが打聞て取・あへず。あけければさせることなき物ゆへにと付たりける。たはぶれにても俊成卿のいひ出したる事に。きもふとくぞ付たる女はなをちそろしきものこ。

北院御室。或かた夕ぐれに御前に人も候はで。たゞ一所御念誦して御座ありけるに。いづこより來りつらん。大床の邊より世におそろしげなる白髪のうちば参りたりけり。みすをやをらひきあけてゑみくとして。いかにちそろしく思召候らんなど申て。きらく〜とわらひて候けり。御室の御心の内をしはかるべし。されども少もさは

も、原作と、據一本改

取、一本此下有も字

み、原作又、據一本改

惣、原作宗、據一本改

は、據一本補

がせ給はで。何ものぞとせ給ければ。御返事をば申さて只きらく〜とのみ笑ひけり。しばしありて松井法橋といふ人参りておびえまどひけり。さるほどに人々参りて見て。是は法金剛院の惣門に侍る物狂也と申て則そくひつきてけり。御室はばけものなめりとぞ覺しめしける。

同御室隨身中臣近武がはかまぎはを執し覺しめしけるに。何事のはれにてかありけん。上童をめしぐせらるゝ事ありけるに。近武をめして汝がはかまぎは殊に執し覺しめさる。此童に其定に着せてとらすべしと仰られければ。近武承て則かの童の出立の所へ行にけり。先酒をこひ出していひけるは。大かうじにて五度めすべし。其後たか枕をしてしばしぬべきよしをいひければ。童も堪能者にてありけるにや。かひく〜敷いふがごとくにのみてねにけり。しばらくありてをこして装束取きせて。袴の裏うへをあらゝかにとりて。むずく〜とひろげられて。うつくしき装束さんざんに成にけり。御室御覽じてこはいかなるやうぞと御尋ありければ。近武申けるは。此定にこそつかうまつり候へ。進退がよく候へば君の御目にもよく見えまいらせ候也。此兒は無進退の人にて。かく近武にも似候はざらんは力をよばぬ事なりと申ければ。道理にてさてやみにけり。

一條二位入道能保。のもとに。下太友正といふ隨身。おさなくよりみやづかへけり。

禪門天下執權の後諸大夫さぶらひおほく初参したりけるに。此友正われひとりこそ年比の者にては侍れとて一座をせめけるを。傍輩どもにくむ事限りなし。さる程に其近邊に事なめならず人くふ犬ありけり。侍ども寄合たりけるが。其犬とりてんやと何となく云出したりけるに。友正やすくとりてんといひけるを。傍輩どもよきつるでにくはせんと思て。みな一方に成てあらがひてけり。友正いふやう。したためおほせたらば殿原みな引出物を一つ、友正にたびてはかりなき事をすべし。若とりえぬ物ならば友正其ぢやうにきらめくべしといひかためてけり。かくて友正くずばかまにそばとりて。件の犬の前を過けるに。案のごとく犬はしりかゝりて大口あきてくひつかんとするを。友正こぶしをにぎりて犬の口へつき入てければ。犬あへてくはず。今片手にてかうづかをとりにて死ぬばかり打てけり。其後此犬人くふ事なく成にけり。あらがひつる侍ども目もあやにおぼえて。ゆゑしき事して引出物とらせけり。すべてあらがひおこの事也。

隨身下野武守がむすめを秦頼武むかへけるに。武守いだしたてゝやるとて。物にもせずしてあゆませけるだにふしぎなるに。狩衣にさよみのはかま着たる郎等二人を供せさせたりけり。人くふしぎの行粧也といひければ。近衛舍人がむすめ何にかはのるべき。馬にのせてやちくるべかりつらんとぞいひける。此頼武何事故に侍

故に、一本此下有や字

けるやらん。周防大夫判官季國に預け給ひけるに。かくなんよみ侍ける。

風をいたみすはうの浦にまりたけがしやうあらんとてひちりきぞ吹。かくよみければやがてゆるされにけり。

坊門院に年比めしつかふ蒔繪師ありけり。仰らるべき事ありて急度まいれと仰られたりければ。あさましき大假名にて御返事を申ける。

たいいまこもちをまきかけて候へばまきはて候てまいり候べし。

とかきたりけり。この文のことば、あしざまによまれたり。こは何事の中やうぞとて。臺所の沙汰しける女房其文見さしてなげたりける。是によりて蒔繪師がもとへかさねて。いかにかやうなる狼藉のことばをば申ぞ。只今の程にたしかに参れと仰られければ。蒔繪師あはてふためき参りたりけるに。此御返事のやういかなる事ぞとて見せられければ。すべて申すおしたる事候はず。唯今御物をまきかけて候へば。時はて候てまいりさぶらふべしとこそ書て候へと申ければ。げにもさにてありけり。假名はよみなしといふ事誠におかしき事也。

同院の侍長に兵庫介則宗といふ者ありけり。むげにとしわかき者にて侍りけるが。侍の雑仕に小松とて六十ばかりなる老女を寵愛しけり。傍輩ども笑ひて小松まきくといひける程に。或日臺盤所にて女房さぶらひをめして。こまつなききとく

ぞ、原作也、據一本改

寂、原作妻、據一本改

參らせよと仰られけるを。此小侍物騒がしう聞て。小松まききと參れと仰られるぞと心えて。思ひもかけぬ兵庫助をめして参りたりければ。こは何事ぞと仰ければ。さも候はず小松まききとまいらせよと仰に候へば。めしてまいりて候ぞかしと申ける。おかしかりける事かな。

安原作母、據一本改

松尾神主頼安がもとにたつみの權守といふ翁ありけり。わづかに田をもたりけるに。相論の事ありて六波羅にて問注すべきに定りにけり。其日になりて出ぬ。此ぬしはまうにおこがましき者なりければ。いか成事かしいてんずらんと神主思ひるたるに。晩頭にこの權守神主が家のまへをとをりけり。神主よび入て。いかに問注はしなしたるぞおぼつかなくて待居たるに。などよそには過侍ぞといひければ。權守居なをりて過失なげなるけしきにて。なじかはつかうまつり損じ候べき。是程に道理顯然の事なれば一くつまびらかに申て候へば。敵口をとどて申むねなく候。是程に心地よくつめふせたる事こそ候はね。あはれきかせたまひて候はし。御感はかぶり候なまし。人々もみしをすましてこそ候つれと。あふぎひらきつかひてゆしげにいひければ。神主うちうなづきて。さてはこゝろやすく侍り。今は事はさだまりぬれば。いかならん世までもくだんの田はさういあるまじなどいへば。權守とりもあへず。いや田におきてははやくとられぬといひたりけるおかしきこそ。さてはさ

は何事をゆゝしきいひたりけるにか。ふしぎのおこのもの也。

後鳥羽院の御とき。性親かあしげといふあがり馬ありけり。たまるものすくなかりける中に。しもづけの武景かみをあほくとりぐしてのりけれども猶おちけり。それによりてかみをみじかくきりてあぶらわたをぬられたりければ。たけかけいよくたまらざりけり。それよりぞ武景をば善知識の府生とは人いひける。

同御時南都の僧六人に風流棚をめされたりけるに。めんくにしたて、まいらすとて。棚ごとを歌をよみて。付たりけり。えいらんありて此かへしたれかすべき。泰覺よろしかりなんとてめされにける。すなはちまいりたるに。此歌のかへしつかふまつるべし。たゞし六首を一首にてかへすべしと仰くだされければ。當座につかうまつりける。

なら坂のさかしき道をいかにしてこしをれどもこのこへてきつらん。

院しきりに御入興ありけるとなん。

治部卿兼定滋野井の泉にて納涼せられけるに。増圓法眼その座につらなりけり。盃酌のあひだ治部卿さぶらひ馬の允なにがしとやいひける老たる者。香のひたゝれのしほれたるをきて。庭翳の體にて物くひて居たりけるが。衰老のものにて齒もなくてくひわづらひたるを見て。増圓連哥をしける。

泰、原作泰、今従一本

たる、一本元

老むまは草くふべくもなかりけり。

治部卿いげ興ある句なりとてどよみのしじるを。馬の允聞て。

おもづらはけて野はなちにせん。

と付たりけるに。満座にがりけり。かやうの荒言はよくくひかふべき事也。

此増圓醍醐寺のさくら會見物のとき。舞の寂中に見物をばせずして。釋迦堂のまへのさくらのもとにて鞠をけしる程に。だいで法師にをひちらされてからき目見たりけり。ほうくげのがれにけれどよくきたはれたるによりて。うとみ増圓とぞ人はいひける。

進士志定茂といふさむらい學生ありける。ある人のもとに有馬の湯へ行とて行騰を人にかりたりけるに。一懸かしたりけるを見て。二までかしたる過分なりとて。かたくをばかへしてけり。其あかづきになりてかた皮に左右のあしを入れて馬にのらんとしけるになじかはのられん。あひにあひたる下人ありてをしのせけれどもかなはず。かくのりわづらふ程に人見あひて。あれはいかにといひわづらひけるをり。はじめてさとりにけるおこがましきよとぞ。

馬助入道關東へ下向のときもかゝること侍りき。中大冠者といふとし比の中間おとこに。行騰のあまりたりけるを一かけとらせたりけるを。此定にはきて今片皮をば

み、原作め、據一本改

る、一本作り、に、一本作が

る、原作り、據一本改〇さぞ、本元當衍

我はくべきものとも思はで。あれをばさてたがはき候はんぞと人にとひたりける。たにおなじほどのくせ事なり。此やうを馬助入道かたるをきつてつかうまつれる。

はきさして人のためには残すともかたむかばきにたれかなるべき。

彼定茂承元二年十月廿八日。文殿の作文にまいりたりけるに。夏袍をきたりけるをみて。上下わらふ事かぎりなし。定茂われをわらふとは知げもなくて其日はやみにけり。後にある上達部のもとへさんじて申けるは。ひとひ文殿の作文に夏袍を着てまいりて侍りしを人く見候て。あまりに學問をして四季をだにしらぬやさしさといふさたにこそそのりて候へと自讚しければ。きくもの嘲哂する事かぎりなかりけり。此定茂あたらしく車をしたてたりけるを。いかにも人にかす事などもなくて。秘藏して持たりけるにのりて。通方の大納言のいまだ殿上人にておはしける時。かの亭へ参りたりける程に。にはかに雨ふりければ。いそぎたちて此くるまを門の中へ引入て。くるまやどりなる亭主のくるまをば。引出して雨にぬらしして。おのれがくるまをくるまやどりに立てける。所司見つけて。いかにかゝる事をばするぞとがめければ。殿はいくたびも調じかへ給はん事やすかるべし。定茂が一車をぬらししては又調しがたければ。かくしたるぞといひければ。所司力あよはずやみにけり。

後鳥羽院御時。いづれのところの競馬にか侍りけん。下野種武御點に入たりければ。

す、一本作で

座、校本作府

けるまで、一本
作けり二字

本座より催したりけるに。大假名のいまくしげなるにて。種武が馬はせたる證人候は。つかうまつらんとかきたりけるを聞しめして。さる隨身の散状やはあるべきとて。しきりにわらはせましくて。御ゆるしありけるとぞ。

順徳院御位の時。或所の格勤者よりあひて雑談しけるに。内裏の番かはり。此たびは以の外にきびしくてなどいふを。ひとり云やう。いかにきびしくとも我は高あしだはきてとをりてん。すこしもとめらるまじといひければ。のこりのともがらなりかゝりておこつきけり。さらばあらがひ給へかし。たゞ今に見えんずる事をといふを。興ある事なりとて。みなのもがら一方にて。此ぬし一人にかゝりてあらがひかためてけり。わきまへのあるべきやう。引出物の程らひなどさだめて。さらばをのく陣口へいざなへとて引ぐしていぬ。人々目をすましたるに。此主ことにたかきあしだはきて。二條油の小路を南へ通るに。あんのごとく大番のもの。あの男のあしだはなどいふを。すこしもきく入ぬやうにて。にらみまはしてなを行を。大番の者はしり出てとらへんとする時。此ぬしきしよくかはりたる事もなくて。さもあらず。あたらしき事いふ大番かな。南圓堂の寄人の陣口ものはきて通る事をばしらざりけるか。大番をうけたまはる程のものにて。いかてかはわが氏をば存せざりけるといひて。ことゝもせざりければ。主人の武士やそれく南圓堂の寄人は物はきて通る

おきて、一本作
いひ二字
く、據一本補

候、據一本補

行、一本元、恐
思、原作候、據一
本改

くるしからぬ事。それといまれとなまり聲にて高聲におきてければ。はしりたちてとどめけるもの歸りにけり。さて事なく通りければ。かなしくおほせられて。各こといかめしうして。面々に引出ものをとらせけり。院きこしめして件の男めし出して。そのあらがひたりけんまゝにふるまへと仰ごと有ければ。すこしもたがはずふるまひたりければ。しきりに興に入らせおはしましけるとなん。

同御時。小川瀧口定繼といふ御けしきよきぬし侍けり。四臈座にて上臈を越して久しく奉公して候けり。名月の夜。主上南殿に出御ありて御遊ありけるに。かの定繼が下人黒戸のかたの御廐のほとりにいねぶりして候けるが。にはかにはしりたちて。中將實忠朝臣の綾の小路の家へさかいきになりて。はしりむかひていふやう。ただ今内裏へきとまいらせ給へ。なをくきとくといひけり。中將さしもの急事何事にかとあやしう思ひて。たが奉行ぞとたづねられければ。小川瀧口殿のうけ給はらせ給て候といひて。やがてはしり歸りける程に。中將あはてさはぎて。はせまいりてうかひければ。たゞ今南殿にわたらせ給ふよし女房申せば。御後のかたにてをとなふに。たゞと御たづねれば。實忠朝臣めされ候つるほどにまいりたるよし申ければ。大かたさる事なければ。ふしぎに覺し召て。くはしく御尋ありければ。使のいひつるとく。定繼が承りて其下人にて候よし申ければ。定繼承て相たづぬるに。

へ、據一本補

け、原作れ、據一本改
おかしき事也、一本元

此章、據一本補
○秋、恐當作萩

はやくかの下人ねぼけてかくめしたりけるなり。あまりにはしりけるほどに。二條油の小路を南一かいちりける時。築地の角にはしりあたりて。かほさきつきかきてありけり。其よしを申あげれば。比興の沙汰にてやみにけり。定繼が申けるは。これは勝事にて候。ねぼけ候はんからに。さる事やはつかうまつるべき。まさかさまのくせごとをもぞ引いたし候とて。此下人をやがてつかはず成にけり。おかしき事也。

七條院の權大夫は哥人なり。秋きぬと松吹風もしらせけりかならず萩のうは葉ならねどとよめるは。此大夫が秀哥へ。新古今の清撰に入たり。孝道朝臣はかの院の北面にて。御格子にまいりたりけるを。權大夫よみかけける。

(歌闕)

孝道は鼻の大きなれば。かくよみけるなり。此權大夫はまたかしらの大きなりければ。返しにとりあはず。

(歌闕)

此女院の女房共の中に。いとおかしき事おほく侍りけり。醫師時成がむすめ備後とて候ける。佛師雲慶がむすめ越前とて候けるに。ある日越前が額にかさの出たりけ

る、一本作り

さ、據一本補

女、據一本補

事の、一本作も

るを備後にむかひて。やちつぼね。此かさ見てたび候へ。さすが御身ぞ見しらせ給はんとといひたりけるを。備後とりもあへず見るまゝに。みけんをいれたまへるをばなにとかはし侍べきと答へたりける。こゝろのはやさおかしかりけり。たがひにかくざれあふ事をのみしける。蓮尊坊が女尾張とて候けり。正月の朔日に。時成がむすめにむかつて。あひがたきは友なり。うしなひやすきは時成と申事の候などといたりければ。備後。孟春はやく來りてたのしむべき時成とぞまゐりて候とこたへけり。これもいみじくいひて侍るにこそ。尾張が咳病をしてわづらひけるを。備後とぶらふとて何をやみ給ふぞといひたりける。返事に餓鬼病をやみ候ぞとこたへたりければ。備後さらばひんさうじを煎じてめせといひたりけり。すべてかやうの言葉だにかひつねの事也。

同院にへひりの判官代といふものありけり。後には宮内太輔になりて侍しにや。おさなくより不便のものに覺しめして。ちかくめしつかひけるが。へをひるよりほかの事なかりけり。立にもひり。居るにもひり。はたらく拍子ごとにひりけり。わざとせんとしもなかりけれども。病にてかく侍けるとかや。上をはじめて昔ならひにければ。おかしみにわらふ事もなかりけり。或日孝道朝臣まいりたりけるに。女院御けうかいに判官代をめして仰られけるは。あれにまいりたるものこそ。をのれがやま

ひをばよく療治するものにて侍なれ。あひてとへかしと仰られければ。いまだなれぬ者にて候。いかへ候べからんと申ける。何かはくるしからんとおほせられければ。はしりむかひてすゝみ出ていふやう。かへすゝ思ひかけぬ申事にては候へども。世に淺ましき病をもちて候を。それによく療治のやうを去らせ給たるよしうけ給はり候間。無禮をわすれてまいりて候といひければ。孝道朝臣何事にか候といへば。いとすゝろきてとみにいひもいださす。とばかり有てべちの事には候はず。このいたくひられ候也。立はたらくにきたがひてすゝろにひられ候へば。はれにてもえひかへ候はず。御所にてもつかうまつられ候へば。かつはびんなきかたも候。いかへつかうまつるべきといひければ。孝道こゝろはやきものにて。はやく人にけさへせられにけりと心得て。世にやすき事にて候。くすりも候。やく所も候。それもうるさく候にやすきやうぢには。御宿所に出て。まばしこれを大事とちもふさまにいきづみてひられんを期にひらせ給へば。いつもくかくのみいきづみならひ候ぬれば。をのづからはれにてはこれは人まへぞかしとちもふこゝろ候て。いきづみ候まじければひられ候はぬぞ。なひくにてよくくいきづまれ候て。ひりつくされ候べしといひければ。まことにやすきやうぢに候。すみやかにさしてこゝろみ候べしとて。やがてまかり出ておしへつるがごとくにするに。いよくならひになりてひり

に、據一本補
ば、據一本補

に候、一本作に
ぞ候なれ

の、據一本補

印、原作師、據下
文及一本改
ほつし、一本元、
當衍

かへり、一本元、
悉衍

われ、一本作我
等、原作に、據一
本改

まさりければ。せんかたなくぞ侍りける。比興の療治のしやうなりかし。持明院になつめ堂といふ堂あり。淡路入道長蓮が堂也。築地のくづれたりけるをつかせけるに。築もの共をのがどち物がたりすとて。聖覺法印の説經の事などをかたりけり。その折しもせうかく「ほつし」輿にかゝれてそのまへを通りけるに。これらが物がたりに聖覺のといふを。ともなる力者法師きとがめて。おやまきの聖覺や。はらまきの聖覺やなど。ねめつゝ見かへり「かへり」にらみけり。つるぢつきをのるにてはあれども。當座にはしうをのるとぞ聞へける。かゝる不祥こそ有しかと。かの法印人にかたりて笑ひけり。外宮權禰宜度會の神主盛廣。三河國なる女をむかへて妻にしたりけるに。かの女がつかひけるものゝ中につくしの女ありけり。それを此盛廣心にかけてひまもがなと思ひけれども。たよりあしくてむなしく過けり。ある時思ひかねて妻にむかつていひけるは。申につけてそのはかりあれども。うらなく申さばよもこゝろをきたまはじとて申いづるぞ。そのつくしの女われ。にあはせ給へ。たへがたくゆかしき事侍りといへば。妻のこたふるやう。あながちにみめかたちよき事もなし。ふるまひことがらのすぐれたるにもあらず。何事のゆかしくてかくはの給ふぞといへば。盛廣いまだしり給はぬか。つびはつくしつびとて第一の物といふなり。さればゆかしく

事、據一本補
御身、一本作汝

てかく申ぞといひけるをききて。妻世にやすきこと也。されどのため事まことな
らば不定の事也。まらば伊勢まらとて最上の名をえたれども。御身の物は人しれず
ちいさくよはくはくあるにかひなき物なり。つくしの女の物もさぞあらん。此事おも
ひとまるべしといひたりければ。盛廣口をとちていふ事なかりけり。

の、據一本補

いづれの比の事にか。山僧あまたともなひて。見などぐして竹生島へまいりたりけ
り。巡禮はてし今はかへりなんとしける時。見どもいふやう。此島の僧たちは水練を
業としておもしろき事にて侍るなり。いかゞして見るべきといひければ。住僧の中
へ使をやりて。小人だちの所望かく候。いかゞ候べきといひやりたりければ。住僧の
返事に。いとやすき事にて候を。さやうの事つかうまつる若者。只今たがひ候て一
人も候はず。かへすく口をしき事也といひたりければ。ちからあよばてをのく
かへりけり。舟にのりて二三町ばかりこぎ出たりける程に。はり衣のあざやかなる
に長絹の五帖の袈裟のひだあたらしきかけたる老僧七十餘りにもやあるらんと見
ゆる一人。はぎをかきあげて海のをもてをさしあゆみて来るあり。舟をとめてふ
しぎの事かなと。目をすまして見るたる所に。ちかくあゆみよりていふやう。かたじ
けなく小人だちの御使を給て候。折ふしわか者共みなたがひ候て。御所望むなしく
御歸り候ぬる。生涯の遺恨に候よし。老僧の中より申せと候也といひてかへりにけ

餘り、一本作は
かり

候、一本元

いづくに、一本
此下有の字

も、據一本補

り。是に過たる水練の見物あるべきやと目をおどろかしたりけり。
ある宮ばらの女房みそか法師をもちて。夜な／＼つぼねへ入れけり。ある夜法師し
とのしたかりければ。いづくに。あなあると女房にたづねければ。そのさほの下にこ
そ穴は侍れ。さぐりてし給へとをしへければ。此法師はひよりてさぐるに。穴にさぐ
りあひにけり。すてにせんとしける程に。折ふしあしくへのひられんとしければ。し
とを^もねうしてためらひ居たり。しとをいきづまば一定もる共に出ぬべくてひかへ
たるをばしらすして。女房あなをさぐりえぬと心得て。はひよりていづくにぞとさ
ぐる程に。あやまたず僧のわきへさしいれてけり。此僧こそはゆさにたへぬものな
りけるにや。をびえて身をふるふ程に。へもまとも一度に出にけり。穴に取あてたる
まらもはづれて。まとさんくにはせちらされにけり。隣の中のへだてのやり戸に
穴のありけるより。まと通りて。やりどのそばにねたりける女房の顔にかへりけれ
ば。かくとはまらて雨のふりてもるぞと心得てさはぎまどひける。あかしかりける
事かな。

の、一本元

か、一本元恐衍、
下同

あるなま藏人の妻のいと物ねたみする女有けり。男あぢきなき事に思ひて。いかゞ
して此女にはなれなんと思ひけれ共。さすが又すぐせつきねば。ながらべてすぐし
ければ。ある事「か」なき事「か」に付て。さいなまれて年をおくりけり。男あんどめぐ

が、據一本補

入、一本作引〇
つ、據一本補

を、一本元、恐衍

おぼせ以下四十
八字、據一本補

彼、一本作その
〇は、一本在于
おぼせ下

と、原作み、據一
本改

らして。龜を一つもとめて。首を引出して三四寸がほどに切てけり。紙につゝみて
ふところに入かくしてもちつ。妻と又事をあやまちていさかひて。たがひにさま
くにいひて男いふやうは。せんずる所かやうの口舌のたへぬもこれゆへにこそと
て刀をぬきて。をのれがまらを切よしをして。ふところに持たる龜のくびをなげ
出したりけり。血みどろ成物の三四寸ばかりなれば。其物にたがはざりけり。妻あさ
ましげに成て。おほかたの道理をこそ申つれ。是程ににがしく思ひとり給ふべ
き事かとおきれてゐたりけり。さて今は心やすくおぼせ。かくみすべられてのみす
ぐせば。人ぎもみぐるしうおぢきな事なればといひければ。かたきは打つとて
彼きれを引そばめて立のきにけり。其後はまばし此きずのあとやむよしとて打ふ
してのみすぐしけり。さて月ごろへて。女晝つれくになりけるに。はぬいといふ物し
てうすくまりて居たりけるを見れば。またの程に黒き布を引まとひたりけり。男あ
やしと思ひて。それなるくるき物は何ぞとへば。女はたといひてとかくこたふ
る事なし。あながちにとひければ。さのみかくしはつべきことならねば。これは故ひ
とのためよとこたへけり。其ころをえずして故ひとへは何ぞとへば。さはきり
てすて給ひしこ人がために。いかでかはこゝに素服させざらんとて。服させたるぞ
かしといひけり。めづらしかりける素服也。おもかげをしはかられておかしくこそ

侍れ。

しきりにたけたかき女と。殊にたけひきかりける男ねたりけるに。女のまたの程に
男のかほあたりて侍りけり。おとこねさめて。おのが口の女のまへのほどにあたり
たりけるを顔ぞと思ひて。あさましの御口の香のくさやといへりければ。女も又
ねぼけて。おとこの口ぞとは思ひよらてほかの人のいふぞと心えてなん。其となり
さかしらぞとこたへたりける。おかしかりけることよ。

ける、一本作け
り、一本作け
よく、一本作と
中間、據一本補

此比天王寺より。ある中間法師京へのぼりける道にて。山ぶし一人。又いもじする男
一人行つれてのぼりける。をのく三人あゆみつれて行に。今津邊にて日くれてけ
れば。三人一宿にとまりにける。家のあるじは遊女にてぞ侍りける。をのく打やす
みてねぬれば。あるじもぬりごめに入てねにけり。人しづまる程に。此山ぶしをきる
てかみをもとりにとりけり。いもじ男はたよくねいりぬ。中間法師はそらね入
して。此山ぶしがふるまひ見るたる程に。もとりにとりはて。ねいりたるいもじが
おぼらしをとりて着てけり。さて遊女がねたるぬりごめのもとに至りて。やをらた
たきければ。すなはちあけてたぞとへは。我はやどりうどにて侍り。これの御かま
をみれば。片かま計りありてわきがまなし。さだめてほしく思はせ給はん。かく候物
はいもじにて候ぞ。まいらせんはいかにといひければ。君いとよき事と思ひて。則内

へ入てぬにけり。さて事どもよくして其きたりつるをば。君がまくらにと
 どもをきて。あからさまなるやうにて出にけり。其後もとのとくにかみ亂して。かた
 のごとくおこなひするよしして。のこりのともがらにいふやう。つれ立奉るべく候
 へ共。いそぎたる用あればさきだちてのぼり侍ぞといへば。いかにいてたちの事し
 たためてこそはなごめけれ共きかていてぬ。其後此いもじをばうしをもとめけれ
 共なかりければ。おぼつかなき事かぎりなし。さる程に夜明けにければ。君おきてい
 もじにいふやう。約束のかまはいづくにあるぞ。はやくたべとせむれば。大かたしら
 ぬ事なればかたくあらがふ。其時君そらぼけなしたまひそ。急ぼうしはこゝにある
 は。たれにぬりつけんとて。かくほどに人をだしぬかんとするぞ。すみやかに約束の
 まゝに給はるべしとせめかければ。いもじあきれさはきて。いかにもくさる事
 侍らず。いかにかゝる無實をばげにくとの給ふぞとこたへるたれ共あへてもち
 ず。なにと和じやうめいふぞ。年はよりたれ共ちうぼうは六寸ばかりにて。わかき物
 よりはしたゝかにしたりつるはといふに。いもじ聞もあへず。あなみやうが。天道神
 佛はおはしましけるぞ。是見給へ。六寸の物はかゝるやう成物かとして。わづかなる小
 まらのしかもきぬかつぎしたるをかき出したりければ。君いふ事なかりけり。隣
 の者までも聞て。此山ぶししてけりとどよみわらひけり。扱いもじが難はのがれての

わかき物より
 は、一本作我も
 のなは
 ぞ、一本作は○
 やう成物、一本
 无

ぼりにけるとなん。

或所によき聲をそろへて念佛を申させけるに。ちやうもんの女房の中にある念佛者
 を心がけたるありけり。いかでかな物いひかはさんと思ひつれ共。人目しげくかな
 はざりければ。とかくためらひて。行道の時ちとあしをつみて其きそくを見せて。何
 となく立あがりて。うしろどのかたにて。ちと物申さんといひかけたりけるを。返
 事いはば人聞とがむべかりける程に。念佛の音曲にまぎらかして。南無阿彌陀佛の
 南無を。さもあみだ佛と申たりける。いかに。おかしかりけん。

いかに、一本此
 下有字
 近原作此、據一
 本改○ありけ
 り、原作きたり、
 據一本改○殊
 ら、一本作とが
 似是

世に、一本无

近比一生不犯の尼ありけり。いまだよはひざかりにてみめ殊にきよげなりけり。世
 さまもわびしからずぞ侍ける。物まうでしける時。ある僧此あまを見てたへがたく
 えんに覺えけれ共いかはせん。思ひのあまりに家を見せおきて歸りにけり。其後
 思ひわするゝ事もなく。ひしと心にかゝりて日數を送りけり。いかにもさてやむべ
 き心地もせねば。人しれぬ思ひをしるべにて。かのあまのもとに尋行ぬ。此僧みめ事
 がら世に尼に似たりければ。尼のまねをして。つかはれてひまをうかいはんと思ひ
 て行たりけり。かしこにて物申さんとあないしければ。やがてあるじの尼いで、誰
 にかとへは。此僧むねうちさはきて。いよくたへがたく覺ゆるをねんじて。べち
 の事には候はず。世にうはの空成やうに候へ共。みやづかへつかうまつらんとて參

やさし、一本作
おだし、
こ一本元、當行
し、一本元

ける、一本作け
り

別て、一本作別
時して四字

りて候也。としごろ頼みて侍し男におくれて。たのむかたなきひとりうどにて候。男
むなしくなりし日より。さまをかへて候へば。よのつねのみやづかへなどもかなふ
まじく候へば。かやうの御遁世の御あたりにはおのづからめしつかはるゝ事もや候
とて参て候といひければ。げにもうはの空にはおぼゆれ共。さしあたりて人もほし
かりければ。其心の底をばしらね共。物うちいひたるさまなどもやさしげなれば。さ
うなくうけとりてけり。此僧まづしあふせたる心ちして。すへもたのもしう「こ」ぞ
思ひける。みやづかふにかひく敷まめにして。しかも又女とも覺えず。すくよかな
るかたさへありて。ことにをきてたいせちなりければ。一筋に家のうちの事いひつ
けて。又なき大事のものにてぞ侍ける。かくてことしも過ぬ。今は是程の大事のもの
に思はれぬれば。たゞ世わたりにも不足なれば。心のうちの本意をばとかく思ひ
なぐさみてすくしける。次の年の冬の比よりは夜さむからん。今は我衣のしたにも
ねよなどいへば。うれしき事かぎりなし。さるにつけてもいよく心のはたらく事
しづめがたければ。猶とかく心にからかひて其年も暮ぬ。此あま正月七日は別て持
佛堂に候て。齋ひじの折ばかりぞ出んずるとて。其間の事共此今まいの尼によく
いひおきて。朔日より佛の御前におこなひて候けり。七日が間つとめよくして。八日
は例のごとくにてありけり。日比なるしやうじんなるうへ。さまぐのつとめに身

に、一本元
かく、一本此下
有て字
一本意をさげん、
一本作こときり
てん〇て、據一
本補
たぐみ、一本元
〇事なれば、一
本元〇苦、一本
作やう

たび、原作た
き、據一本改
き、一本作けり
め、原作み、據一
本改〇の、かた
つ、一本作の
そ、據一本補〇
おほはり、原作
かほはり、據一
一本改
ま、に、一本作
ご、くに、一本元
心、地、一本元〇
分、原作開、據一
本改
られ、一本元當
行

もくたびれにけるにや。その夜はだゞりとしてねたりけり。此僧思ふやう。かぞふれ
ばことしは三とせになりぬ。何事を旨としてかくは侍ぞ。いかにもあらばあれ。只
今とりつきて本意をとげんとおもひて。よくね入たる尼のまたをひろげてはさま
りぬ。かねてよりしかたくみまうけたる事なれば。おびたしき物を苦もなくねも
とまでつきいれけり。大きにおびへまどひて何といふ事もなく。ひきはづして持佛
堂の方へはしり行ぬ。此僧おはれさ思ひつる事を。今はよき事あらじ。いかせんず
るとむねさはぎて。すみもとにかままりてきけば。此尼持佛堂にてかねをあまた
たび。ちやうくと物さはがしげにうちて。何とやらん物申おとしてかへりき。此僧
いかなるめみきかんずらんと。いよくとがのがれつべくもおぼえ侍らぬに。此尼
おもはずにけしきあしからで。いづくにぞとたづぬるこゑする。うれしく覺えてこ
こに候ぞとこたへければ。やがてまたをひろげて。おほはりかへりてければ。かへ
すく思ひの外に覺えて。やがてをしふせて年比の本意おもひのまゝにせめふせて
けり。さても何とて一ばんには引ぬきて。持佛堂へは入給へるぞと問ければ。その事
之。これ程に心地よき事を。いかゞは我ばかりにてはあるべき。上分佛にまいらせん
とて。かね打ならしに参りたりつるぞと答へける。其後はうちとけてひまもなくし
「られ」ければ。女男になりてぞ侍りける。

補 たらん、據一本

南都に又一生不犯の尼ありけり。つるにあしざまなる名たちたる事もなくてやみにけり。臨終いかゝあらんずらん。世にありがたきためしに人々いひける程に。病をうけて大事になりければ。善知識のために小僧を一人しやうじて念佛をすゝめければ。念佛をば申さず。まらのくるぞやくといひてをばりにけり。一期が間ゆゝしく思ひとりては侍れども。心のうちには此事をかけたけりければこそ。かくをばりのとばにもいひけめ。何事もたゞ心のひくかたが善悪のむくいをさだむる。よくく用意あるべき事にこそ。

此章、據一本補

或ひらあした名僧ありけり。地を一部主持たりけり。それに人をすへて地子をとる侍けるが。打口一丈あまりにあるる尼公をすへたりけり。此僧或所の佛供養の導師に請せられていづとて。尼公をよびていひけるやうは。説經のたうとくなりぬるは。聽聞の者みななくなり。まもおほせぬとはなくとなし。けふの説法にもしなく人なからんは當座の恥なるべし。尼公聽聞の砌にすゝみてかならずなくべし。かつは地殿の公事と思ふべしといひふくめていづとて。此地殿の仰のがれがたくて。聽聞の志はなけれども。彼佛事の所へ行ぬ。ことよくなりて導師高座にのぼりて。かねうちならずより。此尼なきたちたり。たゞいま説經したる事もなきに。あまりにくなきければ。導師あしくなく物かなと思ひて。みかへりてじらりとにらみければ。

ば。尼すくなく泣とももひてにらむと心えて。いよくなきければ。導師とはいかにと思ひて。ますくにらみければ。尼公聲をいだして。さも候はずとよ。わづかなる地一丈あまりが御公事には。これに過てはいかにとなき候はんぞといひたりける。人くはあとわらひけり。

周防國に曾禰といふ所をしりてくだりける人。いろくしき者にて。よきあしきをきらはず。女といへば心をうごかし。けり。はうしとてわらはべをいれてつかはせけるに。此領主いひけるは。をのれがあねに侍なる女は。世にさはやかにてみめもよきよし聞に。まのびやかによびてわれにまいらせよといひければ。小童こわらはやすきほどの事にて候。但あねが母にて候ものこそあねよりもよく候へ。母をまかせ給へかといひたりける。ふしぎなるいひやうなるべし。

近比無沙汰の知了房といふものありける。能書にてなん侍ける。ある人古今を書うつしてたべとてあつらへたりけるを。うけとりながら大かた書ざりければ。主しかねて今はたゞかかずともかへし給ふべしといひければ。知了房こたへけるは。過こにし比痴病をつかうまつりしに。紙おほく入候にしに術つきて。さりとはとこそ古今の料紙をみなもちるて候といひければ。ぬしいふばかりなくおぼえて。料紙こそさやうにもし給ひたらめ。本は候はん。それを返し給らんといへば。知了房其事

うごかし、一本此下有に字

は、一本元、或衍

近、原作此、據一本改、一本元

過、一本此下有候字

候はん、一本作候らん

て、一本元、當衍

りたる、一本作た

ける、原作けり、
據一本改○説
法一本作説經
日一本元
ひはられて、一
本ひ作り、同旁
書云し歟

に候。其本をも紙みそうつにみなつかうまつりて候をばいかくして候べきといひりけり。ともかくいふばかりなくてやみにけり。ぶさたの名をつきけれども。以の外にさたきしてぞふるまひたりける。

坊城三位入道雅隆のもとに。正月朔日深草がはらけ持てまいりたりけるに。酒などのませせて菓子とらせけるに。もちるかみをもぐしてとらせたりけるを。あまりによろこびて。ことしよりはあほやけわたくし淨波梨の鏡にむかひ候たるといひたりける。ふくたのしさいふばかりなし。

彼三位入道うせられたりける時。大夫阿闍梨順聖といふ僧。としごろ其邊の者なりければ。籠僧にいれてけり。五七日の導師にて佛供養しける説法に。今日は聖靈この界をさりましめて。五七日の忌辰に相あたりたり。さだめて性靈炎魔法皇の廳庭に。牛頭馬頭にひはられてこそおはしまし候らめとうちあげたりける。あはれなる中に興さめてぞ侍ける。誠に比興のいひやうに。

嵯峨の釋迦堂に人あまた参りて通夜したりけるに。夜うちふけて僧の有けるが。經爲題目佛爲眼といふ句を朗詠にしたりけり。心ばかりはすると思ひたりけり。孝道朝臣折ふしまいりあひて聞るたりけるが。朗詠はて孝道かの僧にむかひて。おもしろう候つる物かなと色代したりけるを。僧心ちよげに思ひてちと居なをりて。

是は随分に孝道にならひて候しこといひたりけり。此句の事。中御門右大臣宗能。知足院殿の御時。九十句を撰定のうち。妙音院殿また百廿句を撰じくはへさせ給ける。彼是合二百十句之。其中にもかの句入らず。かたぐいあかしきいひやうに。たゞしみなこれを詠じあひけり。

孝道入道仁和寺の家にてある人と雙六をうちけるを。となりにある越前房といふ僧きたりて見物すとて。さまざまのさかしらをしけるを。にくしくと思ひけれども。物もいはでうちるたりけるに。此僧さかしらしきして立ぬ。かへりぬと思ひて亭主此越前房はよきほどのものかなといひたりけるに。かの僧いまだかへらて亭主のうしろに立たりけり。かたきまた物いはせじとて。亭主のひざをつきたりければ。うしろへ見むきて見れば此僧いまだありけり。此時とりもあへず越前房はたかくもなしひきくもなし。よきほどのものなどいひなをしたりける心ばやさ。いとあかしかりけり。

いと、一本元

前大和守時賢が墓所は長谷といふ所にあり。その留守する男くしりをかけて鹿をとりける程に。或日大鹿かゝりたりける。此男が思ふやう。くしりかけて取たらんとねんなし。射ころしたりといひて。弓の上手のよし人にきかせんと思ひて。くしりにかけたる鹿にむかつて。大かりまたをばげて射たりける程に。其箭鹿にはあたら

時、一本作比

からくして、據一本補

け、據一本補

給へば、據一本補
○る、一本元
當符
はい、據一本補

ずして。くしりにかけたりけるかづらにあたりたりければ。かづらはきれて鹿は事ゆえなくはしりにげて行にけり。此男かしらがきをすれどもさらにはゑきなし。縫殿頭信安といふ者ありけり。世の中に強盜はやりたりける時。もしけさがさるゝ事もぞ有とて。強盜をすべらかさんれうに。日暮れば家にくだといふ小竹のよをおほくちらしおきて。つとめてはとりひそめけり。或夜まいりみやづかひける公卿の家ちかく焼亡の有けるに。おはてまどひて出るとて。其くだの小竹にすべりてまるびにけり。腰をうち折てとしよりたるものにてゆしくわづらひて。日數へてぞからくしてよくなりけり。いたく支度のすぐれたるも身に引かつぐこそおかしけれ。

壬生二品家隆の家にて。ある人の子を男になす事侍けり。隆祐朝臣の子になして。やがてかの朝臣加冠はしけり。名をば何とか付べきなど沙汰しけるを。あづみの三郎爲俊といふ田舎侍聞て進み出ていひけるは。此殿に御一家はみな隆の字をなのらせ給へばいへたかとや付参らせらるべく候らんと。ゆしくはからひ申たりげにいていふを。人々わらひのしる事かぎりなし。爲俊が父圖書允爲弘聞て。いかに汝はかゝるふしぎをば申ぞ。殿の御名乗をしりまいらせぬかといへば。いかでかしり参らせぬ事有べきといふ。さるにはかゝる事をば申かといはれて。さも候はず。殿

けり、一本作ける

を、一本元

大、一本元〇ける、一本作けり

おら、一本此下有候字

の、一本元

の、一本元

の御なのりをば家隆とこそしりまいらせて候へ。世にも又さこそ申候なれと陳じたりける。比興の事かの卿きかれて入興せられけりとなん。

同卿の許に。権寺主圓慶といふ僧侍りけり。件の僧ひへどりをかひけり。毛をおそくかへけるをいうくしき物にて。其鳥をとらへて毛をつるりとむしりてけり。二品きかれて比興の事に忍ひて。歌をよみて札にかきて壬生の辻に立られける。

ひへ鳥をむしりつゝみのはだかはらしりすにしてなを渡るなり。

堀河内府入道大納言の時。功德遊有ける。念佛禮讚などはて、朗詠ありけるに。少納言阿闍梨なにがしとかやいひける僧。東方五百之座といふ句を詠ずとて。五百の字をおやまりて八十の座と詠じたりけるを。尾張の内侍籠中にてきいて。八十といひだにはてぬに。今四百二十おちぬといひ出したけり。心ばやさの程ありがたき事也。

橘藏人大夫有季入道の許に年比の青侍有けり。一期不運にてやみにけり。無食にて兩三日経にければ存命も殆あぶなく覺えける。飢饉の年たましく吹田庄より給物をもて來りけり。うちまかせてはよろこびさはぎてとりいるべきに。日のわるければよからん日こそおさめしとて隣の家にやどしをきて。又兩三日の日をむなしく過しけり。とかくいふ計なきあり様也。くだんのおとこ鞍馬の月詣でをしけり。すべて以

へ、據一本翻

の外の苦行者へけり。或日有季入道いふべき事有て尋ければ。鞍馬^一参りて候はぬよしいひければ。よし／＼只今毘沙門の福たまはらんずれば。有季が小恩物のかずならじとて吹田の給物をとめてけり。其後憂悲苦惱する事かぎりなかりけり。

断、一本作割

天福の比。ある上達部嵯峨邊にさうさくせんとして見ありきけるに。大覺寺の池の邊にて破子をひらきたりける所を。老僧のつえにすがりたる一人通りけり。件の僧をよびよせて其邊の事どもたづねければ。えもいはずこまかにこたへければ。いと興ある老僧なりとて酒をすしめければ。斷酒のよしをいひてのます。さらばとて破子を一合あたへければ。今日はときにてあるよしをいひてくはず。さらば後々に必まいれとくいに^二なりて嵯峨の案内者にたのまんなどいひて。家はいつくぞ。又名をば何といふぞと問ければ。老僧のいひけるは。此邊の人は左府入道とこそ申侍れと答に。此公卿あざみまどひて破子の沙汰にもあはずにげにけり。

に、據一本翻

前隱岐守永親がしたしき者に左衛門尉何がしとかやいふもの有けり。永親が家と此ぬしが家とむかひあはせにちか／＼りければ。つねに行かよひけり。つとめてとくただひとり永親がもとへ行ける程に。わすれてるぼうしをもせめてもとりはなちながら門をあゆみ入けるを。人／＼見てふしぎの事かなと笑ひあひけれども。ことばにいふ事なければ。我事とは思ひもよらである程に。朝日の影にもとりのうつつりて

ければ、一本作けるに

渡され、原作渡りたり、據一本改

たる、一本作ける

大、一本元

寶、一本作宇、恐

見えければはじめてさとりて。かしらをさぐるにさぼうしなかりければ。あはてまどひてはしりかへりにける。うしろすがたおもかげさこそおかしかりけり。

將軍入道殿はしめて上洛の時。清水の橋を渡されけるに。いづれの武者の分にてかありけん。白きひたしれ着たる男のたけたちとがらさる體なるが奉行してありけるが。文をみて立たりけるを。わかき女房の清水まうてするものとみへたるが。此男のもとへ立寄ていひかけたる。

たぢろくかわたしもはてしふみ見るは。

といへりけるを。此男つけんずるきそくにてしばしうちあんむけるが。此心やまはらざりけん大聲を出して。いかに將軍の渡させ給ふ橋をたぢろくかとがめければ。おそろしくて足ばやにさりにけり。

四條院崩御のとき。醍醐大僧正の弟子なにがし坊とかやいひける僧。大僧正のもとへ消息をやるとて。さんぬる九日國王俄に死去云々。尤不便の事歟と書たりける。ふしぎなる文章なりかし。僧正腹腸を切て其状を人に見せられけるとなん。

寛元の御禊に院の御さんじきの前にて。右少弁顯雅供奉人とひけるに。馬允なにがしとかや三度なおりたりける。人／＼嘲哂しけり。

寶治の日吉の御幸に。ある上達部供奉ありけるに。侍五人ぐせられたりけり。めん

たる、一本作たりける

候、一本作侍

く／＼にきらめきたる中に一人の侍うす色の白裏の狩衣を着たりけるが。色をそめ
そんじてよにわろくみえけるを。後に長門守盛重かの侍にあひて。先日の御供の侍
ども面／＼にきらめきて侍りしに。うす色のかり衣着て候しあしき男はたれにて候
ぞと問たすける。めんぼくなく覺えて。たれにて候けるやらんとぞとたへける。おか
しかりける事なり。

建長元年（一一七二）閑院殿焼失の次日。宮左衛門ながしとかやいふもの。ぼんのくぼに太刀
はき袖く／＼りて。きのふの焼亡に醍醐に候所にまかり候てはせまいらず候とて。大
納言の二品のつぼねへ参りたりける。人々平給する事かぎりなし。

四、一本无
此、一本作近
を、一本无

同四年の維摩會の延年に。見白拍子のれうに春日の社の神人季綱（號無）をつゝみ打に
めしぐしたりけり。此ごろより男鼓打あしとて。大衆うつ事になりける時。くだん
の黒禰宜大便をもよほしければ。かしらをつゝみながら猿澤の池のはたに行て。し
りをかきあげてかまへけるを。衆徒見て。大衆のいかに加ふる見ぐるしきふるまひ
する希有之。かしらはげといへける時に。季綱にて候ぞと名のりたりければ。さ
る大衆の名乗やうや侍べき。奇怪なりといへば。手をすりてかしらをもきて。こもと
どりをさへげて。鼓打にて候ぞといひければ。わらひてのきにけり。
少將入道善忍といふ人の許に男の下人ありけり。かの入道たびせんとて人に鞍をか

かしら、一本此
上有しや二字

おかしき事哉、
一本作不思議な
るかしづきやう
なり十三字

に、一本作と

りて其下人してとりにやりたりけり。しばしありてもてきたり。鞍の具足なにく
あると、ひければ。鞭あふりなど一々に具足いひて。猶物をいひはてぬけしきなり
ければ。さてく／＼又何か有とたびく／＼いはれて。はかりたる氣色にて御をもづら
も候といひたりける。おかしき事哉。
堀川の院の御時。中宮の御方の御はしたものに沙金といひてならびなき美女ありけ
り。兵庫頭仲正なん思て秘藏しけり。其時殿下の前駈の人々鴨井殿にあつまりて酒
のみける次でに。ある人かの沙金が事をかたりいで。一日内裏にてねりいでたりし
かぎり。あれは天人もこれにはまさらじとこそ見えしか。世にあらばかやうのもの
をこそおもひ山にもせまほしけれなどいふ。鬼こゝめをも物ならず思へる武士は。
おそろしき物ぞ。おもふとも叶ふべからず。いひさたせてありなんと人々いふを。
佐實と云者さかしたちたる本性にて。いなや武士も女のかたにはほるゝものなり。
我はぬすまんとだに思はひ。仲正いかにかまもるとも。それにさはらじといふより。何
をあたにか思ひけん。仲正が事を嘲りおこつくやうにいひければ。かたへはことば
ずくなにてやみにけり。此事たれか申言したりけん。仲正かへり聞て。やすからぬ事
ぞ。おのこどもいかにすべき。かれ弓矢のもと未しらず。かたきにあたはねばよしな
き事なれど。さりとはやすからず。ことがらはかりおとさんと思ふこといひあは

せければ。いとやすき事とて。夕闇の比殿下より出けるを待うけて。車より引おろして。さることいはじと怠状をせさせけり。是を仲正が郎等の中にことに物の心もあらずなさせもあはれもかへりみぬ田舎武者一人有けるが。此事を後につたへ聞て馬にてはせきけるが。此佐實はからくしてあきあがりて。小家にはひいらんと志ける時行あひて。何ともいはず引出してもとよりをきりてけり。やがて仲正が許へ行て是奉らんといひければ。仲正かく程にはおもはず。ふしぎの事たるといひながら。かひなき事なればさてやみにけり。此事佐實こそ我身のためを思ひて。くちよりそとへもいだざねど。かばかりの事さてやまんやは。院聞しめして。仲正が所行然るべからずとて。下手人などめし出されんずるにて。きびしく御沙汰ありける程に。佐實もきられずと申けり。仲正もきらずと申けるによりて。重き罪にはあたらざりけれども。切たる者それがしと慥に聞し召て。その郎等をめすにあとをくらめてうせぬ。仲正力及ばざりければ。院覺しめしわづらひて。其時盛重が檢非違使にて候けるを召て。此もといり切たりと聞ゆる男。かまへてとらへてまいらせよと仰られければ。承て中へかれがゆかりを尋て。母の尼公が家をあかつき夕暮ごとにかうかひけり。かゝる程にある朝ぼらけに法師の女のすがたをつくりて門をたたく事あり。こられたいにはあらじとあやしめて。やがてからめて是をとふに。われはあやまたず。か

正、一本元〇仲
字、以下十八
一本元

の人の在所は清水坂の志かゝの所也。其使にまふて来る計也とあはてさせければ。わ法師をいかにすべきにはあらずかしこのまるべのれうなりとて。程へばかへりもぞきくとて。やがてうち立てからめに行て。かしこにも思ひよらぬ程なりければ。わづらひなくからめとりて歸るに。盛重思ふやう。六波羅には刑部卿忠盛居られたり。其かたはらを過ばうばくれんず。おこの事になりなんと思ひて。すゐるなる法師をとらへておかしのものにつくりなして。そなたへやりて。まことのものをば人ずくなにて祇園中路といふかたより。まのびやかにぐしてやりてけり。さりければ忠盛朝臣はよしなしとや思ひけんおとなくてぞ過ける。其時清水の大衆おこりて。此御寺のほとりにてすゐるに人からむる事むかしよりなし。たとひおかしのものありとも。別當にふれられてこそからめられめといひて。あつまりむらがりていかにもとをさむとしければ。わづらはしくてふところの中にて。たう紙を文につくりてさし出ていふやう。いかでかふれ奉らてはからめ侍らん。かれにきかせむとかくしつれば。披露はせぬにこそあれ。此あかつき別當坊へ別當宣をつけられたり。其請文是にありとてさし出したれば。さるにては左右におよばずとてとをしやりてけり。此次第院聞しめして誠に感じ覺しめしけり。扱かの男はめしとはせ給へば。何しにかはかくし侍らん。切候にきと申けるを。佐實も當時こもりるねば。眞實のやう

給へ、原作けれ、
據一本改

聞しめさまほしく思召て。又盛重に佐實がもとより切きらず儘に見てきなんやと仰下されければ。勅定又のがれがたくて領狀申て。出さまに北面に安忠が候けるを。いざ給へ。人のもとへ酒のみにかかるに。ともなひ給へかしとさそひけり。時のきりものなればよろこんで相ぐして行。いづくなるらんと思ふ程に。此佐實がもとにゆきて事のつるでにつくりいで。さまぐの事いひあはせさだむる程に二時はかりに成ぬ。あるじ酒取出てのませける程に。われも人も興に入て。あるじにかわらけさすとて。をそれたるよしにて。へいしとりてよりて。あしくふるまへるさまをして。ゑぼうしをつきおとし。いみじきあやまりともてさはぎながら是を見れば。めぐりをうつくしくあみで。ゑぼうしを着たりける也。安忠に目をくはせければ。其時にこの證人のために早くさそひけるよと心得てけり。盛重ゆしきあやまちしたる。つらつくりておそれくるめきて。事はてぬれば院へ歸り参りて此よしを申て。それがし證人のために相ぐして侍りつと奏しければ。一人罷りたればとてうたがひ覺しめすまじけれども。證人をさへぐしたれば殊に嚴重と仰られて。仲正が罪おもく成にけり。かゝれども。佐實はあらがひたるやうにて出仕しありきけり。人わらひけれどさてのみ過にけり。其時花園のおと(晴)いまだ司もあさくちはしけるに。御文の師にて敦正といひける者参りけるを。いと文のかたにすぐれたる聞えもなかりけるに

おとし、一本此下有つ字
に一本作ぞ
かと、一本作にかと
て、一本无

や。此佐實花園殿に参りて物語申ける次でに。御文談の候はん時は佐實もめされ候べき物を。敦正にはよもおとり候はじとて。かれがあしき事どもを書つくし聞へければ。心得ずおぼしながら。さる程にあひしらひ給を。まことにぞ思ひけん又申けるは。いみじき秀句をこそ仕て侍れと申ければ。興有事かな。いかにと問給ふに。

有花々々。敦正山之春霞紅。

と申ければ。あるじの殿わらはせ給ひて。いみじき秀句也と感じ給ければ。ゆゝしく罷出にけり。かくいふは此敦正は鼻のおほきにて赤かりけるを。あこつきてかくかきてけり。殿いまだわかき御ほどなれば。敦正が参たりけるに此次第をかたらせ給ふに。大にいかりて弓矢とる身にて候は。仲正がやうになき目をも見せつべく侍れども。其事身に似ぬわざ。此下句をこそつけ侍らめとて。

無鳥々々。佐實園之冬雪白。

とぞ申たりける。殿いみじくかんじ給ける。世の人其比の物がたりにてぞ有ける。もといり切られてそれにもこりず。猶利口しありきける程に。また付られにけりとなん。

後嵯峨院の御時。龜山殿御所の比。高倉宰相茂通卿と榮性法眼とはむかしよりの知音にてありけるに。龜山殿の宿所むかひあはせにてありければ。あさゆふよりあひ

ける、一本作け

て、一本作に

有、一本作侍

か、據一本補

權、原作桂に、據一本改○けり、
據一本補
亭、原作亭、據一本改

てあそびけるに。茂通卿榮性が亭へ行向ひけるやうは。本鳥をはなちて小袖ひやく
えにて門を入よりして。榮性法眼めちやまけく〜と。大聲にていひて縁をのぼりけ
れば。榮性とりもあへず籬の中より。茂通めちやまけく〜とぞいひける。さて其後
よりあひて雑談酒宴などしけるとかや。知音もかゝる事やは侍るべき。人の利口に
て有けるやらん。かの榮性法眼は忍びてある尼をかたらひて持たりけり。同宿はま
ながら。さすが同じ所にはをかて。中一間をへだて、ぞすまひける。此事のまたくな
りける時は。ひる中にもまへをかきあけて。一尺寸はんの小佛頭ふりて参りたりと
いひて。尼がもとへあゆみ行ければ。此尼とりもあへず又まへをはたげて。三間四面
の小御堂御戸ひらきてまいり候とこたへて。中の間へ引合てはじめけるとなん。此
興の事なりかし。

權漏寇博士季親といふ者ありけり。周易の博士にて其道におぼえありけれど。風月
のかたことなる聞えなかりけり。ある文亭の連句の座にのぞみたりけるに。上句の
番にあたりておそく出ければ。其中にむねとの儒者のありけるが。是をあなづりた
りけるやらん。

閉レ口後來客。

かく上句をそばにていひたりければ。季親。

合レ陰先達儒。

とぞ付たりける。かの儒者物いふ事なかりけり。是も利口の過たりける故なり。
賀縁阿闍梨と聞へし人。何事の意趣かありけん。慈惠僧正を濫行肉食の人たるよし
不實利口を申たりけるを。僧正かへりきし給ていきどをりて。起請文をかきて三塔
に披露せられけり。其詞に云。

若謂レ令レ破戒無慙之僧住コ持天台座主ニ者。恐貽ニ狐疑於先賢。方致ニ狼藉於後輩。
者歟。因レ茲今對三寶。披ニ陳此事。

持律の人にそら事を申付たるむくひとてくるひありきけるとぞ。起請のおこりこれ
なり。

古今著聞集卷第十六終

古今著聞集卷第十七

怪異第廿六

怪異のおそれ古今つゝしみとす。まかあれどもかの白氏文集凶宅の詩にいへるがご
とく。人凶也。非ニ宅凶一。もろくの怪異もさこそ侍らめ。なずらへてしるべき事に

や。

延長八年七月十五日酉の時に。おほきなる流星東北をさして引けるが。その跡化して雲となりにけり。同廿日くろき雲にし「て」南より來りて龍尾壇をおほふ。すなはち風吹て大蛇の五六丈ばかりなるおちかゝりて。高欄やぶれにけれど蛇は見えざりけり。

出雲國秋鹿郡の北の海にくる島といふ小島あり。海草などおほくおひけり。天慶三年十二月上旬に。にはかにきえうせて見えす成て。其あとに大きな石ぞ。其數志らずそばだちてありける。

同四年正月下旬に。同國海邊憂をうつこゑ聞へけり。夜あけて見れば島根のこほりのさかひより。楯縫郡のさかひまで一町あまりが程。こほりをかさねて塔をつくりてならべたてたりけり。をのく高さ三丈あまり。めぐり七八尺ぞ有ける。後にはきえやうせけん。何のまさいといふことをまらず。おそろしかりける事也。

後朱雀院の代のすへに除目をこなはれけるに。大きな人わかきくみをくびにかけ。四季の御屏風のうへに見へけるが。主上御覽じてのち。御心地れいにたがはせ給ひて。いくほどなくて崩御ありけり。おそろしかりける事也。世の人八幡の御躰かたぞ申ける。何の故にてさはいひけん。おぼつかなき事也。

て、一本元、當行

同國、原作國々、
據一本改

や、一本元

が、一本元

事、據一本補

ついで、據一本補

光、據一本補○
倍、一本作部

國風、據一本補
たびごと、一本
作毎度

崇徳院御位の時。保延六年の秋の比。御夢に白河僧正増智まいりたるよし申ければ。まばらく候へとて。やがて御たいめん有けるに。僧正柿のすり水干を着て。久しく見參に入らざるよしを奏し侍りけり。御夢さめさせ給ひてのち御心例ならずおはしまして。時々朗詠讀經などせさせ給ひけり。ある時は御てうづめして西にむかはせ給ひて。生身の成佛などおほせられけり。或ときは又故僧正増智なりなど、ならせ給けり。ふしぎなりける事也。さりながらのちくはべちの御事もなかりけるにや。

治承二年六月十二日未の時。坤の方の星地にをちたりけり。其てい水精のごとし。尾の長さ二丈あまり也。中たへて又七八尺ばかり光有けり。大膳權大夫安倍泰親朝臣ぞ奏は奉りける。

同四年四月廿九日未時ばかりにつじ風吹たりけり。九條のかたよりおこりけるが。京中の家或はまろび或は柱ばかりのこれり。死ぬるもの其數をまらず。まともやり戸さらぬ雜物雲の中に入て。風にまたがひて飛けり。ある所には雨ふり。或所にはいかづち鳴。九條の坊門東洞院邊には雪ふりたりけり。其比かゝる風たびくふきけれど。此度は第一にをびたしかりけり。たびごと乾の方より巽へぞふきける。おそろしき事いふばかりなかりけり。

清長卿貫首のとき。殿上人ども相伴ひて。舟岡にむかひて虫をとりけるに。風あらく吹て清長朝臣の冠を吹ちとしてけり。件の冠とをくふかれ行て。死人の頭の有けるに。人のわざときせたるやうにかゝりにけり。人々あざみあへりけり。さてしもあるべき事ならねば。いぶせながら其冠をとりて着てけり。其後四五年ばかり有てうせられにけり。かやうの事はあやしむべき事也。

變化第廿七

千變萬化未_レ殆有_レ極。むかしより人の心をまどはずといへども。猶其信をとりがたき事也。

仁和三年八月十七日亥の時ばかりに。或者みち行人に告げるは。武徳殿の東の松ばらの西に。みめよき女房三人東へ行けり。松の下に容色美麗なる男いできて。一人の女の手をとりて物がりまけるが。數刻を経てこそまきこえず成ぬ。おどろきあやしみて見ければ。其女手足おれて地にあり。頭は見へず。右衛門左兵衛陣に宿「し」侍したる男。この事を聞てゆきて見ければ。其かばねもなかりけり。鬼のまはぎにこそ。次の日諸寺の僧を請せられて讀經の事ありけり。其僧どもは朝堂院の東西の廊に宿侍したりけるに。夜中ばかりに騒動のこゑのまければ。僧ども坊のそとへ出て見れば。やがてまづまりてなに事もなかりけり。是はされば何事によりて出づるぞ

て、據一本補

左、三實略記作
右〇し一本元
當衍

殆、一本作始

と。をのくたがひに問けれども。誰もわきまへたる事なかりけり。物にとらかされたりけるにこそ。此月に宮中京中かやうの事どもおほく聞へけり。延長七年四月廿五日の夜。宮中に鬼のあと有けり。玄輝門内外桂芳坊のほとり。中宮應常寧殿の内などにぞ有ける。大きな牛の跡にぞ似たりける。そのひづめの跡青く赤き色をまじへたりけり。一二日の間に次第にうせけり。北の陣の衛士が見けるには。大きな熊陣中に入て則ち見えす。其鬼のあとの中におさなきもの、跡もまじりたりけりとぞ。おそろしかりける事哉。

衛、一本作陣

に、一本元

同七月五日夜。右近衛下野長用。般富門よりまいりて武徳殿に至る程に。さきにくろき物きて太刀はきたる者。人をとらへてひとり行けり。長用追付て見ければ。此ものみかへり。まろき笏をぞもたりける。扱えもんの陣にいたりぬ。陣の内より三位一人出あひたり。供のもの火をともしたりけり。三位光臨を相待とて。他事をもかたらひけり。火をともしたるものはすりぎぬをきたり。長用鬼神にこそとおそれ思ひて。先かへりて般富門のもとに至りてさきの所を見るに。火百あまりともしたる物見え

み、據一本補〇
右衛門、一本本作
左衛門、一本本作

けり。や、ひさしく有てぞきえける。

たけ、一本元
長、一本元
し、一本元

承平元年六月廿八日未の刻に。衣冠着たる鬼のたけ一丈あまりなるが。弘徽殿のひがしの欄のほとりに現じて。やがてうせにけり。或は夢想とも人申けり。一定を志らず。其比十ヶ夜ばかり曉に及びて。八省院と中務省の東の道とのあひだに。人馬の聲東にむかひておほく聞えけり。まとはなかりけり。是も鬼のまわざにや。
天慶八年八月五日の夜。宣陽建秋兩門の間に馬二万ばかりの音しけり。内裏引いるほど數刻を經けり。左近のわきの陣に候ける近衛左兵衛の陣の吉上みな是を聞けり。はじめは馬のをとなひえけるが。後には又人數百人がをとなひにてきこえける。

ける、一本補
○吉上、一本作
人々

同日あしたに。又紫宸殿の前の櫻の下より永安門まで。鬼のあし跡馬のあし跡などおほく見えけり。むかしはかゝる事つねに有けるにこそ。

櫻、一本作櫻、恐
草林相渉而語者
威、原作威、據一
本改

むかし玄象のうせたりけるに。公家おどろき覺しめして。秘法を二七日修せられけるに。朱雀門の上よりくびに繩をつけておろしたりける。鬼のぬすみたりけるにや。修法のちからによりておろしたりける。むかしはかく皇威も法驗も嚴重なりける。めでたき事也。

五の宮の御室まづかなるゆふべ。たゞいま御手水めしてたゞ一所おはしましける

補すが、據一本
ながら、原作け
り、據一本改○
いはほり以下十
五字、據一本補

にても、一本此
下有な字
候て、原作候は、
據一本改

に。御簾をかへけて。たけ一尺七八寸ばかりなるもの、足一つあり。顔すがたはさすが人のやうながら。かはほりのつらに似たるまゝありて。御前に候けるを。あれは何もの、やうだいぞと仰られければ。をのれは餓鬼にて候之。水にうえたる事たへがたく候。世間に人のわづらひ候をこり心地と申候事はそれが致す事に候。われと水をもとめ候へば。いかにも得がたく候て。人につきてそれがのみ候にうえをやすめ候也。然るをもろくの人きみに申候て。御手跡にても御念珠にても。たまはり候て。身にふれ候者は。われにをかさるゝ事候はず。まして御加持など候ぬれば。あたりへだにもよらず候。是により候て水のほしう候事。たへ志のぶべくも候はず。たすけさせおはしませと申ければ。いとおしく覺しめして。まよにきくがごとくならば不便なる事之。これより後こそ其心をえめとて。御たらひにみづから水を入させ給ひて給はせければ。うつぶきてよに心よげにすはくと皆のみてけり。猶ほしきかとはせ給へば。すべてあくときなく候と申ければ。水生の印をむすばせ給ひて。御指をひとつ口にさしあてさせ給へば。うれしげに思ひてすいつきまいらせけり。さる程に其御指より次第に御くつうありて。御身までせきのぼれば。はらひすてさせ給て火の印をむすばせ給ひければ。御心地もとのごとくならせ給ひにけり。久安四年の夏のころ。法勝寺の塔のうへに夜ながめける哥。

御、一本元、非是

我いなばたれまたこゝにかはりるんあなさだめなの夢のまくらや。
天狗などの詠じ侍りけるにや。

院、據一本補

からくして、一
本作からうとて

二條院の御時五節卯日の夜。主殿司指燭をさして。南殿の東北のすみのはしをとをりけるに。うしろよりくびのほどをおすもの有けり。すなはち主殿司たえ入にけり。あはて、指燭をふところに入たりける程に。衣裳に火もえつきてすでに死ぬべかりけるが。からくして命ばかりはいきたりけり。ばけ物のしわざにこそ。
承安元年七月八日。伊豆國興島の濱に船一艘つきたりけり。島人ども難風に吹よせられたる舟ぞと思ひて行むかひて見るに。陸路より七八段ばかりへだて、舟をとめて。鬼繩をおろして海底の石に四方をつなぎて。かの鬼八人船よりおりて海に入て。まばし有て岸にのぼりぬ。島人粟酒をたびければ。のみくひける事馬のごとし。鬼は物いふ事なし。其かたち身・八九尺計にて。髪は夜叉のごとし。身の色赤黒く。眼まろくして猿の目のとし。皆はだかえ。身に毛おひず。蒲をくみて腰にまきたり。身にはやうくの物のかたを煮り入たり。まはりにつくりんをかけた。をの六七尺ばかりなる杖をぞもちたりける。島人の中に弓矢持たる有けり。鬼こひけり。島人おしみければ。鬼ときをつくりて杖をもちて。まづ弓持たるをうちころしつ。およそうたるもの九人がうち五人は死ぬ。四人は手を負ながらいきたりけり。

身、一本此下有
は字○赤、一本
此下有く字
て、據一本補

岸、原作底、據一
本改
おま、一本元、當
衍

青、一本作春

御坊、一、本作僧

任、一本作遠○
つくり、原作め
ぐり、據一本改

其後鬼脇より火を出しけり。島人皆ころされなんぞと思ひて神物の弓矢を申出し。鬼のもとへむかひたりければ。鬼海に入て岸より船のもとに至りてのりぬ。則風にもかひてはしりさりぬ。同十月十四日國解をかきて。おとしたりける帶を「あと」して國司に奉りたりけり。件の帶は蓮花王院の寶藏におさめられけるとかや。
東大寺の聖人青舜坊は。もとは上醍醐の人。そのかみ上醍醐にて如法經をかきておはしけるに。柿の衣袴着たる法師のいとあそろしげなるが。いづくよりともなくいできたりて。上人をかきおひてそらをかけて行けり。三千世界眼前に見えていたらぬ所なし。さていづくともまらぬ山の中に入て行てうちあろしてけり。あさましく思てゐたる程に。又同じさまなる法師どもその數おほく見えきたる。何とやらんめんくゝに物をいひあへり。かゝる程に其中にむねとのものとおぼしき僧いで來て。上人を見ていふやう。いかに此御坊をばかゝる所へはぐし奉りたるぞ。はなはだ有まじき事。すみやかにもとの所へおくり奉るべしと。大におどろきたるけしきにていひければ。ありつる法師又かきおひて行かと思ふ程に。上の醍醐の本坊にうちをきたりけり。これ天狗の所爲也。
主殿頭光任朝臣法住寺をつくりける時。子息近江守仲兼毎日奉行して參けり。或日退出しける程に。日暮でのち東寺邊をとをりけるに。相供したる下人共みな車のさ

て、一本无

法師、據一本補

きにはしりたりけるあひだに。車のうしろには人もなかりけり。よの中くらくてわづかに星のひかりほのかなるに見れば。白きひたゝれきたる法師一人車のうしろにわゆみ來けり。あやしう思て後のすだれをかゝけて見れば。父朝臣が許にめしつかふ中間次郎ほうし也けり。其比件の法師を勘當きて追出したる比之。只今こゝにきたるは我をおかさんと思ふにこそと思ふより。きつくわいに覺て。下人共にかくといはず。車刀のあるをとりにて。うしろよりおどりをりて此法師に云やう。汝は次郎法しめか。何の故に只今こゝには來たるぞ。きつくわいのやつかなとてはしりかゝりたるを。此法師次郎法しと思ふ程に。其たけ次第に大きに成て。かきけすやうにうせにけりと思ふほどに。空より仲兼がゑぼうしを打ちとして。もどりを取て引あげり。その折車刀にてあげさまにさしたりければ手こたへまけり。よくさしつと思ふほどにもといりをはづしてつちへあとしけり。自青のかりぎぬを着たりけるに。血おほくながれつきたり。右の手などにもつきたりけり。扱下人は主人のかゝるどもまらず。車にのりたるぞともおひて。父朝臣が亭きりつゝみへやりて行て。おろさんとするに主人なし。おどろきさはぎて。すなはち人勢おこして。火おほくともしてもとむるに。東寺の南つくり道の田中にもとめ出してけり。太刀を手に持ながら死て有けり。則かきもて行て數日護身などしてもとのごとくに成にけり。その

て、據一本補

女、一本无、非是

ら、一本无、當行

け、據一本補

けり、據一本補

○さ、據一本補
○の以下十字、
據一本補
○の以下十字、
據一本補

たり、一本无、
一腰以下六字、
據一本補

太刀をば法皇のめして。蓮花王院の寶藏におさめられにけり。

後鳥羽院の御時。八條殿に女院わたらせ給けるころ。かの御所にばけもの有よし聞えければ。院の御所より庄田若狹前司頼慶がいまだ六位なりけるをめして。件のばけ物見あらはして參られと仰られて。彼御所へまいらせられにけり。頼慶すなはち八條殿に參りて。寢殿のきつねどに入て待けり。六ヶ夜迄待たりけれどもあへてあやしき事なし。御所様にも其程はさせる事なかりけり。七日にあたる夜待かねて少まどろみたりけるに。かはらけのわれをもて頼慶が頭にはら／＼となげかけける。此時居なをりて物は有りけりと思て待るたるに。又さきのとくばら／＼となげかけけり。されども目に見ゆる物はなし。まばし計有て頼慶がうへをくるき物のつつさきのやうなるがはしりこへけるを。下よりむずと取とめてけり。見れば古狸の毛もなきにてぞ侍ける。やがてをしふせて指貫のく／＼りをぬぎてまばりて。いきながら院の御所へるて参りたりければ。御感のあまりに御太刀一腰宿衣一領ほらびを給はせけり。其後はかの御所にばけ物なかりけり。

水無瀬山のおくにふるき池有。水鳥おほく居たり。件の鳥を人とらんとしければ。此池に人どり有ておほく人まにけり。源馬允仲隆。薩摩守仲俊。新馬助仲康。此兄弟三人院の上北面にて水無瀬殿に祇候の比。をの／＼相議してかの水鳥とらんとて。も

は、據一本補
て、據一本補
つき、據一本補
波、一本作沼

ち細の具など用意して行むかはんとするを。ある人いさめて。其池にはむかしよ
り人どり有ておほくとられぬ。はなはだむかふべからずといひければ。まことに無
益の事之とてとまりぬ。其中に仲俊一人思ふやう。さるとても人にいひおどされ
て。させるみたる事もなきにといまるべきか^は。きたなきこと。我ひとり行て見
んとて。小冠者一人に弓矢もたせて。わが身は太刀計打かたげて。闇の夜に^て道も
みへねど。まらぬ山中をたどる^く件の池のはたに行^{つき}てけり。松の池へおひか
かりたるが有けるもとに居て待所に。夜ふくる程に池の面震動して。波ゆばめきて
おそろしき事かぎりなし。弓矢はげて待に。まばしばかり有て池の中ひかりて其體
は見へねども。仲俊が居たる所の松の上にとびうつりけり。弓ひかんとすれば池へ
とびかへり。矢さしはづせば又もとのごとく松へうつりけり。かくする事たび^く
になりければ。このもの「^く」射とめん事はかなはじと思ひて。弓をうちおきて太刀
をぬぎて待所に。又松にうつりて。やがて仲俊が居たるそばへ來りけり。はじめは只
ひかり物とこそ見^つるに。近付たるを見れば。光の中に年よりたる姥のえみ^くと
志たるかたちをあらはして見えけり。拔たる太刀にてきらんと思ふに。むげにまぢ
かきをよく見れば。物がらあんべいに覺えければ。太刀をうちすて^くむずと^くらへ
てけり。とられて池へ引入らんとしけれど。松の根をつよくふみはりて引入られず。

、一本无、當行
つ、據一本補

へ、據一本補
所、一本无、恐衍

唯、原作雜、據一
本改、下同
は、一本无、當行

まばしからかひて腰刀をぬきてさしあてければ。さされてはちからもよはりひかり
もうせぬ。毛むく^くとあるものさしころされてあるを見れば狸^くけり。これをと
りて其後御所^へ参りて。つぼね^所へ行てぬぬ。夜あけて仲隆等來て。夜前ひとり
高名せんとして行しが。いか程の事したるぞとて見ければ。すは見給へとて古狸をな
げ出したりけり。かなしくせられたりとして見あざみけるとなん。
建保の比大原の唯蓮坊五種行をはじめ行はれけるに。天狗たび^くさまたげをなし
けり。唯蓮坊は書寫法にて侍けるに。ある晝つがた。あかり^あまやうじのそとにて聞も
まらぬ聲にて唯蓮坊とよぶ人有。たぞとばかりこたへて「は」あはず。さる程に
うしろ戸のかたより此人いりくるを見れば。いとおそろしげなる山ぶし^く。天狗に
こそと思ふより。おそろしき事限なし。た^く十羅刹を念じ奉りて又目もあはさず書
寫するに。此山ぶしあ^くたうとげにおはする物かなといひて其日はかへりぬ。其後
又見もまらぬ中間法師一人來りて云やう。只今僧正御房御入室候。見参せんとあり
といへば。其時は天狗とも思ひもよらでいそぎいで^く見るに。實にも僧正のあまた
の僧をぐしておはしたり。爰へとよばれければ。その命にしたがひてよりゆくに。こ
こもと思ふに次第に遠く成けり。こはいかにとあやしく思ふ程に。此僧共立かこ
めて。其中に一人かづら繩をもちて唯蓮坊に打かけり。はやくまばらんとするに

是 現、一本作現、非

こそと思て。劔をぬきてこれをあはくに。かづらみなきられてのきにけり。かくする
事たびく成れども未らずして法師ともうせぬ。それより唯蓮坊はかへりて猶
此行をいたす。又次の日山ぶしあかり障子をわけて來れり。さきのごとく他念なく
十羅刹を念じ奉りてゐたるに。天狗手をさしやりて唯蓮房のかひなをとりて。いざ
給へといひて引いださんとしけり。唯蓮房すまひていでず。かくからかふ程に硯に
小刀有けるをとりてもたりける程に。小刀を天狗のかひなにいさゝかつきたてけ
り。其時天狗このぎならんにとりてはといひてあらく引出していぬ。そらをかける
かとおぼしくて。行心もこゝろならず。只夢のごとし。よもの梢などの志たにみくだ
されけるにぞ。空を行とはまられける。扱ある山の中にをきつ。いさゝか竹の門ある
家のふるびたるにをきて。あかり障子の有けるを引わけて。これへと請じ入れれば。
是程の儀になつてはいなんともかなはじと思ひて。いふに志たがひて入ぬ。内のか
たをきけばこのまうけいとなむとおぼしくて。人あまたがをとまひしてひしめきい
となむ。客人入らせ給ひたりといふ程に。法師一人高杯にさかな物すへてもて來り
てすへたり。又銚子に酒入て來れり。是まゝ候へとすむるを見れば。此さかなに
もれる物どもすべで見も未らぬ物也。ともかくも物いはず。たゞ三寶に身をまかせ
て。かひつくるひてゐたれば。志きりに是をすむ。斷酒のよしをいひてのまねば。

れす、
上有小
一本此

此酌取の法師いかにも御酒まいらぬよしをおくのかたへいひければ。さらば是をま
いらせよとて。則ゆゝしき美膳を取出したり。是も又つやぐ見も未らぬ物どもを
とりそなへたり。御酒をこそまいり候はざらめ。是をばまいり候べきことすむれ
ば。持齋のよしをいひてくはず。あるてなをすむれどもいまだくはずして。いよ
いよふかく祈念を致す所に。竹の戸のかたに人の音するを見やりたれば。白装束成
童子二人ずはへを持ておはします。これを此天狗法師うちみるより。やがてうせに
けり。さしもおくのかたにひしめきのじりつるおとなひども。すべて息をもせず
成ぬ。木の葉を風にさそひていぬるがごとし。其時唯蓮房心神やすく成て恐るゝ事
なし。餘りのふしぎに家のおくさまに行て見めぐるにすべて人なし。十羅刹のたす
け給ふにこそと。たうとくかたじけなき事限なし。さるにてもそこらの物どもいづ
ちへうせぬらんとおぼふに。或は縁のつかはしらのかくれ。或はなげしたるきの間な
んどに。わづかに。ねずみはがりの身に成て。小法師ばら身をそばめ世をおそれてか
くれまどひをりけり。唯蓮房を見ておそれたる事あさましげ也。其童子ひじりをよ
びて。おそれ思ふ事なかれとて。一人はさきに立。一人はうしろにたちておはしま
す。はじめきたる時ははるくくと野山をこえ空をかけりやゝひさしかりつるに。此
童子の御うしろに志たがひては。たゞ須臾のあひだに本坊に行つきにけりとなん。

これ更にうきたる事にあらず。末代といひながら。信力にこたへて法験のむなしからざる事かくのとし。

併り合、一本作
れり合

これも建保の比。御湯殿の女官高倉が子に。七歳に成あこ法しといふ小童子ありけり。家は樋口高倉にて有ければ。ちかくに小童部あそび伴ひて小六條へ行にけり。かいくらみ時に。小六條にて相撲をとらんとてねり合たる所に。うしろに築地のうへより。何とは見へわかず。たれ布のやうなる物のうちおほふと見へける程に。此あこ法師うせにけり。おそろしき事限なし。かたへの童部みなにげぬ。おそれをなして人にもかくともいはず。母さはぎかなしみて。いたらぬ所もなくともむれども見へず。三日といふ夜の夜半計に。女官が門をことごとくしくたしくもの有。おそれあやしみてさうなくわけずして内よりたぞと問に。うしなへる子とらせんわけよといふ。猶おそろしくてあけず。さるほどに家の軒にあまた聲してはあとわらひて廊のかたに物をなげたる音しけり。おそろしなから火をともしして「又」見れば。げにうしなへる子と。なへくとしていける物にもあらず。物もいはずたゞ目ばかりまばたきけり。驗者よりましなどすへていのるにも「など」おほく付たり。見れば馬のくそ成けり。三たらひ計ぞ有ける。されども猶物いふ事もせず。よみがへりのとくにて。十四五ばかり迄はいきてありし。其後いかゞ成侍りけん。其時見たりける人のか

は、一本元
る音しけ、一本
元〇又、一本元
當衍
なご、據一本補

たり侍りしなり。

に、一本元

大納言泰通の五條坊門高倉の亭は。父侍従大納言の家にてふるき所也。相つゞきてすまれける程に。狐おほく常にばけり。され共となる事など志出したる事もなければ扱過られけるに。年をへてますくにはけける程に。大納言いかり給てきつねがりをしたねをたちてんと思て。侍共にみな其の用を仰せてけり。あす下人共あまた具してひとりももれず皆参るべし。而々に杖又弓矢など用意すべきよし仰つ。あす四方をよくかためてついでづのうへ屋の上に入をたて。又天井のうへに入をたて。みな狩出していでん所を打ころし。射ころさんとさだめてけり。さる程に其曉がたに大納言の夢に見給ふやう。年たけあらがまるき大童子の。とくさの狩衣きたる一人。西向のつぼの柑子のもとにかしこまりて居たり。大納言あれは何ものぞとひければ。おそれく申けるは。是は年比此殿の御内に候もの。われ二代まで相續きて候ほどに。子共孫まであまたいできて候。をのづから狼藉をふるまひ候事など。心のよび候ほどは制止仕候へども。用る候はぬによりて。今かたじけなく御勘氣にあづかり候事。尤其いはれある事に候。明日みな命をたれまいらすべきよしを承候。御さたのやう承及候に。まことにいかでか一人もにげのがるもの候べき。こよひばかりの命かなしく候て。おそれくうれへ申上候はんとて参て候。まげて此

て、據一本補

て、據一本補

度の御勘當をばゆるし給はり候へ。今より後をのづからも忘れ事つかうまつり候はば。其時いかなる御勘當も候べき。わかく候やつばらに此御氣色のやう申ふくめ候なば。いかでかこり侍らず候べき。あやまりて御まもりと成て候は。今より後は御内の吉事などをばかならず告まらしめまいらすべく候といひて。かしこまりたるるとみるほどに夢さめぬ。夜もあけてまらぐと成にければ。大納言おき給ひて。はしのやり戸あけて見出されければ。夢にこれ大童子が居たると見つる木のもとに。老狐の毛なきが一疋有。大納言を見奉りておそれたるていにて。やをら簀子の下へはひ入にけり。ふしぎにおぼえて。其日の狐がりはとめてけり。其後はばけものながくなく成ぬ。家中に吉事あらんとては。かならず狐ないてつげれば。兼て思ひまりけるとぞ。

齋藤左衛門尉助康丹波の國へ下向したりけるに。狩をして日くれたりけるに。ふるき堂の有けるに内へ入て夜をあかさんとしけるを。其邊の子細まりたる者。此堂には人どりするもの、侍るに。さうなく御とまりはいかといひけるを。何事のあらんぞとて猶とまりぬ。雪ふり風吹て。聞つるにあはせて世中けむづかしくおぼえて。正面のまに柱によりかゝりてゐたりけるに。庭のかたより物のきほひたるやうにまければ。あかり障子のやぶれよりきつと見れば。庭には雪ふりてまらみわた

内へ入て、一本作うち入て

け、原作を、據一本改

りたるに。堂の軒とひとしき法師のくるくとして見えけり。さりながらさだかには見えず。去程にあかり障子のやぶれより。毛むくくとおひたるほそきかひなをさし入て。助康が加ほをなでくだしけり。その折きと居なをればひき入けり。其後あかり障子のかたにむかひてかたまりねて待程に。又さきのとく手を入てなでける手をむづと取てけり。とられて引かへしけれども。もとよりすくやかなる者なれば。よく取てはなさず。まばし取からかひける程に。あかり障子引はなちて廣庇へ出ぬ。障子の中へだて、うへにのり居にけり。軒とひとしう見へつれど。障子の下に成てはむげにちいさし。手も又ほそく成にければ。いとくかつのりてへしふせてをるに。ほそ聲を出してきくとなきけり。其時下人をよびて。火をうたせてともしてみれば古狸けり。あした村人に見せんとて。下人にあづけたりけるを。下人共いふかひなく焼くらひてけり。次日おきて尋ければ。かしらばかりを残したりけり。正體なくて其かしらをぞ村人に見せける。其後はながく此堂に人どりする事なかりけり。三條の前の右のおと(原)の白川の亭に。いつこよりともなく。飛磔を打ける事雨の如し。人々あやしみおどろけども。何のまわざといふ事をまらず。次第に打はやり。て一日一夜に二興ばかりなどうちけり。葎やり戸を打とをせども其跡なし。さりけれども人にあたる事はなかりけり。此事いかにしてとむべきと。人々さまぐ

雨の如し、一本作にける○あやしみにける○あやしき、原作あやしき、一本改、一本作興、一本改、一本作興、一本改

に譲すれども。まいたしたる事もなきに。ある田舎さぶらひの申けるは。此事といひぬいとやすき事。殿原めんくんに狸をあつめ給へ。又酒を用意せよといひければ。此ぬしは田舎だちのものなれば。さだめてやうありてこそいふらめと思ひて。をのをのいふがごとくにまうけてけり。其時此男侍のたゞみを。北の對の東の庭にまきて。火をおひたらしむをこして。そこにて此狸をさまぐ調じて。をのく能々食てけり。酒のみのしじりていふやう。いかでかをのれほどの奴めは。大臣家をばかたじけなくうちまいらせけるぞ。かゝるまればとするものどもかやうにためすぞと。よくくねぎかけて。北は勝菩提院なれば。そのふるついでの上へ骨なげあげなどしてよくのみくひてけり。今はよも別の事さぶらはじといひけるにあはせて。其後ながくつぶてうつ事なかりけり。是更にうける事にあらず。ちかきふしぎ。うたがひなき狸のまわざなりけり。

觀教法印が嵯峨の山庄に。うつくしき唐からねこのいづくよりともなく出きたりけるをとらへてかひけるほどに。件のねこ玉をおもしろく取ければ。法印愛してとらせけるに。秘藏のまもり刀を取いて。玉にとらせけるに。件のかたなをくはへて。猫やがてにげはしりけるを。人く追てとらへんとまけれどもかなはず。行かたをまらざうせにけり。此猫もし魔のへんげして。まもりを取てのち。憚る所なくをかして

侍るにや。おそろしき事。

仁治三年大嘗會に人多く参りつどひけるに。外記廳のうち東のかたなるもみの木の梢に髪おつかみなる法師一人ふしたりけり。人あやしみさはぎて。とかく取おろしたれば。死たるがごとく成けり。春日町邊なるものにてぞ侍ける。天狗のまわざにや。ふしぎなりしこと。

これも仁治の比。伊勢の國書生庄より百性之ける法師のほりて。五條坊門富の小路にやどりて居たりけり。役はてくだりけるに。同庄にあひまりたる山寺法師に行あひぬ。いづくへ行ぞと問ければ。庄へくだるよしをかたれば。我もくだる。さらば同道せんといひければ。具してくだると思ふ程に。其道にもあらで思ひがけぬ法勝寺法成寺などにきにけり。心も心ならず鬼に。みとられたるさま。さる程に又七條高倉にきぬ。此山寺法師いふやう。あちこちとありきて喉のかはきたるに。そのさし給へる刀にて酒買かし。我ものみそこにもものんどうるへ給へといへば。われにもあらず買ひつ。さて二人のみてぐして行ほどに。比叡山の邊にきぬ。さる程に見もあらぬ山ぶし三人あひたり。此山伏を見て。此法師恐れをのきるけしきにて。まゝかき事するなどいひてにらみてたり。此法師いよく恐れ入たり。いかなるやうに

みとられ、一本
作かみとられ、
一、本作かこみ
とられ、一本此上
有又字、一本此上
見、原作又、據一
山改、山、
山法師、下同

突、一本作撞○のぼり、原作おりのぼり、一本改

と見る程に。かくいひたる計にて三人ながら過ぬ。其時この人々はたぞ。又かく物いひつる人の名をば何といふぞとへば。あれをばたてるやと申之とこたへて。又具して清水にいたりぬ。鐘樓のうへにゐて行て。いかにかきたりけん檜皮と裏板とのあはひにかづらを持て。ながく。とまばりからめてつりつけて。天狗はうせにけり。刀をさしたりつる程はかくおもふさまにはえせざりつるに。刀をなくせさせて後かくはまたるなめり。鐘突に人ののぼりたりけるに。ものうめきければ。寺僧どもにつけて。裏板をはなちて。かく命いけて問ければ。かくかたりけるとなん。

古今著聞集卷第十七終

古今著聞集卷第十八

飲食第廿八

食者人之本也。八政猶以食爲首。就中釀酒者起自素盞烏尊。凡酣樂之興。何物若之。三友之其一。放遊之紹介也。

飯、原作組、一本作飯更改作組、今意改

中の關白(醍醐)春日の行幸に供奉し給ひたりけるに。御車の内に酒饌をまうけられて。閑院大將(藤原)御堂の入道殿(藤原)などよびのせ奉りて。沉醉の事共有けり。人々(劍)などは

御容儀、一本此下有の字

て、據一本補

づされてけり。御堂殿はをそれ有とて。物まいりて後はやがてありて供奉せさせ給ひけるとぞ。この日の作法によりて。われ神恩をかうぶるとぞ後に仰られける。中關白はかく酒をこのみ給て。つねのとくさに。極樂世界に按察なくば。われ又往生すべからずとぞ仰られける。賀茂詣ての時もあひてぬぶり給ける。車のうちにて御冠おちにけり。やしろちかく成て。人の其よし申ければ。をどろき給ひて扇をもちてびんをなをし給ければ。もとのごとくめてたくなんおはしけるとぞ。御容儀よくおはしけるによりてかくなん侍けるこ。

寛弘三年三月四日。東三條より一條院に行幸有けり。先家の賞ををこなはれて(て)のち。御作文管絃など有けり。又盃酌の興もありけり。内大臣(藤原)御盃を奉らる。中納言俊賢卿御銚子をとる。左府(藤原)天盃を給はりて。例のとくかはらけをうつしてのみて。南階をおりて拜舞ありけり。池邊の櫻の枝を折て。西階をのぼりて袖をひるがへして。警蹕をかまへて主上に奉けり。其後人々のかざしも有けり。

万壽二年正月三日。關白いげ大后へまいり給て盃酌の事有けり。人々酔て後相引で皇太后宮へ參られたりけるに。又酒をすゝめられけり。關白よりしてはじめて。みな酔て哥舞におよびにけり。殿下出させ給ひけるに。春宮大夫(賴宗)。大納言(能信)。續松を取ておくり奉給けり。中納言(道方)。御車のすだれかゝげられけり。いみじかりける

して、一本元、或衍

こと。小野宮記に見へたり。
道命阿闍梨修行しありきけるに。やまうどの物をくはせたりけるを。これはなにも
のぞと問ければ。かしこにひたはへて侍るそまむぎなんこれなりといふを聞てよみ
侍ける。

ひたはへてとりだにすへぬそまむぎにまゝつきぬべき心地こそすれ。
あやしげなるげす男の禪林寺僧正に。瓜を四奉りたりければ。

凡夫、原作凡、
據一、本改

凡夫やつ四果の瓜をぞえさせたるひじりのつらにならんと思ふか。
長谷の前の大僧正五月五日人々くにちまきをくばりけるに。俊惠法師聞て其うちに
いるべきよし申つかはすとてよみける。

あやめをばほかにかりてもふきつべしちまきひくなるうちいらばや。
かへし僧正。

はづかしや淀のあやめをおきながらちまきひくなの空にたちぬる。
知足院殿中納言のとき。堂院にましく中納言宗輔に筆をならはせたまひける
時。辰の刻より申にいたるまで他事なかりけり。その時盃饌をまうけられてさい
いにすゝめられけり。源中納言國信卿其時殿上人にて亭主の陪膳しけり。政長朝臣
納言の饌をすへけり。道長朝臣瓶子をとる。亭主盃を納言にさし給ふ。納言盃給はり

其、原作長、據上
文及補任改、下
同

せ、一本元、當行

た、一、本作さ、
此上下恐有誤
脱、不成歌調
、據一

てのまんとする時。道長朝臣人まいれやとよびて。銚子を他人にゆづらんとす。すな
はち清實。盛長。有賢等參。其時納言のいはく。今日は御師匠を饗應せらるゝ日之。道
長なんぞ瓶子を他人にゆづるべきや。道長もつとも志たかりとてすゝめければ。納言
うち笑あひひける。道長はあよすげものなり。京極の大殿に堀川の左府六條の右府
なりとぞいひける。道長はあよすげものなり。京極の大殿に堀川の左府六條の右府
中宮大夫師忠などつねに參ら「せ」られて盃酌の有ける時も。殿下の前の外は一度も
他人の瓶子にはよらざりけり。有賢等にぞ譲りける。
左京大夫顯輔卿のもとへ或人ことをしておくりたりけるに。さくら花かざしなどし
たりけるを。僧どもおほらかに食けるを。三品の連哥になんし侍りける。

春のはなえだしてみせよかし。
證尊法印つける。

さくらはむにはなにかたうべき。
同卿のもとに盃酌ありけるに。たゝみめにこものをさかかなにまたりけるを見てあ
るじ。

たゝみめにしくさかなこそなかりけれ。
前に有ける青侍のつけ侍ける。

こものこのみやさしまさるらん。

式部大輔敦光朝臣のもとへ。奈良なりける僧のあすかみそといふ物をもてきたりけるに。いつのぼりたるぞととひければ。僧かくなん。

きのふいでしけふもてまいるあすかみそ。

敦光朝臣。

みかのはらをやすぎてきつらん。

法性寺殿(應元三)に皇嘉門院へまいらせ給ひけるに。御くだ物をまいらせられたりけるに。をこしごめをとらせ給ひてまいるよしにて。御口のほどにあてしにぎりくだかせ給ひたりければ。御上のきぬのうへにはらくとちりかゝりけるを。打はらはせ給たりける。いみじくなん侍ける。

鳥羽院御位(仁)のとき。在良朝臣御侍讀にてつねにまいりける。時々酒をのませられるは。彼朝臣愛酒にて侍けるにや。

保延三年九月廿三日。仁金剛院 仁和寺仙洞に行幸有て。十番の競馬を御覽せられけり。日くれければ廿四日にぞ六番以下をば御覽じける。次第の事どもをこなはれて。廿五日先

御遊あり。主上出御。院は藤中におはしましけり。笙内大臣(應)。權大納言(應)。笛宰相中將實衡朝臣。忠基朝臣。中將公能朝臣。ひちりき左衛門佐季兼。琵琶左大臣(應)。新大

して、本作に

先、原作皆、據一本改
おはしまし、原作候、據一本改

菊、一本此下有
に字、

納言(應)。筆左衛門督(應)。和琴宮内卿(應)。拍子左兵衛督(應)。雙調平調つねの御遊には似ず。平調數反有けり。盃酌獻の後(仁)。今様神樂朗詠など有けり。人々悉ひてのち白薄様うたひて。殿上人上達部下薦より亂舞。攝祿左大臣なども舞給ひける。ためしすくなく侍ること(仁)。其後また數反有て。又糸竹の興もありけり。又白薄様うたひて上達部ばかりぞ舞ける。殿下舞給ひて送させ給ければ。人々も座をたゞれけり。そのうち和哥の會あり。題は菊・契(應)千秋とぞ侍ける。按察大納言(應)序をば奉りけり。そのうち勸賞。御引出物有て還御成にけり。
同六年十月十二日。白河の仙洞に行幸の時。御前にて盃酌有けり。家成卿右兵衛督にて侍けるに。包丁すべきよし沙汰ありけれども辭し申けるを。ある殿上人鯉を彼卿のまへにをきてけり。徳大寺左大臣(應)右大將にて侍りけるが。天氣をまつにこそと奏せられたりければ。主上わたらせ給ひてすゝめさせおはしましければ。家成つかうまつりけり。群臣興に入て目をすましけるとぞ。
中院の右大臣(應)鳥羽殿へ參られたりけるに。酒をなんすゝめられけるに。御前に着物有けり。右府のまへにもませくだ物すへられたり。その間に院御笛にて胡飲酒をふかせおはしましたりけるに。右府柑子を箸にさして被にして。秘藏の手をつくしてまはれたりける。いと興有てぞ侍ける。

おくり、一本此下有たり二字

仲胤僧都法勝寺御入講にそく参りたりければ。追出されて院の御氣色あしくてもりるたりけるに。次の年の春人のもとよりこふじのはなをちくりけるを見てよめる。

くひつかれかしらかへていてしかどこふしの花のなをいたき哉。

観知僧都九條の太政大臣(舞)のもとへ平茸をちくるとこそへ侍りける。

たひらかに平の京にすむ人はひらたけをこそくふべかりけれ。

かへし相國。

平茸はよき武者にこそにたりけれおそろしながらすが見まほし。

俊頼朝臣秋のすゑつかたに。田上タノガミといふ所へ罷りたりけるに。いねをかけたつみたるを。あれはなにといふいねぞととひければ。法師子のいねなりといひける。又あしたにきのふの法師子のいねにて御みそうつとてくはせたりければよみ侍ける。

きのふみし法しこのいね夜のほどにみそうつまでに成にける哉。

中御門左大臣(舞)家へ大外記頼業は常に参じけり。参るたびとに必ず瓶子一肴物を座の前にをかれければ。まばし公事の物がたり申て。みづからかたぶけのみつゝひねもす祇候しけり。罷出さまに障子のかみ邊にて。あはれ一の上やとたびごと申ける。いと興ある事。

右大臣、據一本

將、原作臣、據一本改

を、原作に、據一本改
衛門、據補任營
作兵衛

存知、一本此下有二字

さ、一本作す

徳、原作法、據一本改
本補○を、據一本改
に、原作小、據一本改

文治の比。後徳大寺左大臣(舞)右大臣(舞)におはしける時。徳大寺の亭に作泉をかまへられて。中御門左府(舞)へ案内申されければわたり給にけり。其時三條の左府入道(舞)は右大將。中山相國入道(舞)は別當にておはしましける。をのゝく扨従し給けり。亭主手輿を用意してひとへ狩衣きたる侍六人にかへせて。左府の車のもとへむかへに参らせられたりけるを。まきりにのがれ申されけれども。あながちに申されければ。のりて泉へわたり給ひけり。一條二位の入道能保。右衛門督にて侍りける盃酌まうけて候。まうけられける盃酌數献ありて。行孝めしいだされて縁に候して鯉きりたり。左府行孝にまめし給けるは。鯉調備するやうをば存知。たりとも食やうをばまらじ。食て見せんものし給ひけり。まことにやう有げにめてたかりけり。人々目をさまさずといふ事なし。かへり給ひける時。馬牛など引進せられけり。幕下大理には馬ばかりをぞ奉られける。かゝる人々の會合ありがたき事也。其次日北院御室。威徳寺の法印(舞)をもて。寺中にさぶらひながら此事をまらさず。遺恨のこと也と申されければ。御返事にはかたのごとくに泉をかまへて候に。左府をし入候き。入御候はいめんぼくのよし申されたりければ。やがて渡御有けり。又盃酌あり。初献は御室とりあげさせたまひ。二献はちととりあげて御室へまいらせられけり。御ひきでものには御牛などまいらせられけるとぞ。

曉行法印人の許へまかりたりけるに。瓜を取出たりけるがわるく成て。水ぐみたりければよめる。

山しろのほそちと人やおもふらん水ぐみたるはひさごなりけり。

人くあつまりて瓜をくひける所にて。或人方法はみな空なりと云法問を出したりけるを聞て。寂蓮法師よみ侍ける。

なにもみなくうになるべき物ならばいざこの瓜にかはものこさじ。

は、據一本補
滋、一本作藤、恐
非〇實教卿、據
一本補、或傍書
攝入歟

けり、一本作け
る〇さもんげ
り、一本作左衛
門尉
か、據一本補

滋井實教卿入道宰相中將にて侍ける時。梶井宮にまいりけるに盃的有けり。終座に成て宰相中將今は袖まいらばやと侍ければ。すなはち参らせたりけり。或上達部卿家云。袖八柑七とことばをつがひて八にきりたりけるを。宰相中將見てあしく切つる物かなと思ひて。ともかくもいふことなかりけり。宮も御覽じて何とも仰られざりけり。とばかりありて行算まいれやと仰られければ。等身衣にかりばかま着たるさぶらひ法師の。みめよくつきくしげなるまいりたり。その袖きりてまいらせよと仰られければ。腰より包丁刀をぬきたりけり。まづ興有てぞ見へける。存ずる所きりてまいらせたりければ。宮以下入興有けり。件の行算さるもんばうは行孝が弟之けり。其藝舎兄にもはぢざりけるとぞ。袖をば三切にぞ切たる。凡そ袖をきるとは盃酌至極の時の肴物也。盃をとる人必ず三度のも事にて侍とかや。そののみやう。切を見

て一度。盃に入れて一度。食して一度也。宰相中將はこの定にのまれたりける。いみじくぞみへ侍ける。

まつられて、一
本作まつりて
候、一本元

で、一本作す〇
つき、一本元〇
は、據一本補

順徳院の御時。新藏人源邦時分配をまける。極膳以下と侍にて次第の事どもおこなひけり。三献の後一膳判官藤原の康光いひけるは。今夜新藏人ふるまはれて候。康光すでに沈醉に及べり。此うへにあやくしてねがひ物に及ぶべしといふ。邦時みな存知つかうまつられて候。仰を相待こといふ。康光いはく。藤兵衛尉孝時を尋出され候て琵琶をかきならさせて朗詠をすめられ候へかし。さやうに候はゞ猶數盃もかたぶけ侍ぬべしといひけり。孝時其日子細有て祇候しながら其座にはつらならざりけり。主上の御供して時のふだのものと格子に穴をあけて御覽せられける所に祇候したりけり。主上此ことばを聞しめして。孝時これはきくか。其用意もせぬか。いかがして出べきと仰事有けるに。新藏人は御所のかたへ参りて。孝時をたづぬるにあはず。ちからをよばでかへりつきてその山をいふに。康光がいはいく。むかしは雪中のたかな。あはずのやまもも。ねがふにしたがひてもとめ出しけり。これ志のふかきによりて。藤兵衛尉まさしくけさ迄つねの御所に候つる。すみやかに内侍などにもうかひ申され候へといふ。主上又。孝時此うへはたい出よ。わざと中く取つくろふべからず。それはあしかりぬべしとて。御みづから孝時がびんをまもへな

の、一本作く
すまへ、一本此
下有字、此下
或有脱字
次、原作頭據一
本改
か、一本无
候、一本作し

うかひはれ、一
本作うかひ
尉、據一本補
り、一本作け
る

てくださせおはしまして。かぶりのつのをおらせ給ひけり。たゞ今うへぶして候
つる。此にてはいにかいまいり候べきと。まばらくすまへ・とをしへさせ給けれ
ば。このまゝに新藏人におひまらふを志るていひければ。すまひく・出にけり。極龍
すゝめて。非職一高兵衛尉知經がうへにすへけるを。知經いきどをりて座次をみだ
され候とめんぼくなく候へは。いとまを申て罷りたゝんといふを。三龍にて大膳亮
範綱が有けるが。知經がいふことを聞て。あれはおなじ非職なればいたみ申され候
にこそ。範綱座をくだりてすへ申べしとて居くだりけり。範綱いみじく見へ侍りけ
る。さて三龍のかみにつきて侍ける。常座のめんぼくゆしかりけり。此後極龍つね
の御所に候御琵琶をぬすみ出され候へかしといふ。新藏人すなはち座を立て参る
時。そのつゝに御笛をおなじくうかひはれ候へといひけり。すなはち兩物をもて
來りければ。藤兵衛尉琵琶をまらぶ。一龍笛をねとり。其後朗詠あり。孝時新豊酒色
の句を詠ず。極龍并に非職知經助音す。おのゝ興にのりて數献に及びて事はてに
けり。分配近年たえて侍ることを。邦時をこしおこなひけるいみじかりけり。此後は
又たえて今はきこえず。
七月七日むぎなはの房中にたるまじきよし申けるを聞てよめる。法眼長眞。
いかなれば世にはおほかるむぎなはの一房にだにたらぬなるらん。

料紙、一本此下
有字

の、一本无

季經卿泰覺法印がもとへ瓜をつかはして。此瓜くひてこれがかはりには此般若かき
てとて。料紙・一兩巻をくりたりける返事に。
なめ見つる五の色のあぢはひもきはだの紙ににがくなりぬる。
同法印が家の例飯を米の飯にしたりければ。
人はみな米をぞいひにかしぐめるこのみかしぎはいひをこめにす。
あのこのもちをよめりける。
なによりも心にぞつくるのこもちびんぐうすなる物とおもへば。
木ねりの柿をよみ侍りける。
霜をけるこねりの柿はをのづからふくめばきゆる物にぞ有ける。
九條の前内大臣(藤)家に壬生の二位(藤)参て和哥のさた有けるに。二月の事なりける
に。雪にあまづらをかきて二品にすゝめられけり。くひはて、此雪猶候は給て二
條中納言定高のもとへつかはし候はん。かの卿は雪くひにて候へと申ければ。すな
はち硯のふたにもりて出されにけるをつかはしたりければ。かの卿の返しに。
心ざしかみのすぢともおぼしけりかしらの雪かいまのこのゆき。
よまれにけりとて二品しきりに興に入れり。
同二品不食の所勞の比。はずの實ばかりを食するよし聞て。坊城殿の池の蓮の實を

所望してをくり侍し返事に。

老の身にねがふはちすの花のみに君のちとせののちやむまれん。

君の、一本作若
も
ふら、一本作ふ
た

醍醐大僧正實賢。餅をやきてくひけるに。きはめたるねぶり人にて。餅をもちながら
ふら〜とねぶりけるに。まへに江次郎といふ格近者の有けるが。僧正のねぶりて
うなづくをわれに此もちく〜と氣色有ぞと心得て。はしりよりて手に持たる餅をと
りてくひてけり。僧正をどろきて後こ〜に持たりつる餅はと尋ねられければ。江次
郎その餅ははやく〜と候つればたべ候ぬとこたへける。僧正比興の事なりとて。諸
人にかたりてわらひけるとぞ。
石泉法印祐性鞍馬寺の別當にて。かれよりす〜をおほくまうけたるを。ある人のも
とへつかはすとてよめる。

此す〜は鞍馬のふくにてさふらふぞさればとてまたむかてめすなよ。

聖信房弟子どもく〜たちを前にてゆでけるに。なべのはたよりく〜たちの葉のさが
りたりけるを見て。其座に有ける人のいひける。
く〜たちのやいばた〜りて見ゆるかな。

房主うち聞てつけ〜る。

なまいてたれかつくりそめけん。

、據一本補

めでたくこそつけられ侍れ。

別當入道北白川にすみ侍ける比。山のわらびをおりて相國の許へつかはせり。返事
に。

思ひやる二木の松の下わらびありてきつらんみねぞしらる〜。

三條中納言某卿。は人にすぐれたる大食にてぞ有ける。さるにつけてはおびた〜しく
肥ふとりて。夏などに成ぬればくるしくせられけり。六月の比醫師をよびて。かく身
のくるしきをばいか〜療治すべきなどいひて。物くふやうをもくはしく語りけれ
ば。醫師うちうなづきて申けるは。いかにも此肥満そのゆへにてぞ候らん。良薬もあ
また候へども。まづ朝夕の御飯を日來よりはすこし〜められ候て。けふあすはあ
つくも候へば。水飯つけを時々まいり候て。御身のうちをすかされ候へかしとはか
らひければ。げにもさやうにこそせめとて。醫師はかへりにけり。ある時水飯くふや
う見せんとて。かの醫師をよびたりければ來てけり。まつしろがねのはちを口一尺
五六寸ばかりなるに。水飯をうづだかにもりて。おなじきかいをさして。青侍一人お
もげに持て前に置たり。又一人鮎のすしといふ物を五六十計尾がしらをして。それ
もしろがねのはちにもりて置たり。いづれもあなちびた〜しや。われにも饗應せん
ずる料やらむと。醫師は思ひけるほどに。又青侍一人たかつきに大なる銀のうつは

うつは物、一本
作器一字、下同

物二つすへて。中納言のまへに置。此二のうつは物に水飯を入れて。すしをさながら前へをしやりたれば。此水飯を二かきばかりに口へかき入れて。すしを一二づゝ一口にくひてけり。かくすると七八度になりぬれば。鉢なりつる水飯も鮎のすしもみなに成にけり。醫師これを見て。水飯もかやうに参り候はんにはとばかりいひて。やがてにげ出にけるとかや。

ある人のもとにわかき侍どもよりあひて。大鴈をくはんとてきたゝめける所へ。年寄たる侍一人來たりければ。いかゞして此鴈をくはせじとおもひて。殿へめされ給ふに。いそぎ参り給へと。わかき侍どもいひければ。老たる侍この鴈をわれにくはせじとて。かくいふとは思ひながら。其座を立てかたぐにてかくぞよみける。

こゝろえつかりくはんとてわかたうが老たる物をはじきだすとは。

古今著聞集卷第十八終

古今著聞集卷第十九

草木第廿九

草木者有^レ時以^レ死。昔伊弉諾伊弉册尊。既生^ニ木祖句々通馳。次生^ニ草野姫。於戯春有^ニ

座を、一本此下有^レ字
え、一本本作み
老、一本作おも
ひ、恐非是

死、據一本補
冊、當作丹

仰、一本元〇一
二、原作三、今從
一本、同、本又作
三

櫻梅桃李之花。秋有^ニ紅蘭紫菊之花。皆是錦繡之色。酷烈之句也。然而昨開今落。遲速雖^レ異。隨^レ風任^レ露。變衰不^レ遁。似^レ樂^ニ有^レ爲。可^レ觀^ニ無常^一矣。

延喜十三年十月十三日御記云。仰^ニ侍臣^一令^ニ新菊花各十本^一分^ニ二^一番。相^ニ爭勝劣賭^一。以^レ申時^ニ各方領^一花參入。一番入^ニ自^ニ仙花^一。次第進^ニ花立^ニ庭中^一。一番種花以^ニ石洲形^一。二番栽^ニ火左衛門督藤原朝臣^一候^ニ御前^一。傳作^ニ勝負^一。總十番。勝方籬中拜舞。選^ニ進菊中各四本^一。栽^ニ西方小庭^一。十二月九日。二番侍臣獻^ニ負袖^一。菊時負物也。此袖於^ニ射庭^一入^ニ夜出^一待賢門。左衛門督^一權中納言^一侍^一之飲酒。

貞信公なつめをわひしてまいりけり。式部卿親王の家によきなつめの木ありけり。其木をよろし枝にせられて。手づから身づから花山院の北對の西の妻戸の庭前にうへ給ひけり。是によりて其木左右なき名木にていまだ有。花山院太政大臣^一の三位の中將の時。法性寺殿^一攝政にて六條坊門烏丸の御亭より土御門内裏へまいらせ給ふには。近衛東洞院は便路なれば尤此大路をこそとをらせ給ふべきに。いかにもよけさせ給ひけり。をのづから此大路をすぎさせ給ては。東洞院西の四足をばすぎて。その棟門の前にては御車のすだれをよろされ。前駈以下を馬よりよろされけり。人あやしみて其子細を尋申ければ。時の攝政三位の中將をうやまふにあらす。亭に貞信公のまさしく手づからうへ給へる名木あり。かれに禮をいたす。此事京極

かれに、一本此
上有仍字

め、原作け、據一本改

王、一本作公
督、據一本補

侯、據一本補

奉、一、本作參
鶴、一、本作鶴

大殿(鶴)つぶさにしめし給ふ旨分明とぞ仰られける。又池の中島にもちの木あり。貞保親王の木の下の下に岩のうへに座し給て。常に笛をふかせ給ひけり。又四面のついでのおうへには瞿麥をひしとうへられたりければ。花のさかりには色くさまくにて。錦を山におほへるに似たり。これによりて花山の號はありと申める。まことにや。

天曆七年十月十八日。殿上の侍臣左右をわかちてをのく残菊を奉りけり。主上清涼殿東の孫庇南第三の間に出御。王卿東の簀子に候。仰云。延喜十三年侍臣獻菊。彼日只左衛門督藤原定方一人候す。仍不相分左右。至于今日。數人既候。可相分として。右大臣(鶴)。大納言源朝臣(鶴)。參議師氏朝臣。三人を左方とす。大納言藤原朝臣(鶴)。左衛門督藤原朝臣(鶴)二人を右方とす。左菊いまだ仰蒙らざるさきに弓場殿にかきたつ。其後召によりて御前の東庭にまいる。洲濱に菊一本をうへたる。藏人所衆六人してこれをかく。仁壽殿の西の砌の西邊に兵衛府の圓座一枚をしきて。殿上の小舎人一人矢三(侯)をもちて候。洲濱の風流さまくなり。中に銀の鶴に菊の枝をくはへさせて其葉に哥一首をかく。其後右菊や久しうしてまいらせざりければ。たひくもよほしおほせらるるほどに。秉燭に及て奉りければ。それも所衆ぞかきたりける。かずさしの圓座はなし。風流左にをとりたりけり。まろがねの鶴に菊をくは

良、一本元

つ、原作へ、補一本改

へさせて哥をかきたる事左におなじ。右大臣奏し申されけるは。右花其粧劣也。加之數度雖召。良久不獻。然則第一花可爲左勝。仰云。事理也。仍左かずをます。其時大臣座をたちて負方の公卿に罰酒をこなはれけり。勝負あるごとにかくなんをこなはる。つぎに左第二の花をたてまつる。其花あざやかなれどかたぶきふしたりければ。仰によりて負に成にけり。仍左かずをぬく。第三の花左かちて。すなはち亂聲を發して龍王を奏す。左衛門權佐公輔息に小舎人橘信がつかうまつる。けふ次左方公卿侍臣前庭にして拜舞ありけり。其後左方有相朝臣。右方延光朝臣に仰て。鶴のふくむ和哥をめさる。をのくとりてまいりて御座の南邊に候す。則兩人をもてよませられけり。

左哥。

ちとせふるしものつるをばをきながら菊の花こそ久しかりけれ。

右哥。

田鶴のすむ汀の菊はしらなみのおれどつきせぬかげぞ見えける。

其後舞を奏す。左方澁河鳥。左近將曹船木茂眞。舞師長尾秋吉ぞつかうまつりける。右方綾切。右衛門府生秦良佐。近衛身高つかうまつる。後々舞伴の四人(更)に奉仕しけり。左右たも勝負舞のまうけばかりにて。他舞のまうけなかりけるを。俄の仰によ

茂、一本塗抹改
作義
々々一本作に○
更、據一本補

王、一本作公
ける、一本作けり

ぞ、原作て、據一本改

りて餘曲をば供しけり。左万歳樂。太平樂。右石川樂。長保樂等也。舞終りて更に雙調を奏す。管絃にたへたる侍臣等河竹の北の邊に候す。又樂所の輩も同所の東の邊に候て。或はうたひ或は吹彈す。此間に御膳を供す。又侍臣に仰て御箏を奉る。これよりさきに御座の南邊に置物御厨子一脚をたてし。件の御箏ををきまうけたり。式部卿親王和琴を彈じ。源大納言琵琶を彈じけり。御遊をはりて王卿以下に祿を給ふ。又御みきまいりて式部卿親王にたまはせける。親王すなはち御前の階間より庭におりて拜舞し給ひけり。南の長階よりのぼりて座につく。さらに盃をとりて次第にくだりけり。納言御挿頭の儲あり。獻ずべきよし申されけり。南殿の櫻は村上の御時。式部卿重明親王の家の櫻。匂ひとなりとてうつしうへられけるとぞ。其後たびぐの炎上にやけにければ。又あらぬ木をぞうへかへられける。代々の御門このはなを賞せさせ給ひて。花の宴をおこなはる。承久に右馬權頭頼茂朝臣うたれし時又やけにけり。やがて造内裏ありしに。この櫻のたね大監物源光行が家にうつしうへたるよし聞へて。めしてうへられけるとぞ。いづれの時のたねにかありけんおぼつかなし。その櫻もいく程なくてやけぬれば。今は跡だにもなし。くちおしきこと也。

康保三年閏八月十五日。作物所書所相分つて殿の西の小庭に前栽をうへられけり。

大、恐當作中

草、原作單、據一本改、宜參箋注和名抄○秋、一本作秋、恐非是

右大將藤原朝臣(平)朝成朝臣。中渡殿に候し。侍臣等後涼殿の東のすのこに候す。つぎに兩所酒饌をもて男女房にたまふ。夜に入て侍臣唱哥し管絃を奏す。又高光永頼に花の枝にゆひつくところの和哥をとりてよませられけり。公卿侍臣に仰てうたを奉らせけり。右大將延光朝臣ぞ題をば奉りける。十五夜翫後庭秋花とぞ侍ける。深更に及んで侍臣和哥を奉る。保光朝臣をしてよませられけり。さらに又管絃の興ありて其後公卿に祿を給はせけり。天祿三年八月廿八日。規子内親王野宮にて御前のおもに薄蘭しをに草香女郎花萩などをうへさせ給ひて。松虫鈴むしをはなたせ給けり。人々やがてこのものにつけて哥を奉らせられけるに。そのが心づくに我もくと或は山里のかきねにさをしかのたちより。或はすはまのいそにあしたづのありさまむしのすみか。いづれもいと虫をもなかせたり。おほせごととて花のありさまむしのすみか。いづれもいとおかしかりけり。哥のをとりまさりは定てや有べき。誰をしてか定め申べきと仰給ふに。是かれと申す。前和泉守源順朝臣なん。おほやけには梨壺の五人がうち定められ。宮にはをもと人八人がうちにてさぶらふ人ん。これをめしてこそ定めさせられめと申によりて。その事とはなくて今夜すくまじきさだめ事なんあるとてめしたり。かみのつかさたりす。かさのおほいすけの君たち。あなたこなたにさぶらひ給

ふ。加賀の椽橋の正道によみあげさせて。順朝臣にことはらせ。學生爲憲してけふの事をかきをかせ給ふ中に。爲憲なんぢなし源といふべくもなく。千草にほふ花のあたり。庭もきくのやうにまじりにくして侍れば。やむごとなくはみやまのもとよりおひいてたる草のゆかりにて。仰ごとのいなびがたさに心もともにつひにけり。水ぐきしてたてまつりをくその哥ども。順朝臣さだめ申ける判かくなん。

侍從御許

花のみなひもとく野べに去のすゝきいかでか露のむすびをきけん。

長門權守有忠

くらぶ山ふもとの野邊の女郎花露のしたよりうつしつるかな。

兵衛のきみ

さをしかのすだくふもとのまた萩は露けき事のなくもあるかな。

もちきの朝臣

萩の葉にをく白露のたまりせばはなのかたみはおもはざらまし。

判の詞のこりの哥どもあまりにおほくてかきもとめぬなり。

宇治殿四條大納言公任卿と春秋の花いづれかすぐれたると論ぜさせ給ひけり。春は櫻をもて第一とす。秋は菊をもて第一とすと宇治殿仰られければ。大納言梅の候は

と、原作今、據一本改、恐草跡相涉而誤者

なる、據一本補○られ、一、元

ほ、一本作お、恐非是○ける、一本作けり

十月、一本此下有日字

んうへは櫻第一にてはいか候べきと申されければ。梅と櫻との論になりて。自餘の花のさはつぎになりけり。大納言恐をなしてつよく論じ申されずながら。なを春のあけぼのに紅梅の艶なる色すてられがたしと申されける。優にぞ侍ける。江記に見えたり。

長元元年十二月廿二日。昭陽舎のさくらを一本清涼殿ひがしきたの庭にうつしうへられけるに。殿上人どもありたちてふみいためけり。いと興ある事。むかしはかやうにあちこちほりわたし。又はじめてもうへられける。ちか比はかぎりある木の外はうへらるゝ事もなきにや。

永承六年五月五日。内裏に菖蒲の根合有けり。此事去し三月晦日堪能の上達部ひとりふたり殿上人等をめして弓の勝負ありけり。又鷄合も有けり。其勝負なきによりて菖蒲の根をわけて勝負を決せられける。御装束永承四年十月・哥合の儀のとし。中宮皇后宮みなさぶらはせ給ふ。内大臣頼宗。民部卿長家。按察大納言信家。小野宮中納言兼頼。左衛門督隆國。侍從中納言信長。二條中納言俊家。中宮大夫經輔。左宰相中將能長。三位中將俊房。三位少將忠家など参り給ひけり。左右の方人夕べにおよんでまいりけり。まづ御殿に油を供す。其後左右の文臺をたつ。高さ四尺なりけり。南のひさしの座の東の間に東面の妻にかきたつ。洲濱をつくりてしろがねの松をう

て、據一本補
紙、一本此下有
に字

非物、一本作方、恐

等判、原作等判、
一本作等判、今
意改

師房、原作師方、
據補任改
に、一本无

へたり。又おなじき鶴龜をすへたり。沉香をもて岩石を作りてたてたり。其あひだに銀のやり水をながして。其前に机をたてし。其上に書一卷を置く。象眼をもて紙して色紙形を摸して。をのく和哥五首をかく。しろがねをのべて表番として。彩色青くみどり也。虎珀を軸としてしろがねをひもとす。すはまにうちしきあり。あをき色のうすものをもて浪の文になすらふ。長き根五筋をわかねて松の上をき洲のほとりにをけり。かすさしの洲のうへにもをけり。又藥玉五流わかねて洲の上を置く。方の人く東の縁の上に候す。つぎにかすさしの洲濱をたつ。藏人はをかきて文臺の東に置く。石たてし小松をうへたり。菖蒲をつくりてかすさしの物とす。次に又藏人右方の文臺をかきたつ。方二尺ばかりなる其うへに太鼓の臺をたてし。其上に太鼓をたつ。そのまへに蝶舞の童六人をつくりたてし。其根の上をのく和哥をか。みな銀をもてつくれり。又藥玉ながき根をわかねてすはまの邊に置く。藥玉みな金銀にてつくれり。方の人西のすのこに候す。次に霽判のすはまをたつ。藏人一人これをかきて文臺の西のかたに置く。すはまに竹臺のていをつくりて。竹をうへてかすさしの物とす。其後仰によりて公卿をわかちて左右とす。左のかたの公卿相引て御前の簀子をへて東にわたりて座につく。内大臣。師房卿。兼頼卿。信長卿。經輔卿。俊房卿。左頭頭弁經家朝臣。右頭頭中將資綱朝臣す。みて文臺の下に候す。此間に左

にて、一本作仍
○又以下二十四
字、據一本補
なり、一本无

右のかさしのわらはをのく一人其所に候す。件のわらは二人陸國卿の子息也。みな殿上に候しけり。頭弁經家朝臣。良基朝臣をめす。頭中將資綱朝臣。基家朝臣をめす。左右相分て御前に候す。經家朝臣ながき根をとりて良基朝臣にさづけて南のひさしにのべおかしむ。右又かくのごとし。其長短をあらそふ。左の根一丈二尺。右の根一丈二尺にて右勝にけり。又二三番おなじくこれをくらぶ。をのく一丈なりけり。但右方すこしまさりたりけるによりて勝に定められけり。三番を限りとしてとどめられぬ。次に和哥五首をよむ。左の講師長方朝臣。讀師經家朝臣。右の講師隆俊朝臣。讀師資綱朝臣也。判者内大臣(彌)なり。題菖蒲。郭公。早苗。戀祝也。をのくよみをはりてしりぞきて本の座に歸りつく。次に管弦の御調度をめす。和琴民部卿。第二位中納言。琵琶經信朝臣。笙定家朝臣。笛篳篥隆俊。唱哥資仲朝臣。子調子のうち内大臣(彌)御氣色によりて笏をさして。御笛をとりて御座の下にす。みてこれを奉る。主上御笛をとらせおはしまして後。拍子奉仕せらるべきよし内大臣に仰らる。大臣仰を承りて座に歸りつきて安名尊をととなふ。律曲の終りに諸卿に御衣をたまはず。をのく退出。今度殿上人の祿はなかりけるとかや。

經信卿太宰帥に任じて下向の時。八月十五日夜に筑前國筵田驛につきたりけるに。天はれ月あきらかなるに館の前に大きな槻ありけり。枝葉ひろくさしおほひて月

をへだてければ。人をめしあつめてたちまちに其木を切はらせ。月にむかひて夜もすがら琵琶をかきならして心をすまして。天あけぬればたゞれにけり。かゝるすき人も今はなき世なりけり。

堀川院の御時五月五日。江帥菖蒲をたてまつりたりける状に。

進上 水邊菖蒲

千年五月五日

大江爲武

この状を殿上にいだされて人々によめと仰られけれども。誰も其心をしる人なかりけるに。師頼卿其時彌少將とて候けるが。案じえてよみ侍ける。

たてまつりあぐるかはべのあやめぐさちとせのさ月いつかたへせむ。

嘉保二年八月廿八日。上皇鳥羽殿にて前裁合ありけり。兼日に方人をわかたれけり。公卿殿上人藏人所衆御隨身にいたるまで左右をわかたれけり。權中納言基忠卿を左の頭とす。右宰相中將宗通卿を右方の頭とす。此外公卿二人殿上人十余人相わかれけり。南殿の寢のたつみのすみの南面の女院の御方。かしこにてこの輿あり。まづ大殿(關白殿)左大將(相分)左方に候し給ひけり。大臣(中宮太夫)民部卿(右方にさぶらふ。これらは仰によりて當座に分れける。方人左・右衛門督。公實。藤中納言。基忠。江中納言。匡房。右・左衛門督。俊實。治部卿。通俊。宰相中將。宗通。

人、據一本元〇
殿の、一本元〇
こ、據一本補
左、一本此下有
は字、一本有に
右、一本此下有
補字、〇衛門督
補任、〇作兵衛

る、原作而、今從
一本
五、一本此下有
七、一本此下有
當作也、〇長、原
作なり、據一本
改

し、原作ひ、據一
本改

哥、據一本補〇
木工助、一本此
上有右方二字
はさめ、一本本
はさみ、似是

皆直衣。大殿は烏帽子直衣。まづ右方の人々参りて燈臺をたつ。かねての仰によりて風流并にかずさしの具はとめられけり。然る燈臺など美麗にて銀のさらをすへたりけり。前裁五。長檜武者所各二人かきて階の西にこれををく。透長檜に丹青をほどこして。つくりばなをもてかざりたりけり。殿上人方人以下みな布衣之けり。次に左方をよほす。花并に掌燈等遅々まで時刻をしようつりけり。掌燈の具は右方の人を取かくされたりけるにや。頗めんぼくなくぞ侍ける。やゝ久しくきて燈臺を殿上の六位して立させたりけり。其後前裁五長檜を供す。各錦のうちしきあり。すはまのうへにませをゆひて。前裁をうへたりけり。左右をのく。萩女郎花薄菊などをかきたりけり。右方哥紅の薄様にかきたりけり。木工助源明國は扇にぞかきたりける。其後方の六位庭中にをりて和哥をとりて御前にをきけり。其後講師をめす。左宗忠。右能俊之。左右の殿上人階をはさめて欄干に候てをのく。和哥を講じけり。一番講せらるゝ間。右方むしを籠に入れて二籠奉りたりけり。其籠にも哥をつけたり。虫の聲く身にしみていと興ある事之けり。今夜仰によりて左大臣和哥を判じ給ふ。右方勝にけり。人々退出す。右方なを御前に候して和哥を詠じけるとぞ。中右記に見えたり。

陣の、一本此下有源字

長治二年後二月廿日あまりの比。内の女房殿上人少々花を見侍りけるに。廿三日に一枝をおりて奉るべきよし天氣ありけれども口くれて奉らざりけり。其うらみ有とて。次の日左右をわかちて花を合られけり。左方の人々、櫻の枝を折て右衛門陣の後。にうつしたて、五枝をえらびてもて参りけり。備後介有賢朝臣拍子を取て櫻人をうたひけり。管絃をもつけ侍りけり。此花を泉の御所にうつしうへて。釣殿にて御遊有けり。右方花をそかりければ。上達部五人をつかはされけり。洲濱にたて、もて参りけり。其後満座和哥を奉るべきよし勅定ありて人々つかうまつりけり。爲範記に見えたり。嘉應二年九月上旬。京中櫻梅桃李花開て春のそらのとくなりけり。延喜九年八月にもかゝる事侍りけるとかや。そのたびは藤栴栲などもさきたりけり。聖代に此事有。いかなる瑞にか侍らん。

な、原作子、據一本改

五月の比。圓位上人熊野へ参ける道の宿に。あやめをばふかてかつみをふきたりけるを見てよみ侍りける。

かつみふく熊野まうでのやどりをばこもくろめとぞいふべかりける。

からもん、原作うらもん、據一本改
侍、一本此下有

承元四年正月の比。内裏大炊殿にて日給はて、源仲朝以下藏人町へ罷りけるに。大炊御門おもてのからもんよりなへくとある衣冠の人参りけり。主殿官人が朝ぎよめに参るにやと見侍れば。しりさへよられたるうすあをのひとへ狩衣着たる侍一人

けるに、一本作ければ

具したり。誰やらんと見けるに。冷泉中将定家朝臣之けり。只今なにしに参るやらんとあやしく見るに。南殿へむかひて。わたどの、前なる八重櫻のもとにいたりて立たり。花のころにもあらぬに梢を見あげて。や、ひさしく程へて侍を木にのぼせて枝をきらせておろさる。その枝を袍の袖く、みにとりて出にけり。事の様何とはしらねど優に覺えければ。内々其やうを披露してけり。花を賞してつぎ木にせんとてとらせけるにこそと御沙汰ありて。其しるしいひやるべしとみことのり有ければ。女房伯耆くれなるのうすやうに書てつかはしける。

な、原作る、據一本改

なき名ぞとのちにとがむな八重櫻うつさんやどはかくれじもせじ。返し。

くるとあくと君につかふる九重ややへさくはなのかけをしぞ思ふ。

順徳院御時十月のころ。侍従宰相定家卿。大藏卿爲長参内して。をの、鬼間にてやまとからの物がたりしてさぶらひける所へ。御前より詩繪したる硯のふたに菊した。繪にしたる檀紙をしきて。菊の花を一えだ入て。兩人よみてまいらせよとて。兵衛内侍にもたせて出されたりければ。定家卿ははしりたちてにげにけり。爲長卿は詩を作りて奉りけるとなん。いと興ある事。件の詩たづねてしるすべし。定家卿にげられけるも。さだめてやうあるらん。ゆかしくこそ。

ける、一本作けり、一本作ける、一本作ける

同御時内裏にて花あはせ有けり。人々めんに風流をほどこして花奉りけるに。非藏人孝時大きな櫻の枝を兩三人してかゝせて。南殿の池のはたにほりたりける。簡フツを付て大花と書たりけり。此事は孝道がたうはみな鼻の大きなるにりて。院の仰にも鼻が黨とぞ有ける。これによりて大花と簡を付たりけり。比興の沙汰にてぞ侍ける。

泰覺法印五月五日人のもとへ葛蒲をつかはすとてよみ侍りける。

わりなくぞあやめのふちを心ざすちまき馬をや引いたすとて。

御位、據一本補
○御、一本元、或
行、原作大、據一
一本改
うちし、一本作
いづくより

後堀河院御位の御時嘉祿二年九月十一日。例幣に頭中將宣經朝臣以下職事どもま
いりて出御まつ程。人々鬼間によりあつまり居て。何となき物語しけるに。臺盤所
には内侍どもさらぬ女房達も候けり。わた殿には貫首にしたがひたる藏人どもなら
びるて。うちもともなくさまぐの物語いひかはすに。少將内侍臺盤所の御つぼの
かえての木を見出して。此かえてにはつもみぢのしたりしこそうせにけれといひた
りけるを。頭中將聞て。いづれの方にか候けんとして梢を見上げれば。人々もみな目
をつけて見けるに。藏人永繼とりもあへず西の枝にこそ候けめと申たりけるを。右
中將實忠朝臣御劔の役のために参て。おなじく此所に候けるが。此言葉を感じて。此
比は是ほどの事も心とくうちいづる人はかたきにてあるに。優に候ものかなとてう

繼、原作綱、今從
一本

に、一本元

ちめきたるに。人々皆入興して滿座感歎しけり。ままととりあへずいひ出るも又
聞とがむるもいと優にぞ侍りける。古今の哥に。

おなじ枝をわきて木の葉の色づくはにしこそ秋のはじめなりけれ。
と侍るをおもはへていへりけるなるべし。

の、一本元

を、一本元
けり、一本作け
る

二品時賢卿の綾小路壬生の家に。鞠のかゝりに柳三本有けり。其内戌亥のすみの木に
鳥すをくひ侍けるを。いかにおもひけんその鳥そのすをはこびて。むかひの桃の木
につくりてけり。人々あやしみあへりけるほどに。一兩日を経て關白殿より柳を
めされたりけり。二品其時他所に居られたりける程成ければ。御使に向て御教書を
付たりければ。すみやかにむかひて。いづれにてもはからひてほりて参るべきよし
いひければ。御使かのていにむかつて。其柳のうち二本をほりて参るうち。鳥のすく
ひたりし木をむねとほりてけり。鳥は此事をかねてさとりけるにこそ。此木一條殿
にうつされたりけるが二本ながらかれにけり。それに本所に今一本のこりたるも同
じくかれにける。おぼつかなき事也。友木かるればかるゝ事にや。ちかく滋野井の柳
を一本他所へうつしうへたりけるにも。此定にのこりの木ゆへなくかれたりけると
ぞ。

建長元年二月。前太政大臣(顯)家に行幸ありて。しばし内裏にて侍けるころ。一院の